

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 259

林原古墳群

栗井大塚古墳群

2022

岡山県教育委員会

序

本書は、一般県道野々口長岡線改良工事に伴い平成元年度に実施した林原古墳群5・6号墳の発掘調査、及び一般県道楨谷西山内線改良工事に伴い平成元・2年度に実施した栗井大塚古墳群2・14号墳の発掘調査の報告書です。

林原古墳群は、旭川の屈曲部に形成された狭い氾濫原上という特異な立地から旭川の舟運に従事した人々の墳墓として注目されてきました。発掘調査を行った5号墳の横穴式石室は、遺存した副葬品は乏しいものの、石室を再利用した中世の墓から和鏡や白磁碗・皿が出土しており注目されます。

栗井大塚古墳群では、新規発見となる14号墳の横穴式石室から数多くの須恵器や弓の飾り金具などが出土し、5体以上の埋葬が明らかとなつたこと、大形の横穴式石室をもつ2号墳の周溝が確認できたことなど大きな成果がありました。

これらの古墳は、やむなく記録保存の措置を講ずることとなりましたが、現地に残された古墳には説明看板が設置されるなど、地元の貴重な文化財として大切に保存されているところです。

諸事情により報告書刊行が遅れておりましたが、ようやくここに刊行の運びとなりました。本書が、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、地域の歴史に対する理解を深めるための資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、土木部道路建設課をはじめとする関係機関や多くの地元地区の皆様から御理解・御協力いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 大橋 雅也

例　　言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が岡山県土木部道路課（当時）から依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した、一般県道野々口長岡線（現在は、岡山県道81号東岡山御津線）改良工事に伴う林原古墳群5・6号墳の発掘調査及び一般県道横谷西山内線（現在は、岡山県道76号総社三和線）改良工事に伴う、粟井大塚古墳群2・14号墳の発掘調査報告書である。
- 2 林原古墳群は、岡山市北区牟佐林原1730-1ほかに、粟井大塚古墳群は、岡山市北区粟井2510-1ほかに所在する。
- 3 林原古墳群の発掘調査は、平成元年8月1日～10月30日にかけて実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員 椿 真治が担当した。粟井大塚古墳群の発掘調査は、平成2年3月16日～3月20日（第1次調査）、平成2年4月23日～7月12日（第2次調査）にかけて実施し、同センター職員 宇垣 匠雅が担当した。
- 4 調査面積は、林原古墳群が500m²、粟井大塚古墳群は800m²である。
- 5 本書の作成は、令和3年度に実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員 弘田和司が担当した。
- 6 本書の編集及び執筆は、弘田が行った。
- 7 本書の遺構写真は、調査担当者の撮影である。遺物の写真撮影については、江尻泰幸の援助と協力を得た。
- 8 本発掘調査に係る出土遺物・図面・写真は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）において保管している。
- 9 本報告書作成にあたっては、椿 真治氏（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）から、資料調査の協力並びに有益な御教示を得た。記してお礼申し上げる。

凡　　例

- 1 本書に用いた高度は海拔高である。
- 2 本書に用いた北方位は磁北である。
- 3 全体図、個別遺構図、遺物実測図には、それぞれ縮尺を明記している。土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 4 本書に収載した遺物図のうち土器以外は、土製品：C、石製品：S、金属製品：M、玉類：Jのとおり遺物番号の前に記号を付した。
- 5 遺物の観察表に記載した色調は、「新版標準土色帳」による。
- 6 古墳群と周辺遺跡（第2・3図）は、国土地理院発行の1/50,000地形図「岡山北部」・「和氣」に「おかやま全県統合型GIS」の遺跡分布図を合成し、作成した。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

序 章 1

 第1節 遺跡を取り巻く環境 1

 第2節 林原古墳群について 4

 第3節 粟井大塚古墳群について 6

 第4節 調査に至る経緯と経過と報告書作成 8

第2章 林原古墳群の調査 13

 第1節 調査概要 13

 第2節 林原5号墳 15

 第3節 林原6号墳 25

 第4節 古墳に伴わない遺構・遺物 26

第3章 粟井大塚古墳群の調査 28

 第1節 粟井大塚14号墳 28

 第2節 粟井大塚2号墳 41

 第3節 古墳に伴わない遺構・遺物 42

第4章 考 察 45

遺物一覧表 48

図 版

抄 錄

図 目 次

第1図 古墳群の位置 (1/200,000) 1	第29図 粟井大塚14号墳周溝土層断面 (1/40) 29
第2図 林原古墳群と周辺遺跡 (1/50,000) 2	第30図 粟井大塚14号墳西側列石 (1/40) 29
第3図 粟井大塚古墳群と周辺遺跡 (1/50,000) 3	第31図 粟井大塚14号墳閉塞石・墳端列石 (1/60) 30
第4図 林原古墳群分布図 (1/2,500) 5	第32図 粟井大塚14号墳石室羨道部断面 (1/60) 31
第5図 大塚古墳群分布図 (『吉備郡史』) 6	第33図 粟井大塚14号墳閉塞部・墳端部断面 (1/60) 31
第6図 粟井大塚古墳群分布図 (/2,000) 7	第34図 粟井大塚14号墳墳端部土器出土状況 (1/30) 31
第7図 計画路線と林原5・6号墳 (1/1,500) 8	第35図 粟井大塚14号墳横穴式石室 (1/60) 32
第8図 粟井大塚古墳群1次調査 (1/400) 9	第36図 粟井大塚14号墳石室内土層断面 (1/30) 33
第9図 粟井大塚古墳群トレーンチ (1/60) 10	第37図 粟井大塚14号墳床面遺物出土状況 (1/30) 34
第10図 林原5・6号墳調査前測量図 (1/300) 13	第38図 粟井大塚14号墳埋葬施設1 (1/30) 34
第11図 林原5・6号墳調査後測量図 (1/200) 14	第39図 粟井大塚14号墳埋葬施設2 (1/30) 34
第12図 T 3断面 (1/30) 14	第40図 粟井大塚14号墳出土遺物1 (1/4) 35
第13図 T 1・4、前庭部土層断面 (160) 15	第41図 粟井大塚14号墳出土遺物2 (1/4) 36
第14図 林原5号墳墳端列石 (1/60) 16	第42図 粟井大塚14号墳出土遺物3 (1/4) 37
第15図 林原5号墳墳丘土層断面 (1/60) 17	第43図 粟井大塚14号墳出土遺物4 (1/4) 38
第16図 林原5号墳石室土層断面 (1/60) 18	第44図 粟井大塚14号墳出土遺物5 (1/2) 39
第17図 林原5号墳横穴式石室 (1/60) 19	第45図 粟井大塚14号墳出土遺物6 (1/3) 40
第18図 林原5号墳床面遺物出土状況 (1/60) 20	第46図 粟井大塚2号墳横穴式石室 (1/80) 41
第19図 林原5号墳出土遺物1 (1/4) 21	第47図 粟井大塚2号墳周溝断面 (1/30) 41
第20図 林原5号墳出土遺物2 (1/4) 22	第48図 古墳に伴わない遺構配置 (1/300) 42
第21図 林原5号墳出土遺物3 (1/2) 23	第49図 土抗・炉 (1/30)、溝 (1/60) 43
第22図 林原5号墳出土遺物4 (1/3) 23	第50図 古墳に伴わない遺物 (1/3) 44
第23図 林原5号墳出土遺物5 (1/3) 24	
第24図 林原6号墳横穴式石室 (1/80) 25	
第25図 中世墓 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) 26	
第26図 古墳に伴わない遺物 (1/4) 27	
第27図 粟井大塚14号墳墳丘 (1/100) 28	
第28図 粟井大塚14号墳墳丘土層断面 (1/60) 29	

表 目 次

表1 林原古墳群一覧 4	表3 文化財保護法に基づく提出書類 12
表2 粟井大塚古墳群一覧 6	表4 弓飾り金具出土古墳 47

図版目次

林原古墳群

- 図版1 1 調査前風景（南西から）
2 林原5号墳前庭部土層断面（南から）
3 林原5号墳墳丘断面（北から）
図版2 1 林原5号墳石室裏込め断面（南から）
2 林原5号墳外護列石（南から）
3 林原5号墳石室天井石（北から）
図版3 1 林原5号墳横穴式石室（北から）
2 林原5号墳閉塞石（南から）
3 林原5号墳遺物出土状況（北から）

- 図版4 1 林原5・6号墳周溝断面（南から）
2 林原5号墳石室奥壁（南から）
3 林原5号墳石室左側壁（南東から）
図版5 1 林原5号墳石室左側壁（東から）
2 林原5号墳完掘（南から）
3 中世墓（北から）
図版6 須恵器・土師器・白磁
図版7 玉類・金属製品1
図版8 金属製品2・弥生土器

粟井大塚古墳群

- 図版9 1 トレンチ5（西から）
2 トレンチ2・3（南西から）
3 粟井大塚14号墳全景（北東から）
図版10 1 粟井大塚14号墳周溝（北から）
2 粟井大塚14号墳掘り方土層断面
(北東から)
3 粟井大塚14号墳前庭部（北西から）
図版11 1 粟井大塚14号墳石室奥壁（北東から）
2 粟井大塚14号墳石室左側壁（南東から）
3 粟井大塚14号墳石室掘り方（南西から）

- 図版12 1 粟井大塚14号墳遺物出土状況（北から）
2 粟井大塚14号墳遺物出土状況（南東から）
3 粟井大塚14号墳埋葬施設1（南東から）
図版13 須恵器1
図版14 須恵器2
図版15 須恵器3・土師器・亀山焼
図版16 玉類・金属器・石製品

本文写真目次

- 写真1 粟井大塚1号墳石室 45
写真2 粟井大塚10号墳石室 45

- 写真3 粟井大塚11号墳石室 45

序 章

第1節 遺跡を取り巻く環境

林原古墳群

蒜山高原に端を発する旭川は、岡山県のほぼ中央を南流し、現在の岡山市北区祇園から三野付近で岡山の平野に到達すると幾重にも枝分かれをして瀬戸内海へと注ぐ。林原古墳群が位置する岡山市北区牟佐地区は、岡山平野の北東端を占めるが、その上流部である同市北区御津町野々口にかけては、川の両岸に丘陵が迫り、可耕地が乏しいことから同古墳群以外に遺跡の存在はあまり知られていない。

林原古墳群のこの立地上の特徴について、西川宏氏は、「旭川の屈曲部に形成された狭い氾濫原上にある岡山市林原古墳群は、6基の横穴式石室墳からなるがこの特殊で孤立的なしかも旭川との関係以外には考えられない立地は、舟運に従事した世帯共同体の集団の墓地であろう。」（『吉備の国』学生社 昭和50年）と述べた。

牟佐地区では、林原古墳群から1.5kmほど下流側に牟佐大塚古墳が所在する。本書に報告する林原5号墳とは地理的にも時期的にも近い古墳である。石室全長18mという石室規模から、こうもり塚古墳や箭田大塚古墳と並び吉備の三大巨石墳と称され、玄室内には石灰岩製の家形石棺を安置する。この地点は、律令期の官道である山陽道が旭川を渡る交通の要衝にあたる。そのような場所に、古墳時代後期後半の有力首長墓が築かれていることは早くから注目されてきたところである。

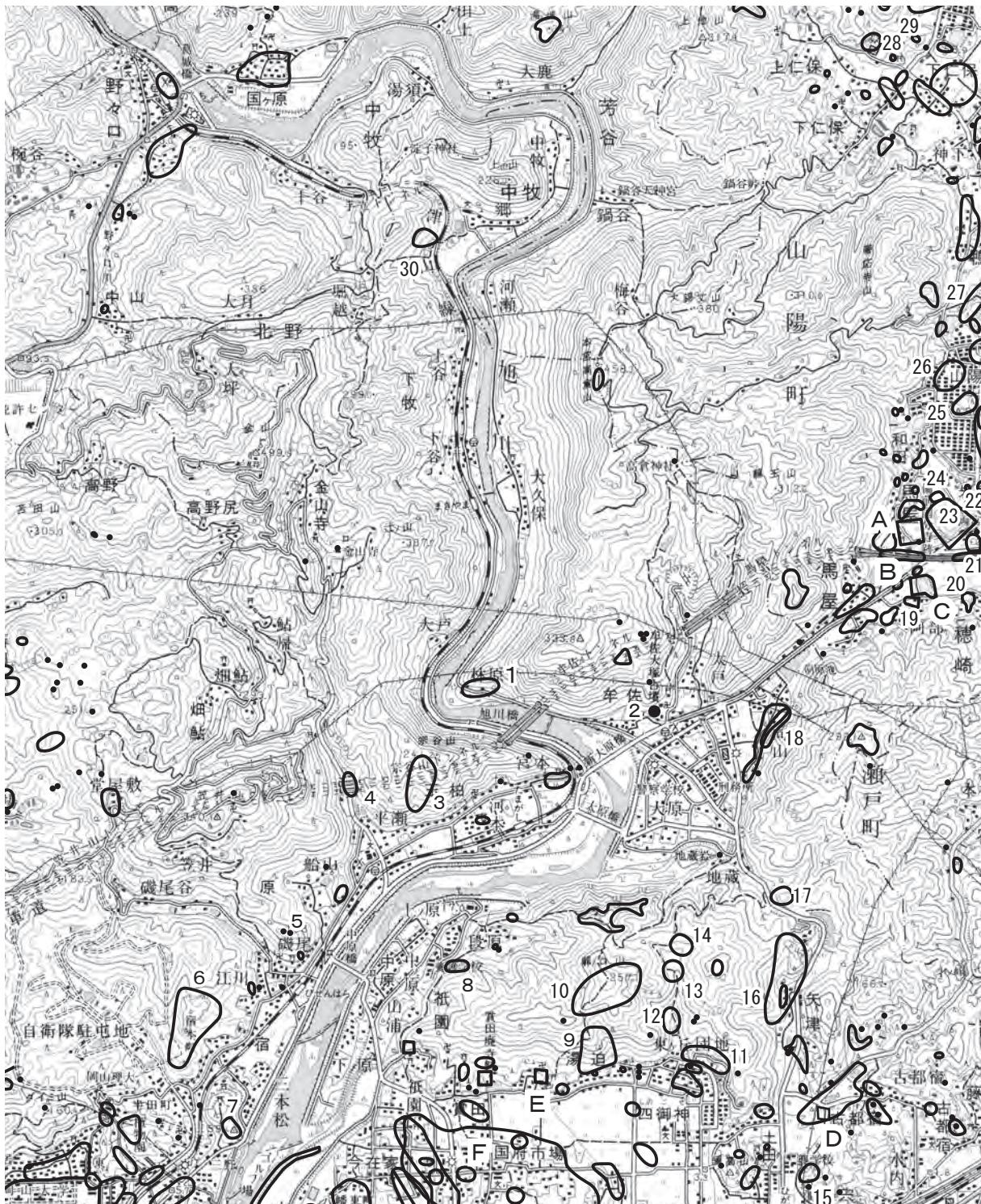
粟井大塚古墳群

粟井大塚古墳群は、岡山市北西部に位置する足守地域の一角に所在し、足守川の支流である浮田川が形成する開析谷に沿って十数基の後期古墳が点在する。現在の足守市街地の中心には、幕藩期の木下家足守陣屋跡が所在し、周辺の丘陵上には弥生時代の集落・墳墓から戦国時代の山城跡に至るまで数多くの遺跡が密集する。平安時代末期に描かれた「足守荘絵図」からも、足守の地が足守川を中心とした肥沃な平野という生産基盤に裏付けられて発展してきたことをうかがい知ることができる。また、足守の地は陰陽を結ぶ街道「大山道」の帰結点にほど近く、天正10年の備中高松城の戦役では、織田方と毛利方との間で激しい攻防戦が繰り広げられた地としても知られる。

一方、粟井大塚古墳群をはじめ足守川やその支流をわずかにさかのぼった吉備高原の南端域では、上高田古墳群などが存在するものの、南側の平野部と比べると遺跡数は少ない。粟井古墳群の位置する、浮田川に沿いは、総社市北部との間を結ぶ間道であるが、中世城郭が2城存在する以外に遺跡の存在は知られていない。



第1図 古墳群の位置 (1/2,000,000)



- | | | | |
|-----------|--------------|------------|-------------|
| 1 林原古墳群 | 10 龍ノ口山頂古墳群 | 19 朱千駄古墳 | 28 大坂古墳群 |
| 2 車佐大塚古墳 | 11 名称未定古墳群 | 20 小山古墳 | 29 吉原古墳群 |
| 3 宗谷山古墳群 | 12 四御神谷口古墳群 | 21 森山古墳 | 30 正木山古墳群 |
| 4 平瀬古墳群 | 13 四御神奥池古墳群 | 22 正免東古墳 | A 備前国分寺跡 |
| 5 片山古墳 | 14 四御神奥池奥古墳群 | 23 兩宮山古墳 | B 馬屋遺跡 |
| 6 宿古墳群 | 15 往來神社古墳群 | 24 和田茶臼山古墳 | C 備前国分尼寺跡 |
| 7 神宮寺山古墳群 | 16 矢津古墳群 | 25 野山古墳群 | D 古都廃寺 |
| 8 名称未定古墳群 | 17 塩見塚古墳群 | 26 四辻古墳群 | E 賞田廃寺 |
| 9 湯迫古墳群 | 18 向山古墳群 | 27 熊崎古墳群 | F 備前国府関連遺跡群 |

第2図 林原古墳群と周辺の遺跡 (1/50,000)



第3図 栗井大塚古墳群と周辺の遺跡 (1/50,000)

第2節 林原古墳群について

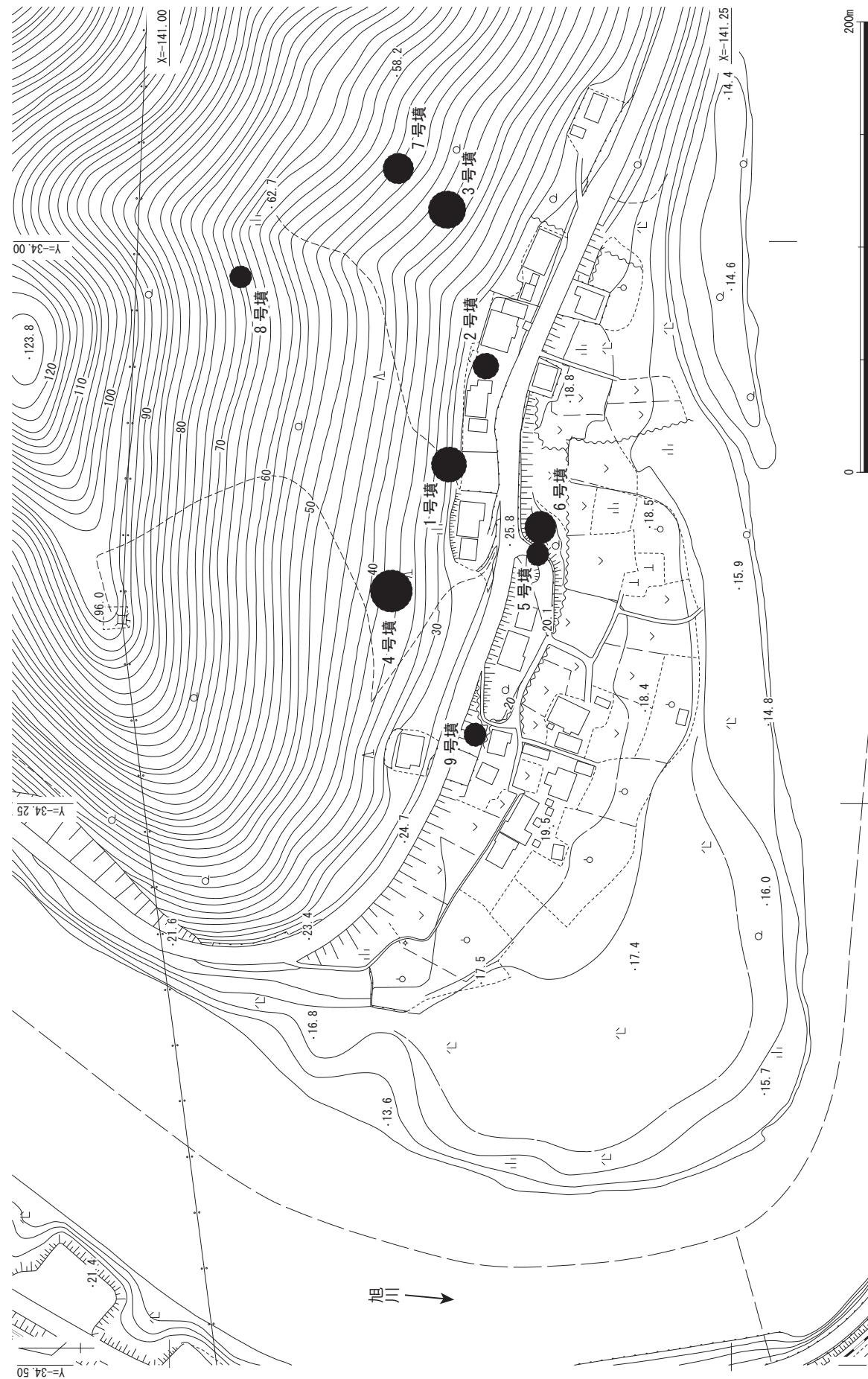
『岡山市遺跡地図』(岡山市教育委員会 昭和59年。以下、『市遺跡地図』)では、林原古墳群を7基の古墳群として記載している。県道改良工事に伴う林原古墳群の発掘調査に際し、この7基の古墳の石室形式や規模を『市遺跡地図』と照合したところ、古墳の位置・名称と立地・概要が一致していないという問題が生じた。よって発掘調査では、調査対象の古墳をそれぞれ仮称5・6号墳として実施することにした。さらに、周辺部の踏査によって7基のうちの「1基は古墳では無いが(7号墳か?)、2基の古墳を新たに発見」(『岡山県埋蔵文化財調査報告20』平成2年)している。

本報告書作成に当たって、先の問題点を解消させるために改めて踏査を行い、GPSを用いて正確な古墳の位置を計測した。踏査の結果、仮称5号墳が『市遺跡地図』の6号墳であり、仮称6号墳が『市遺跡地図』一覧表番号の14-14古墳であることが判明した。さらに、従来知られていた7基より谷奥の斜面に立地する古墳2基を確認したが、これは発掘調査時に新規発見した2基と同一の可能性が高いと思われる。よって本書では、現在確認できる9基の古墳(第5図・表1)について、改めて林原古墳群1号墳から9号墳として報告する。

各古墳の現状をみると、1号墳は墳丘が半壊しており、左片袖式の横穴式石室は羨道部に土砂が流入する。この石室のみが、他の古墳と異なり石室が東向きに開口している。集落内に位置する2号墳の横穴式石室は、かつては開口していたが現在は完全に埋没している。3・4号墳は、墳丘、周溝、横穴式石室とも遺存状況が良い。新規発見の8号墳は、径10mの円形を呈し、周溝と石室と思われる落ち込みを確認した。同じく9号墳は、径8mの円形を呈し、古墳背後の丘陵を明瞭にカットしている。発掘調査時には幅1mの横穴式石室がわずかに開口していたが、現在では石室に土砂が流入し、完全に埋没している。なお、7号墳については、石室は確認できないものの墳丘とおぼしき高まりは存在することから一覧表に留めた。

表1 林原古墳群の一覧

本報告	『岡山市遺跡地図』(S58年)		『埋蔵文化財発掘調査報告20』(H元年)	『岡山県遺跡地図』H15年		概要	備考
	地図No	名称		地図No	名称		
1号墳	14-13	4号墳	—	1551	1号墳	墳丘削平。左片袖式石室。石室全長8.2m以上。玄室長4.7m、幅2.4m、羨道幅1.5m。	
2号墳	14-11	2号墳	—	1552	2号墳	径15mの円墳。横穴式石室。石室全長4m以上、幅1.2m。	
3号墳	14-12	3号墳	—	1553	3号墳	墳丘削平。無袖式石室。石室全長4.3m以上、幅1.5m、高さ1.95m。	現在、石室は埋没
4号墳	14-16	5号墳	—	1255	5号墳	径15mの円墳。周溝。無袖式石室。石室全長4m。玄室幅1.35m、高さ1.4m。	
5号墳	14-15	6号墳	5号墳	1556	6号墳	径13mの円墳。石室全長8.8m、幅1.2m。	墳丘の一部を調査
6号墳	14-14	—	6号墳	1554	4号墳	径15mの円墳。石室全長7m以上、全室長4.6m、全室幅2~2.4m。	調査後消滅
7号墳	—	—	新規発見	—	—	径10mの円墳。石室は埋没。	
8号墳	—	—	新規発見	—	—	径8mの円墳。山寄せ。幅約1m。	現在、石室は埋没
9号墳	14-17	7号墳	—	1557	7号墳	—	



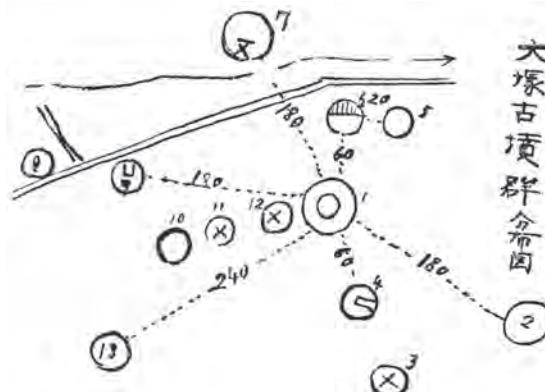
第4図 林原古墳群分布図 (1/2,500)

第3節 栗井大塚古墳群について

『吉備郡史』（永山卯三郎著 昭和12年）では、大井村字栗井に所在する大塚古墳群について、計13基のうち現存は4基と紹介している。大塚古墳群の分布図（第5図）中の1を大塚（本塚）とし、略測図を掲載して石室の規模を全長36尺、幅74寸と記述する。分布図中の6は北塚で、「半圓形のものを存す」とし、石室全長41尺5寸、奥石幅62寸等としている。北塚の東側（図中の右）にある5を「廢墟、今水田となる」と記すが、北塚（2号墳）の東側には古墳の存在は認められず、東西の位置関係を誤記入とすれば、本報告の14号墳がこれに該当する。

『市遺跡地図』では、『吉備郡史』の大塚を2号墳（両袖式石室）、北塚を1号墳（片袖式石室：栗井大塚）としたが、県道改良に伴う発掘調査にあたっては、『吉備郡史』の記述に従い前者を1号墳に、後者を2号墳とし、新規発見の古墳を14号墳と命名した。

古墳群の範囲について、『市遺跡地図』では、第5図の2・7・8・13を省き、新規発見の古墳を加えて13基にしている。本報告では、第5図の7は栗井大塚古墳群に含め、単独墳の2・8・13は古墳群からは除き、1～14号墳の14基からなる古墳群（第6図・表2）とした。なお、第6図の4～9・12・13は、現在は墳丘状の高まりや石室石材を残すのみである。



第5図 大塚古墳群分布図（『吉備郡史』）

表2 栗井大塚古墳一覧表

本報告	『吉備郡史』昭和12年※1	『岡山市遺跡地図』昭和58年 地図No	『理文報告』21※2 名称	改訂『岡山県遺跡地図』(第6分冊 岡山地区) H15年	
				名称	墳丘規模
1号墳	栗井大塚	37-124	栗井大塚古墳群 2号墳	1号墳	2号墳 山麓。径約2.5m、高3~4mの円墳。周溝あり。両袖式の横穴式石室。石室残存長10.7m。玄室長4.4m、幅2.4m。
2号墳	北塚	37-125	栗井大塚（栗井 大塚古墳群）1 号墳	2号墳	1号墳 山麓。円墳。径20m、高2m。片袖式の横穴式石室。石室残存長12.2m。玄室長5.5m、幅2.05m。羨道幅1.6m。
3号墳	南塚	37-122	栗井大塚古墳群 3号墳	3号墳	山腹。径15m、高1.5~4mの円墳。山寄せ。横穴式石室。石室全長7m以上。玄室幅2.05m。
4号墳		37-126	栗井大塚古墳群 4号墳	4号墳	山麓。径15mの円墳。横穴式石室。墳丘、石室大きく破壊。
5号墳		37-128	栗井大塚古墳群	5号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室か。
6号墳		37-123	栗井大塚古墳群	6号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室か。
7号墳		37-127	栗井大塚古墳群	7号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室か。
8号墳		45-7	栗井大塚古墳群	8号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室。石室大きく破壊。
9号墳		45-8	栗井大塚古墳群	9号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室。石室大きく破壊。
10号墳	乞食塚 (道ノ上ノ塚)	45-11	栗井大塚古墳群 10号墳	10号墳	山麓。径13m、高2~4mの円墳。片袖式の横穴式石室。石室全長9m。玄室長4.9m、幅19.5m。玄室奥に石障。
11号墳		45-6	栗井大塚古墳群	11号墳	山腹。径10m、高3mの円墳。横穴式石室。石室全長3.5m以上。玄室幅1.65m。
12号墳		45-10	栗井大塚古墳群	12号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室か。
13号墳		45-9	栗井大塚古墳群	13号墳	山麓。墳丘削平。横穴式石室か。
14号墳	廃墟		14号墳	14号墳	県道改良工事に伴い発掘調査。2号墳の西。径12m。片袖式の横穴式石室。石室長8.1m。少なくとも5体以上の埋葬があったと考えられる。
—		45-12		名称未	山腹。尾根上。横穴式石室。
—	道ノ下ノ塚	45-13		名称未	山麓。墳丘削平。右片袖式の横穴式石室。石室全長4.6m。玄室長3.4m。幅1.25~1.4m。石室一部壊れている。
—	東南ノ塚	37-121		名称未	山腹。径10m、高さ2.5mの円墳。横穴式石室。石室全長2.5m以上。玄室長2.5m、幅1.05m。右片袖式か。石室大きく破壊。

*1 永山卯三郎『吉備郡史』昭和12年 *2 『岡山県埋蔵文化財報告』21 平成3年



第6図 粟井大塚古墳群分布図 (1/2,000)

第4節 調査に至る経緯と経過と報告書作成

1 調査に至る経緯と経過

林原古墳群

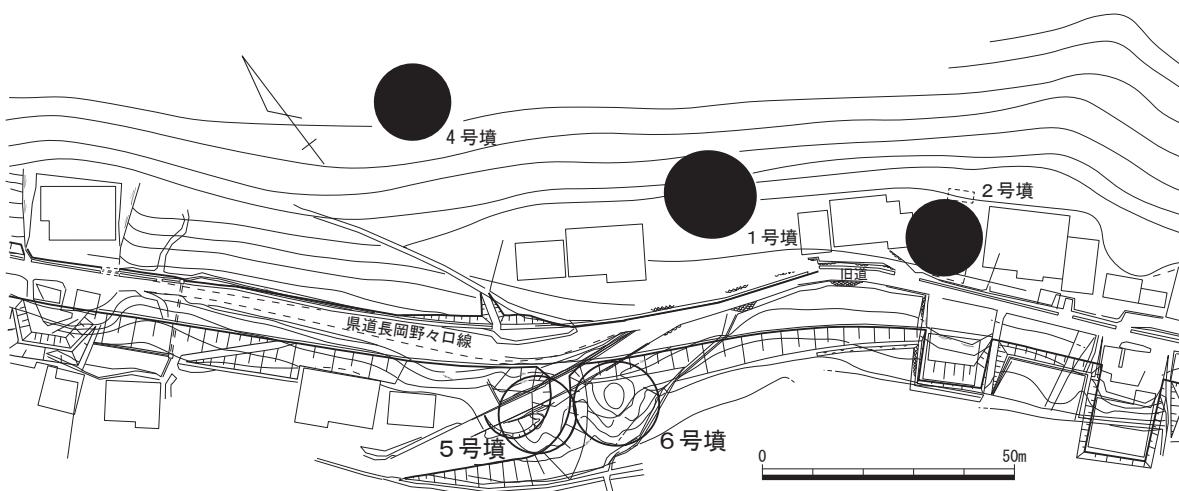
一般県道81号野々口長岡線は、岡山市中区下と北区御津野々口を結ぶ県道である。その路線の大半は旭川左岸にあたり、県道東側の丘陵部と河川敷の間は幅員がきわめて狭いことから、改良工事が計画されることとなった。この工事対象範囲内には周知埋蔵文化財包蔵地である林原古墳群が存在するため、県土木部道路課（当時）との間で協議を行なった結果、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成元年8月1日から開始した。調査前の5号墳は、墳丘が径13mの円形を呈し、天井石の一部が露出していた。墳丘中心から南北方向にトレンチを設定し、周溝や墳丘端を確認して調査範囲を確定した。墳丘表土の除去後、転落している天井石についてクレーン車による撤去作業を行い、石室内には土砂が流入していたが、それを掘り下げる過程で両側壁は土圧で内側にはらみ危険であることからジャッキで両壁を固定して掘り進めた。

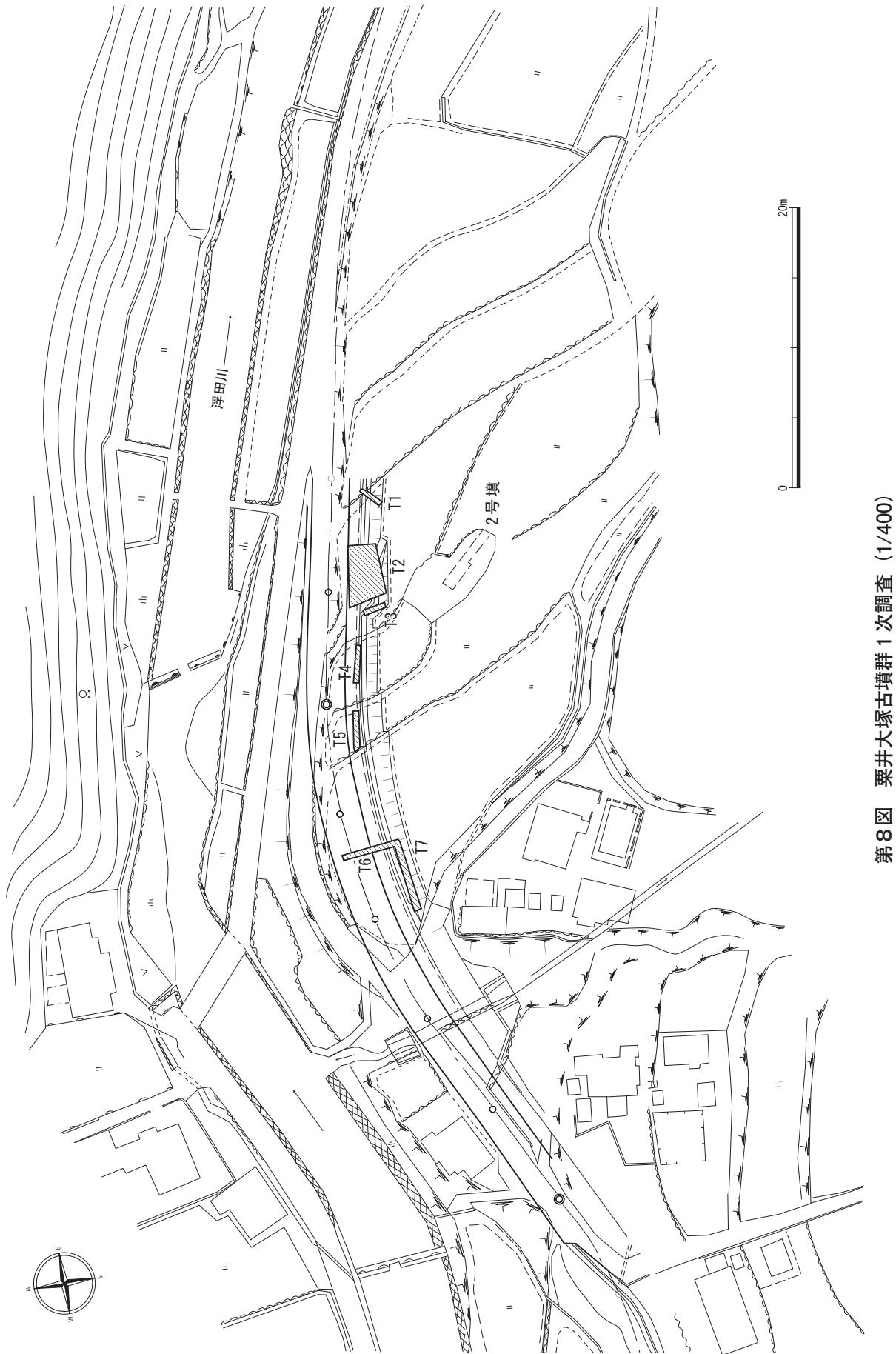
6号墳は、直径14m、高さ5m程の円形を呈しており、横穴式石室が開口することは従来から知られていた。工事計画では墳丘に対する直接的な影響は無いことから、範囲確認のためのトレンチを2か所設定したほかは、石室の実測作業に留めた。10月30日には6号墳の石室実測作業を終了させ、発掘調査を終了した。

粟井大塚古墳群

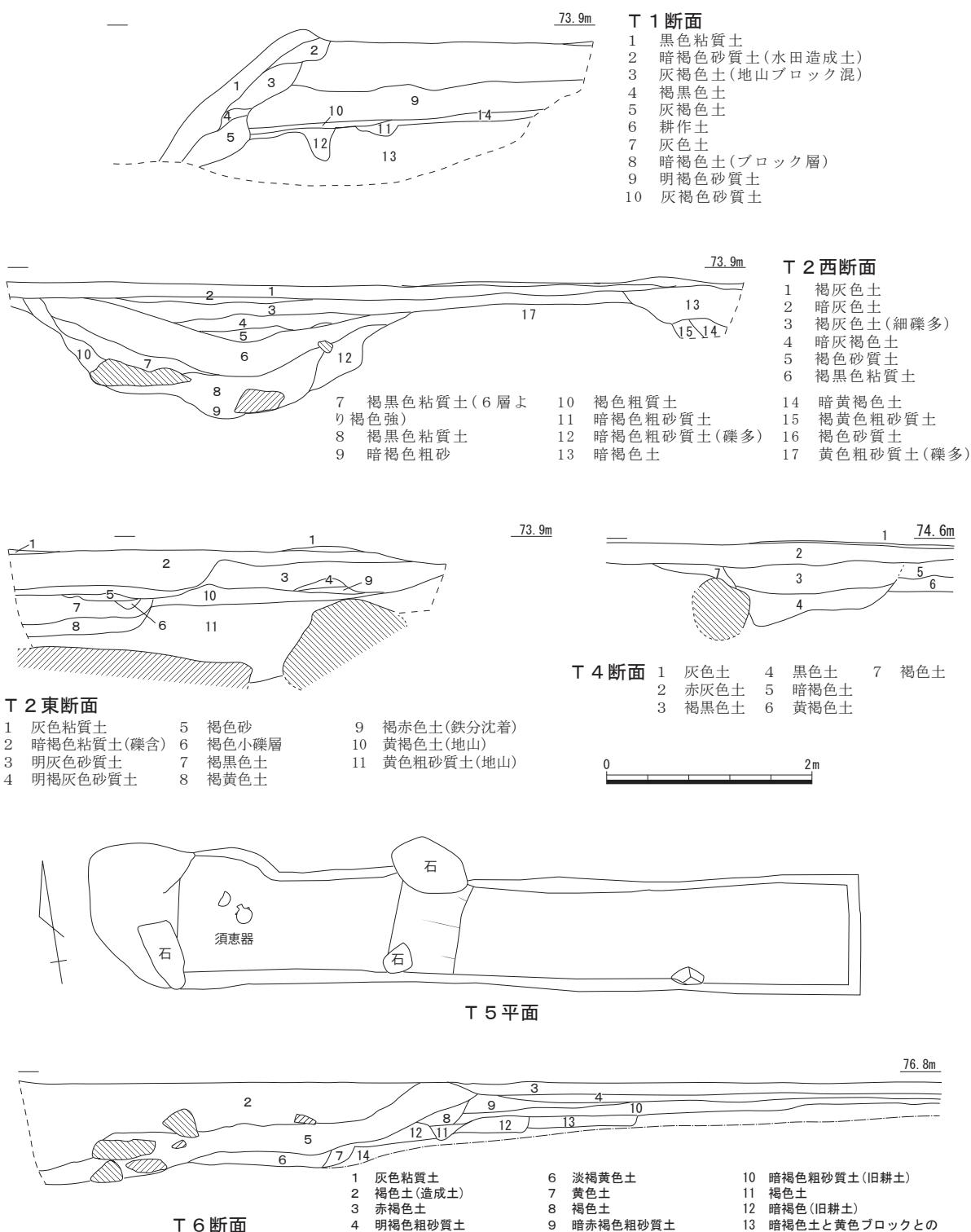
一般県道76号楨谷西山内線は、岡山市北区三和と総社市楨谷を結ぶ総延長約14.7kmの県道であるが、幅員は非常に狭く、かつカーブも連續し見通しも悪いことから2車線化の改良工事が計画された。岡山市粟井地区では、この県道拡幅範囲に近接して周知の埋蔵文化財包蔵地である粟井大塚2号墳が所在していた。粟井大塚2号墳は、全長12m程の横穴式石室が残るもの墳丘は大きく削平を受けて本来の墳丘規模は不明確であり、道路拡幅工事によってその墳端が削平されるおそれがあったため、県土木部道路課（当時）と協議の結果、発掘調査を実施する運びとなった。



第7図 計画路線と林原5・6号墳 (1/1,500)



調査は、平成2年3月16日～3月20日の間を第1次調査として2号墳周辺の確認調査（T1～7）を行い、2号墳の周溝及び時期不明の溝（T4）を確認した。さらに、T5において古墳の石室石材及び須恵器を検出したことから、現水田の耕作土下に横穴式石室を主体部とする古墳（14号墳と命名）の存在が明らかになった。このため、平成2年4月23日から7月12日の間、第2次調査として14号墳の調査を行った。



第9図 粟井大塚古墳群トレンチ (1/60)

2 報告書作成

発掘調査終了後も、大規模事業に係る発掘調査に追われ、出土品の水洗、復元作業等を実施したものの、報告書刊行に必要な整理期間の確保が困難な状況であったため、やむなく報告書が未刊行となっていた。

こうした未刊行資料の整理について、令和元年度から取り組むことになり、林原古墳群・栗井古墳群についても、令和3年度に出土品の整理作業と報告書編集作業をおこなった。出土品の全体量は、土器類が整理箱9箱で実測点数89点、土器以外の出土品は整理箱2箱で、実測点数は金属器類が121点、玉類が91点、石器が4点であった。10月中旬には原稿執筆を終えて、報告書刊行の運びとなった。

発掘調査の体制

平成元年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

岡山県教育庁

教育次長 竹本 博明

文化課

課長 吉尾 啓介

課長代理 河野 衛

参事 浅野間朗雄

課長補佐（埋蔵文化財係長）

伊藤 晃

主査 藤川 洋二

文化財保護主事 宇垣 匠雅

岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬日出明

次長（調査第一課長事務取扱）

河本 清

〈総務課〉

課長 竹原 成信

課長補佐（総務係長）

藤本 信康

主任 岡田 祥司・平松 郁男

片山 淳司

〈調査第一課〉

課長補佐（第一係長）

柳瀬 昭彦

文化財保護主事 宇垣 匠雅

（栗井大塚古墳群調査担当）

主事 植 真治

（林原古墳群調査担当）

平成2年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

岡山県教育庁

教育次長 杉井 道夫

文化課

課長 鬼澤 佳弘

課長代理 光吉 勝彦

参事 浅野間朗雄

課長補佐（埋蔵文化財係長）

伊藤 晃

主査 藤川 洋二

文化財保護主事 宇垣 匠雅

岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬日出明

次長（調査第一課長事務取扱）

河本 清

〈総務課〉

課長 竹原 成信

課長補佐（総務係長）

藤本 信康

主任 平松 郁男・坂本 英幸

序 章

〈調査第一課〉

課長補佐（第一係長）

柳瀬 昭彦

文化財保護主事 宇垣 匡雅

(粟井大塚古墳群調査担当)

報告書作成の体制

令和3年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

教育次長 池永 亘

文化財課

課長 小林 伸明

副参事（文化財保存・活用担当）

尾上 元規

総括主幹（埋蔵文化財班長）

河合 忍

主幹 松尾 佳子

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長（総務課長事務取扱）

浅野 勝弘

参事（文化財保護担当）

亀山 行雄

〈総務課〉

総括主幹（総務班長）

多賀 克仁

主任 井上 裕子

〈調査第三課〉

課長 弘田 和司（整理担当）

文化財保護法に基づく提出書類

埋蔵文化財発掘の通知（57条の3）

	岡山県文書 番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（m ² ）	主体者	期間	処理の内容・理由
1	教文埋第6205号 H2.3.23	古墳 粟井大塚古墳群 2号墳	岡山市粟井字大塚 2516外	266 県道拡幅	岡山県岡山地方振興局長 岡山市内山下2-4-6	H2.3. ～	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の通知（98条の2）

	岡山県文書 番号 日付	種類及び名称	所在地	面積	目的	主体者	担当者	期間
1	教文埋第2789号 H1.8.4	林原古墳群	岡山市牟佐林原1730-1他	500	県道改良工事に伴う発掘調査	岡山県教育委員会 教育長 竹内康夫 岡山市内山下2-4-6	椿 真治	H1.8.1～1.10.31
2	教文埋第6208号 H2.3.23	粟井大塚 2号墳	岡山市粟井2510-1他	40	県道横谷西山内線 改良工事に伴う発 掘調査	岡山県教育委員会 教育長 竹内康夫 岡山市内山下2-4-6	宇垣匡雅	H2.3.16～3.19
3	教文埋第546号 H2.4.21	粟井大塚古墳群14号 墳・2号墳・5号墳	岡山市粟井2510-1他	500	県道横谷西山内線 改良工事に伴う発 掘調査	岡山県教育委員会 教育長 竹内康夫 岡山市内山下2-4-6	宇垣匡雅	H2.4.23～2.6.8

埋蔵文化財発見の通知（100条の2）

	岡山県文書 番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	保管場所
1	教文埋第302号 H2.4.11	須恵器・土師器・白磁・弥生土器 2箱、鉄器・装身具等（鏡1、鉄 鏡12、棺釘28、ガラス玉28、耳 環3）1箱	岡山市牟佐林原 1730-1林原古墳群	H1.8.1 ～1.10.30	岡山県教育委員会 教育長 竹内康夫 岡山県知事	岡山市内山下2-4-6	古代吉備文化財 センター
2	教文埋第178号 H3.4.8	須恵器・土師器・弥生土器・繩文 土器7箱、須恵器3点、鉄器破 片・練玉・耳環1箱	岡山市粟井2510-1 粟井大塚14号墳	H2.3.16 ～2.7.12	岡山県教育委員会 教育長 竹内康夫 岡山県知事	岡山市内山下2-4-6	古代吉備文化財 センター

第2章 林原古墳群の調査

第1節 調査概要

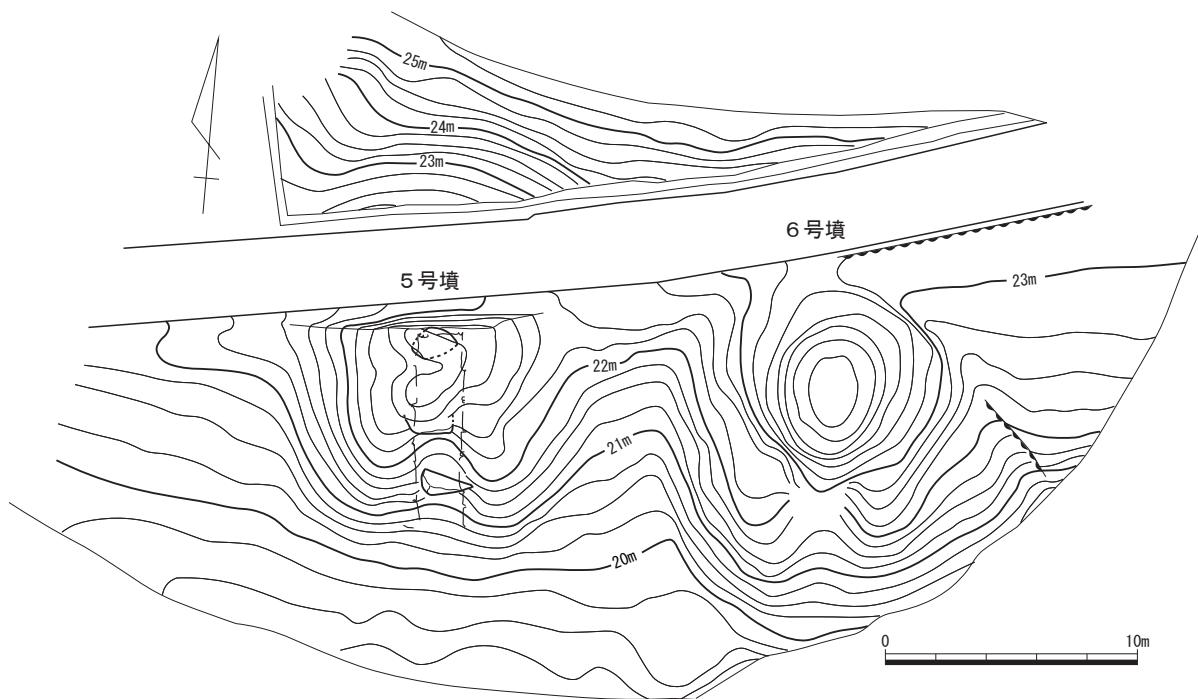
林原5～7号墳は、古墳群中でも氾濫原に最も近い段丘下方斜面に立地する。

調査前の5号墳は、県道から南側に存在する人家へと至る既存の取付け道によって横穴式石室奥壁の背後から丘陵斜面上側の周溝部にかけてが掘削されていたものの、墳丘は直径が約13m、高さが約2.5mの円形を呈し、南に開口する横穴式石室の天井石が一部露出していた。

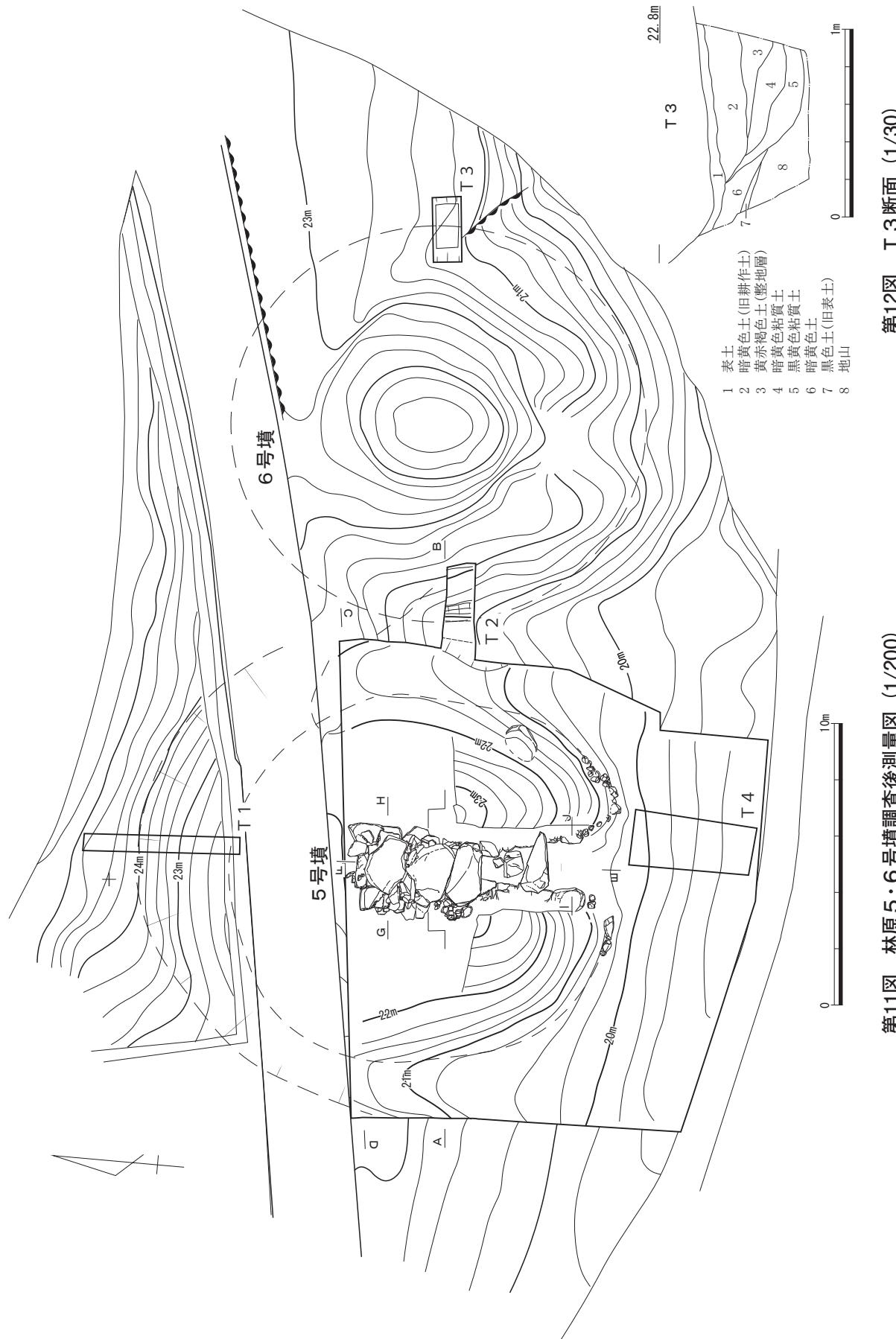
6号墳は、南向きに右片袖式の横穴式石室が開口していた。墳丘は、上半部が削平を受けているようみられたが、墳丘規模は、直径約13～14mの円墳で、高さ約4mである。5号墳同様、石室背後側の周溝部が削平ないしは埋没しているとみられた。調査前の状況では、5号墳の東側と6号墳西側の周溝は重複ないしは共有するような状況であった。

5号墳の調査は、墳丘土層断面を作成後に、天井石上の盛土を掘り下げ、天井石平面図を作成後に、天井石を除去した。古墳北側の丘陵斜面には周溝確認のためにT1を、前庭部前面では墳端確認のためにT4を、墳頂部から東西方向へはT2を設定して墳端を把握し、それに基づいて全面調査の範囲を確定した。

6号墳は、今回の県道拡幅工事による墳丘への直接的な影響は無いと判断されたが、墳丘規模を確認するために東西の墳裾2か所にトレンチを設定したほか、石室の実測も行った。



第10図 林原5・6号墳調査前測量図 (1/300)



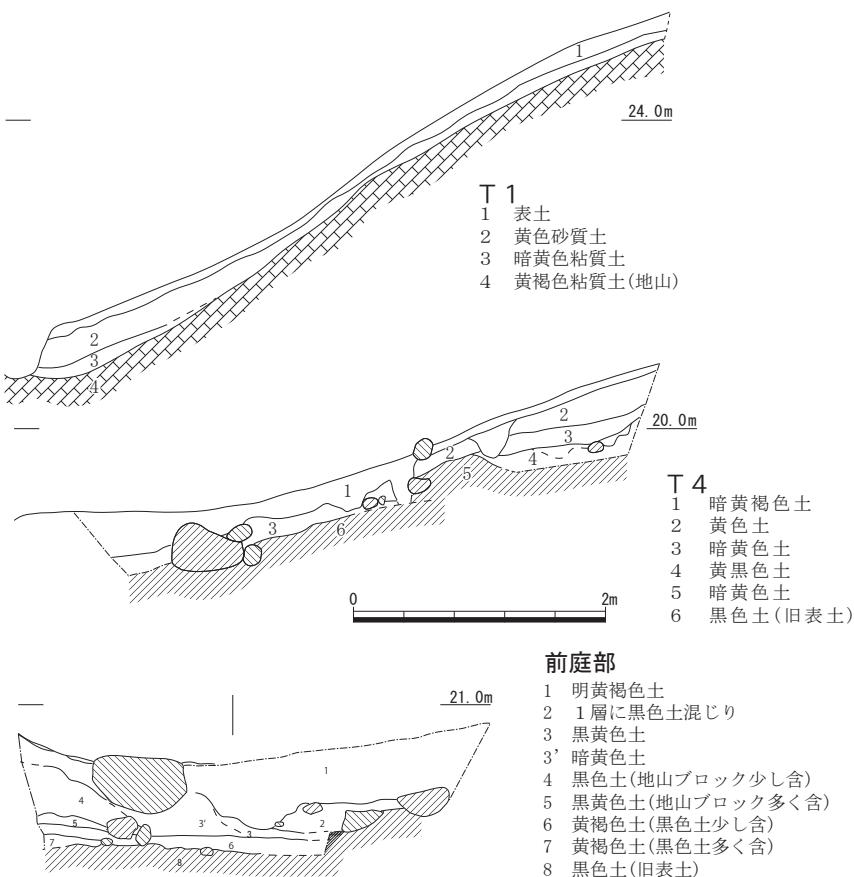
第2節 林原5号墳

トレンチ調査・周溝（第13・15図、図版1）

T 1では、5号墳周溝の外周端及び周溝底を確認した。トレンチ南半部にあたる標高23.5m付近の地山傾斜変換点が周堀の上端になろう。既存道の削平によって、周溝幅は不明である。T 2（第15図）において、5号墳と6号墳との境の周溝を検出した。6号墳の周溝幅は1.2m、深さが外側の肩部から40cmである。17層が6号墳周溝埋土で、その埋没後に堆積する5～7層は5号墳の周溝埋土である。この部分での周溝の幅は約2m、深さは約70cmである。周溝の切り合いから、6号墳が5号墳に先行することが明らかである。石室開口部前面に設定したT 4では、墳丘の流土（1～5層）層とその層中に石室石材や墳丘外護施設に伴うと思われる石材があり、その下層に古墳築造以前の旧表土層（6層）を確認した。T 4では、6層上の5層が前庭部の3層に対応する。前庭部断面は、全体図での位置が不明であるが外護列石の内側、開口部付近である。6層は石室床面の整地土層で4・5層が石室墓坑の裏込土、1～3層は流土である。

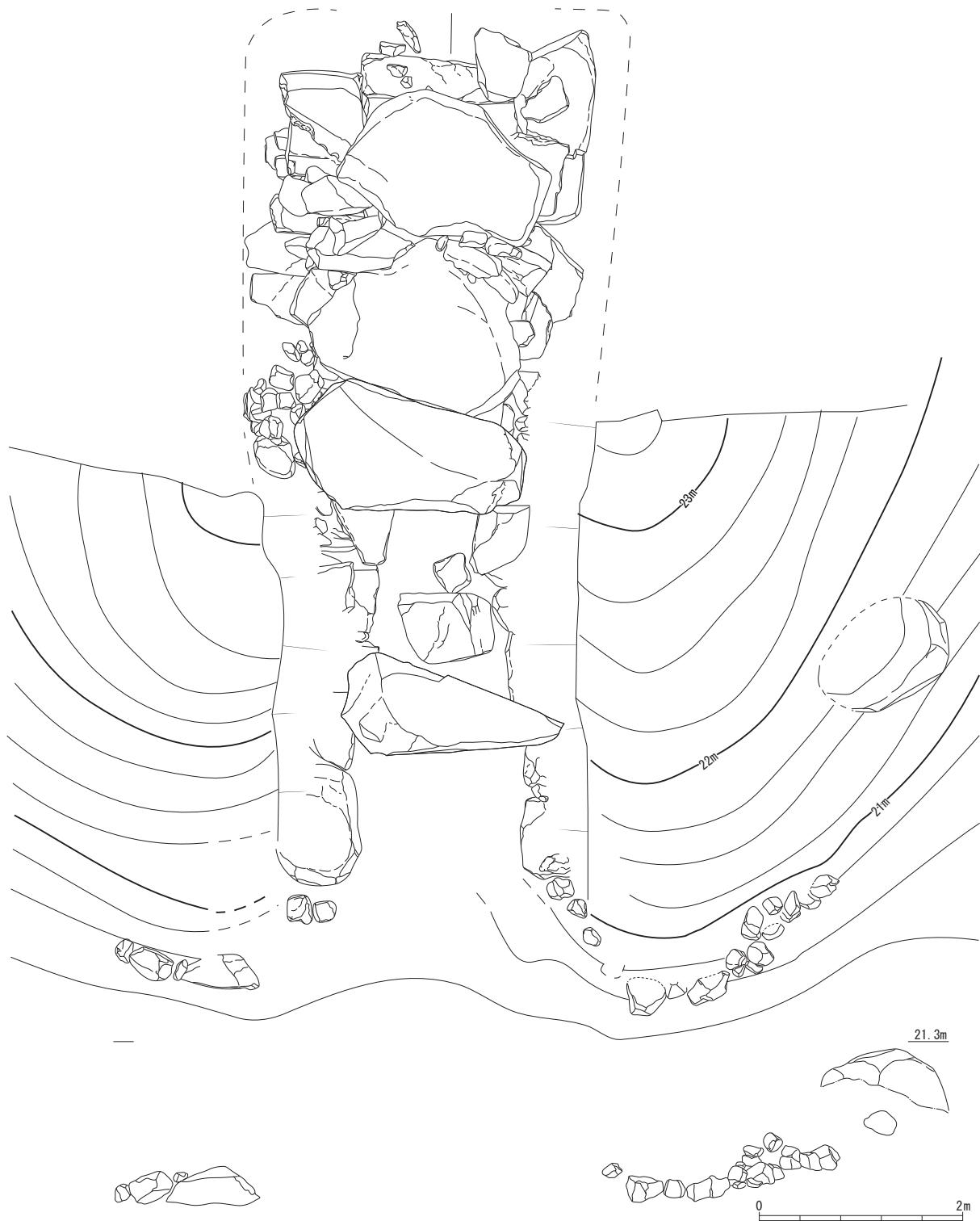
外護列石（第14図、図版2）

5号墳は、横穴式石室を中心とした墳丘の東端・西端から斜面上方である北側にかけて半円形の周溝を巡らしている。周溝は、遺存状況の良い墳丘西側で、幅が約2.5m、深さが約0.5mである。周溝が巡らない斜面下方の石室開口部では、両側壁から左右の墳端に、西側に1.5m、東側で2.5m分の石

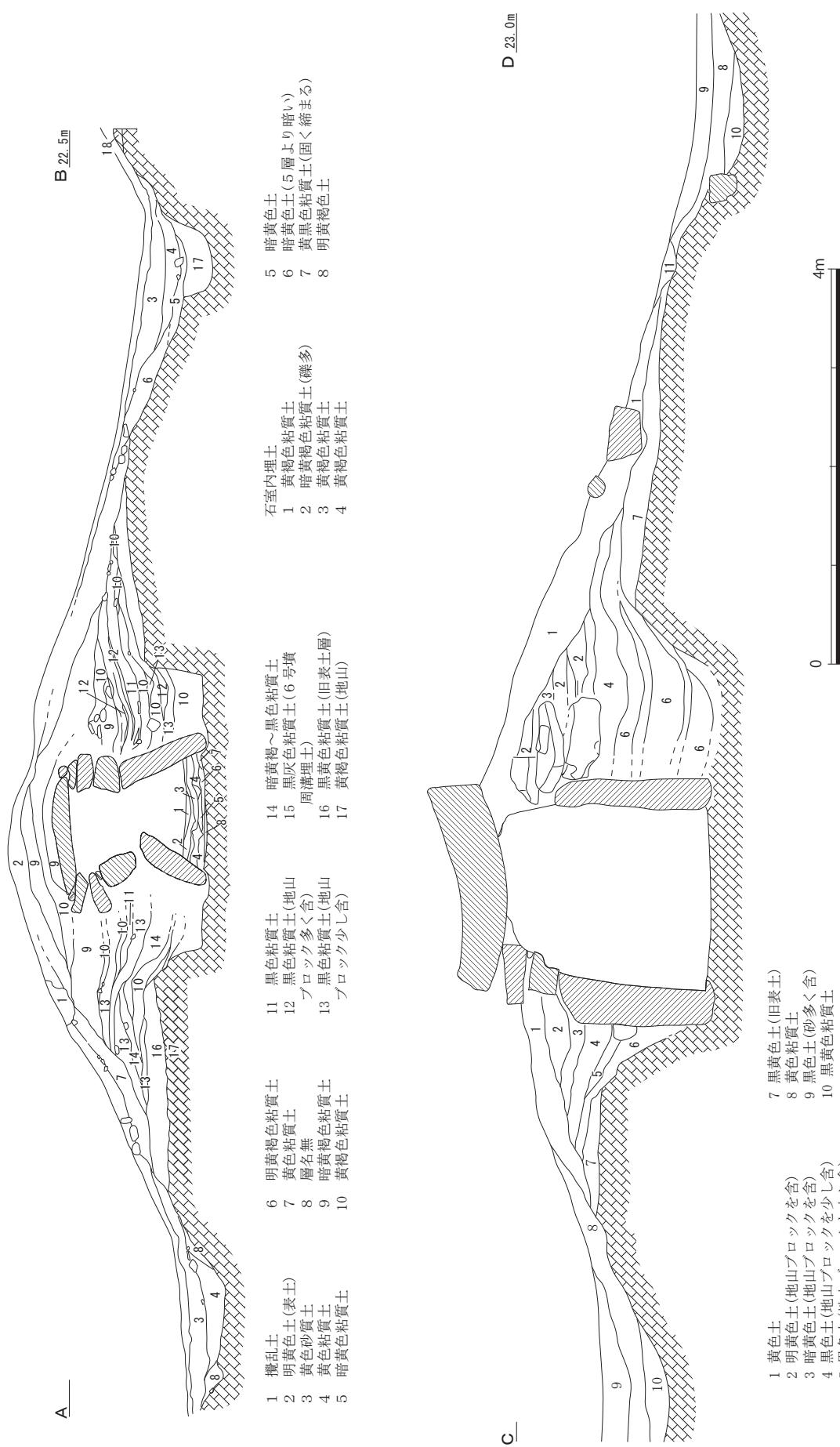


第13図 T 1・4、前庭部土層断面 (1/60)

列を確認した。大きさが20~100cmほどの角礫で、1段分が残る。墳丘裾近くの盛土表面及び東西の周溝埋土には、石列とおぼしき長軸20~30cm程の石材が多数存在したことから、本来は墳丘前面から少なくとも墳丘東西の周溝裾までを巡らせたと思われる。墳丘の区画を目的とし、周墳丘盛土と同時に構築されたとみられ、墳丘外表面に露出するいわゆる外護列石である。これら周溝や列石によって画された墳丘の規模は、東西が約13m、南北で15m程の円墳で、石室前面からの墳丘残存高は約2.5m



第14図 林原5号墳墳端列石 (1/60)



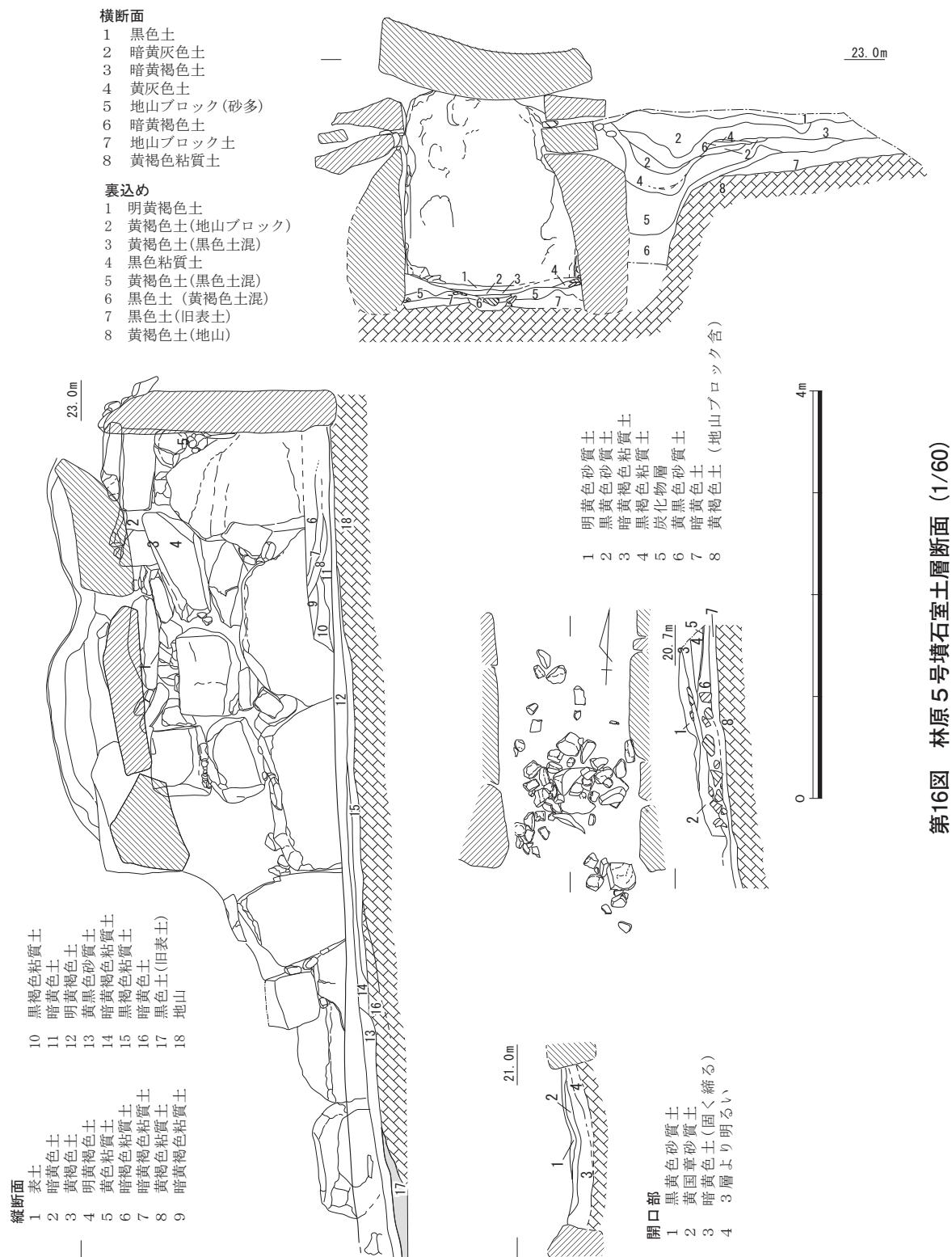
第15図 林原5号墳墳丘土層断面 (1/60)

となる。墳丘上や周溝からの遺物の出土はみられず、段築、葺石は存在しなかった。

墳丘盛土（第15図、図版1・2）

墳丘は、南北方向では南に、東西方向では西に傾斜する斜面に位置する。盛土は（第15図A-B断面）、地山を掘削した石室掘り方に石室基底石を据え、裏込めを行った後に旧表土層上から積む。

その単位は、側壁の基底石から2～3段目までを厚み2～10数cmの黒色土（旧表土由来）と黄褐色



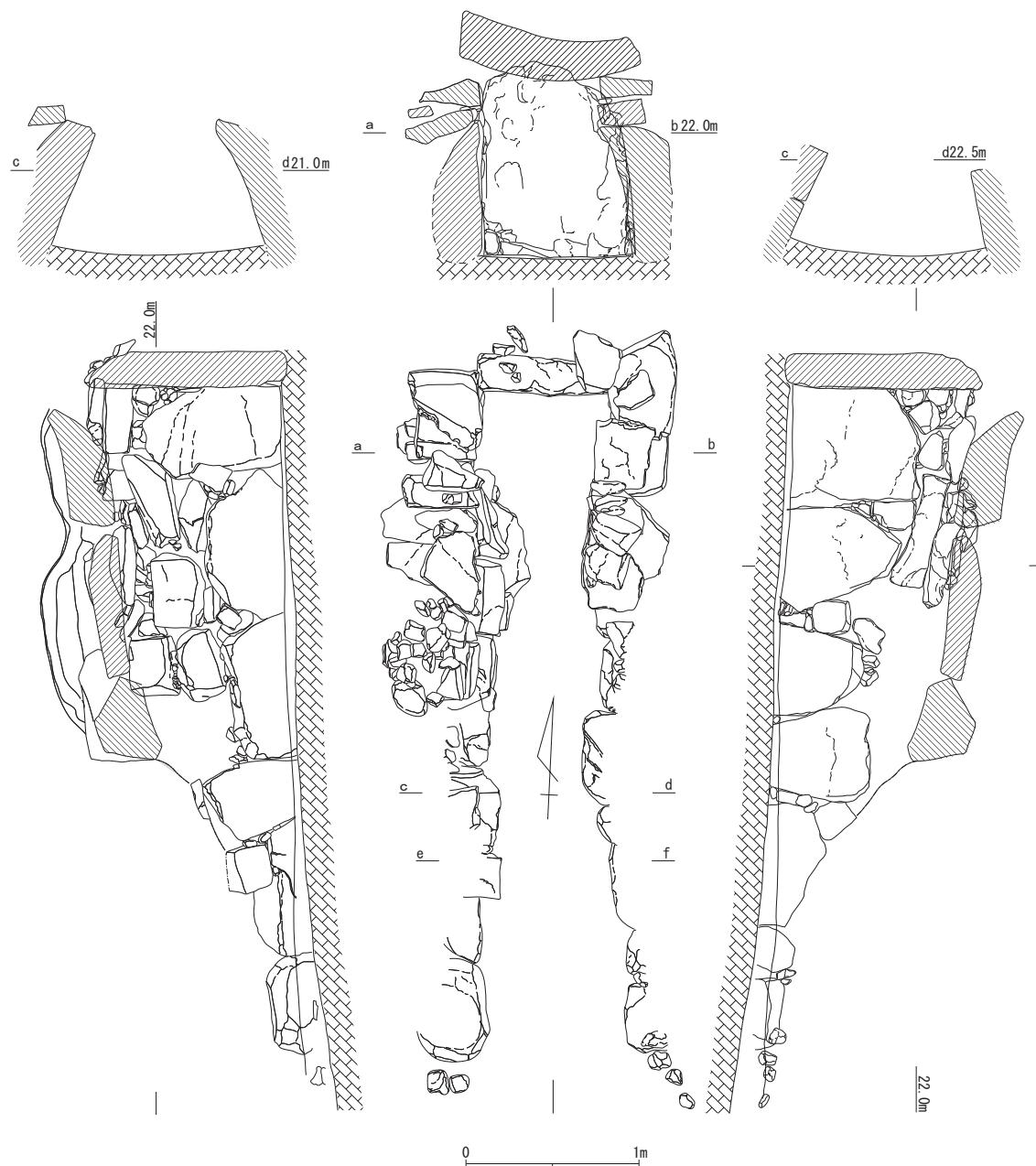
第16図 林原5号墳石室土層断面 (1/60)

土（地山由来）の互層とし、側壁と同時に積んでいる（第1次盛土）。側壁の3段目から上は盛土の単位は厚くなり、天井石の構架したその後は、墳丘全体を覆うように盛土（2・7層：第2次盛土）を施している。C-D断面は、石室背後の道路の裏面を精査した断面であるが、奥壁とそれに接する側壁の構築に伴うとみられる。第1次盛土は黄色土と黒色土の互層でかつ、厚薄の互層であるが、A-B断面よりは総じて厚い。1層は第2次盛土で、A-B断面では7・9層に対応する。

石室掘り方は、地山を南北方向に9m、東西方向で3m程を「コ」の字状に掘削し、基底石を据え、2段目以上の側石は墳丘盛土と併行して積む。基底石を据えるが、石室開口部付近では旧表土上に盛土を行い、床面を水平につくる。

横穴式石室（第16・17図、図版3～5）

5号墳の埋葬施設は、無袖式の横穴式石室で、開口方向はN-6°-Wである。石室の残存長は7.8m



第17図 林原5号墳横穴式石室（1/60）

で、幅は奥壁部が1.75m、開口部は1.7mと、ほぼ長方形の平面プランを呈す。奥部での石室の高さは1.95mである。奥壁は、高さが2.3m、幅は1.7m、厚みが0.4m程の大石1枚を立てて、その直上に天



第18図 林原5号墳床面遺物出土状況 (1/40)

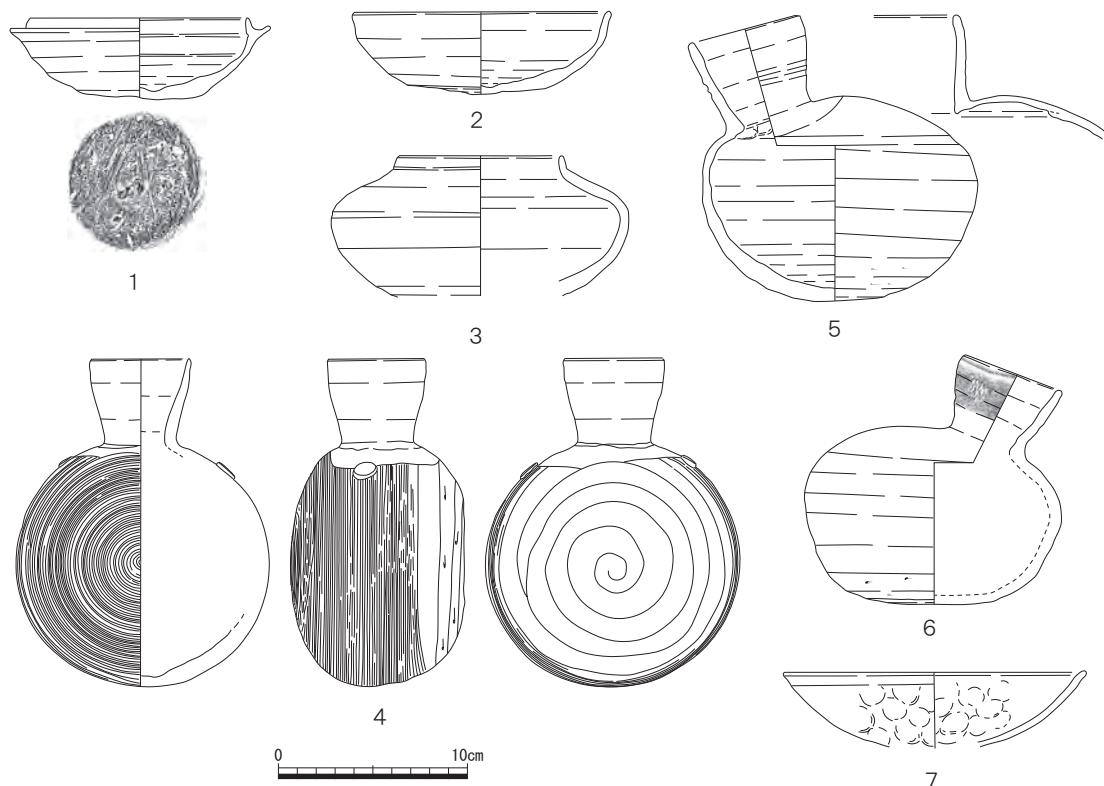
井石を構架する。天井石は3枚が残るが、その隙間には小石を充填していた。両側壁は、ともに基底部に大ぶりの石を立て、それより上部は天井石との間に1~2段分の石を横方向に積んでいる。基底石は、奥壁から順に小さくなるが、左側壁では奥壁から4石目を袖石状に立てる。本来、天井石は左側壁4石目辺りまでを覆い、転落した石を含めて4枚であった可能性が高い。

遺物出土状況（第18図、図版3）

遺物は上下2層に分けて取り上げている。床面上には棺台と思われる石材があり、副葬品の土器、玉類、刀などとともに釘、鎌といった木棺の金具が出土している。上下両面とも奥壁から1mや6~7m付近の一部に棺台とみられる板石が部分的に存在したが、棺の配置を示す程の明確なものでは無かった。これは追葬時や後世の再利用時の攪乱を受けたためと考えられる。鉄釘や鎌の出土から木棺の存在を想定するが棺の痕跡はない。出土遺物についても、奥壁から2.5mの間に鉄器（刀装具・鉄簇・釘・鎌）が集中して散布するが、確実に原位置を保つと判断できる状況ではなかった。その中でも、玉類や耳環は、埋葬位置復元の参考となる。玉類は、石室中軸ラインからやや東寄りで奥壁から2mの間に多い。棺台との位置関係から、J19~22の散布は原位置を保つ可能性がある。また、奥壁から5~6m付近のやや西壁よりもJ20・24・25があり、奥壁から6~7mの西壁付近には耳環M2・3も出土することから、石室南半部にも埋葬を想定することができよう。

出土遺物（第19~23図、図版6~8）

古墳の副葬品として、須恵器、土師器、金属製品、玉類がある。土器類には、須恵器の杯類1・2、短頸壺3、提瓶4、平瓶5・6があり、土師器には杯7がある。立ち上がりのある杯1は、口径が11.4cm、器高が4.65cmで、底部外面はヘラカリ後に顕著な調整を行っていない。立ち上がりのない杯2は、



第19図 林原5号墳出土遺物1 (1/4)

口径13.4cm、器高4.4cmで、底部はヘラキリ後、ナデて仕上げている。短頸壺3は、口縁部に重ね焼の口縁部がわずかに残る。底部下半には回転ヘラケズリが認められる。平瓶5・6は、底部を回転ヘラケズリ後ナデて仕上げる。6の口縁部には「W」字状のヘラガキがある。土師器杯7は、内外面に指押さえが顕著である。8は壺瓶類の体部であろう。甕類には、口縁部の形状から2個体が確認できる。9は小型の甕の口縁部である。甕の破片10～13は、外面は格子目タタキのちカキメ、内面は当て具痕を軽くナデ消す。甕10・12・13は前庭部から出土している。

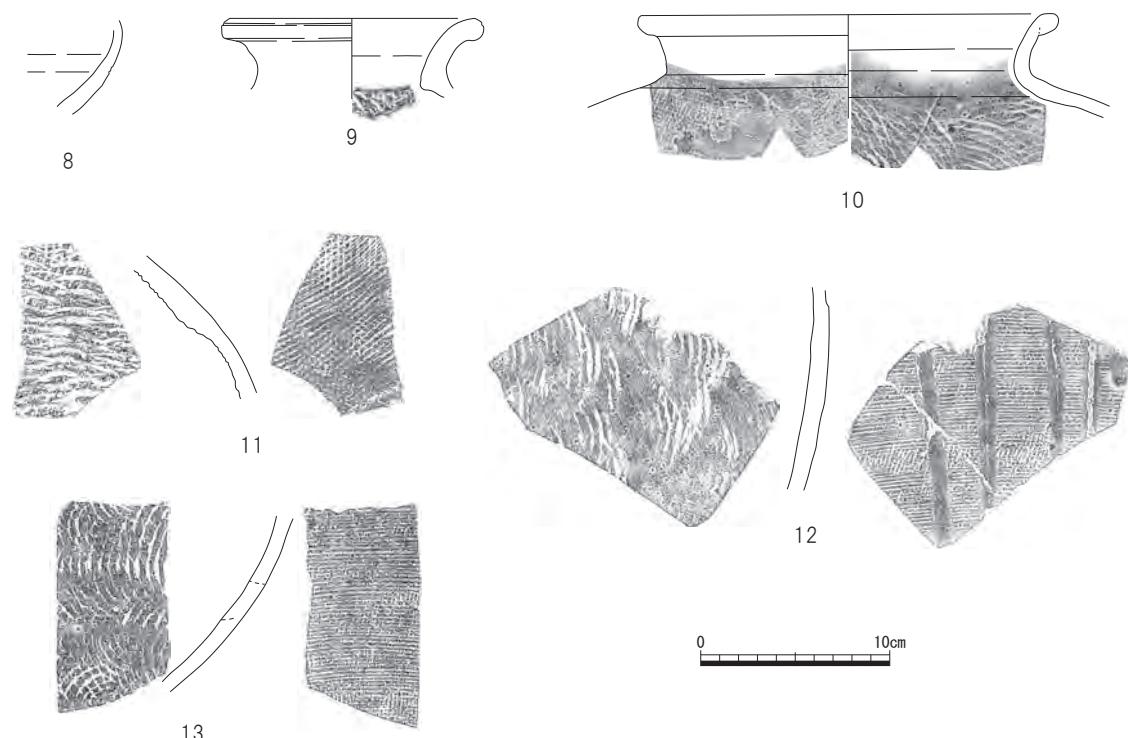
これら土器類の年代は、7世紀の前半頃である。

玉類には、J1～33がある。J1は、水晶製の丸玉である。最大径1.4cm、厚さ1.0cmで、孔径0.3～0.35cmである。J2～33はガラス製の小玉で、色調は大半がコバルトブルーであるが、中には淡緑色を呈するJ30もある。大きさには、最大径が0.7～0.8cm程のJ2～27と最大径が0.5～0.65cm程のJ28～30、最大径が0.4cm程と小さいJ31～33の3類に分けられる。

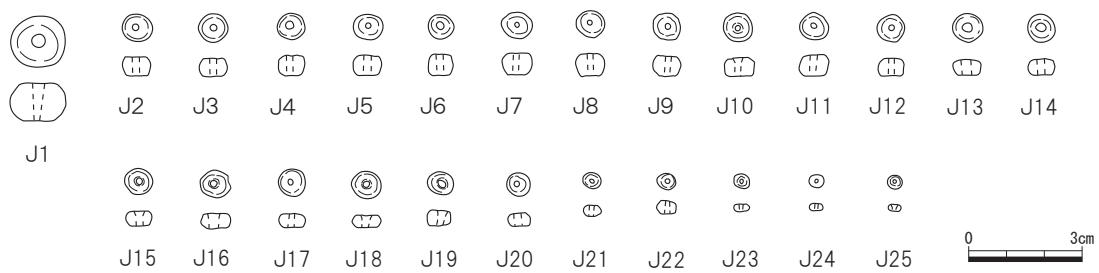
耳環は、M1～4が出土する。鉄地金銅張りで、最大径が3.3～3.45cmのM1～3と金銅製で径2.05cm程のM4がある。2対で2体以上の埋葬が存在したとみられる。

M5・6は、大刀の鞘尻金具で、鉄の地金のみが残る。M5は、残存長3.4cm、幅が3.1cmで断面が卵形を呈す。断面が倒卵形を呈するM6は2つの破片となっているが、同一個体で、ともに目釘孔が残る。M6-1は、断面形が橢円形で長軸が3.5cm、短軸は1.7cmで、内面には木質が残る。M6-2は、長さは4.2cmで、端部には留金具が残る。大刀の柄頭や鍔は確認できていない。

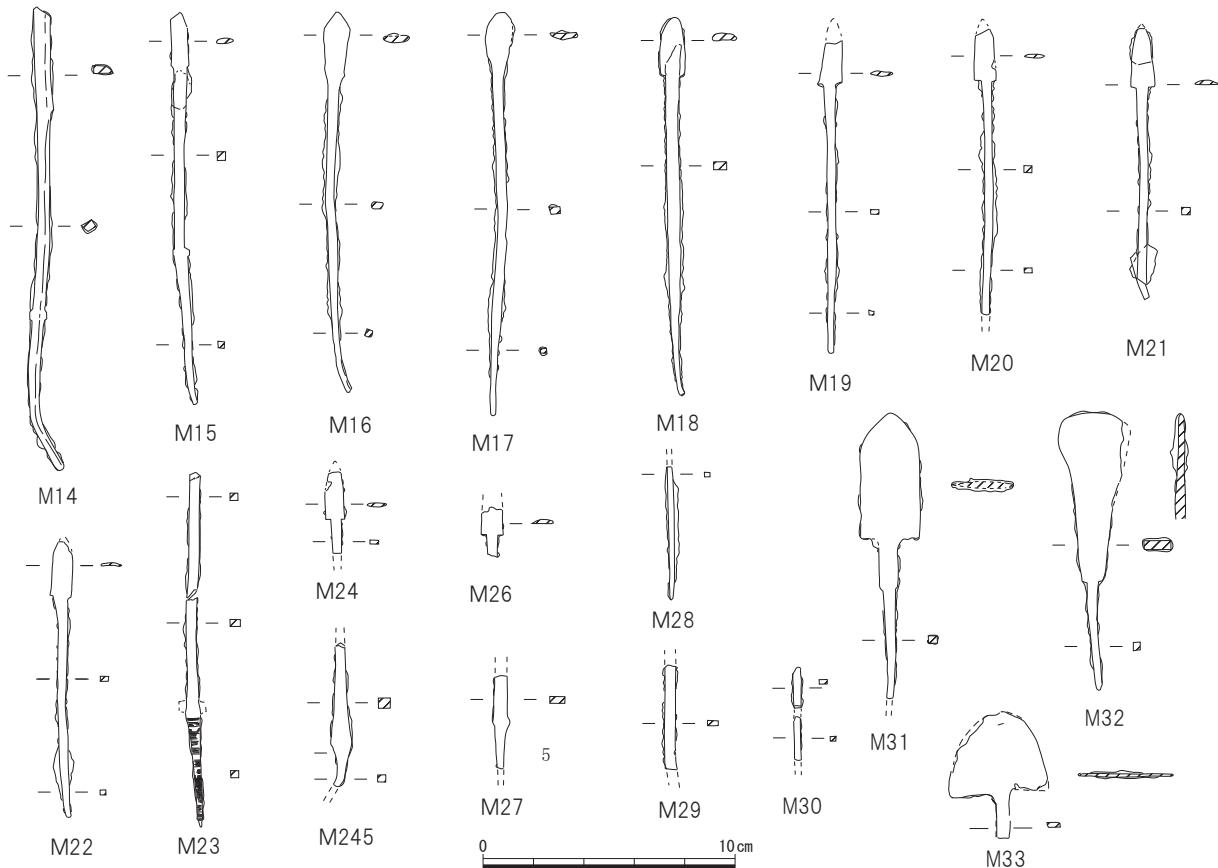
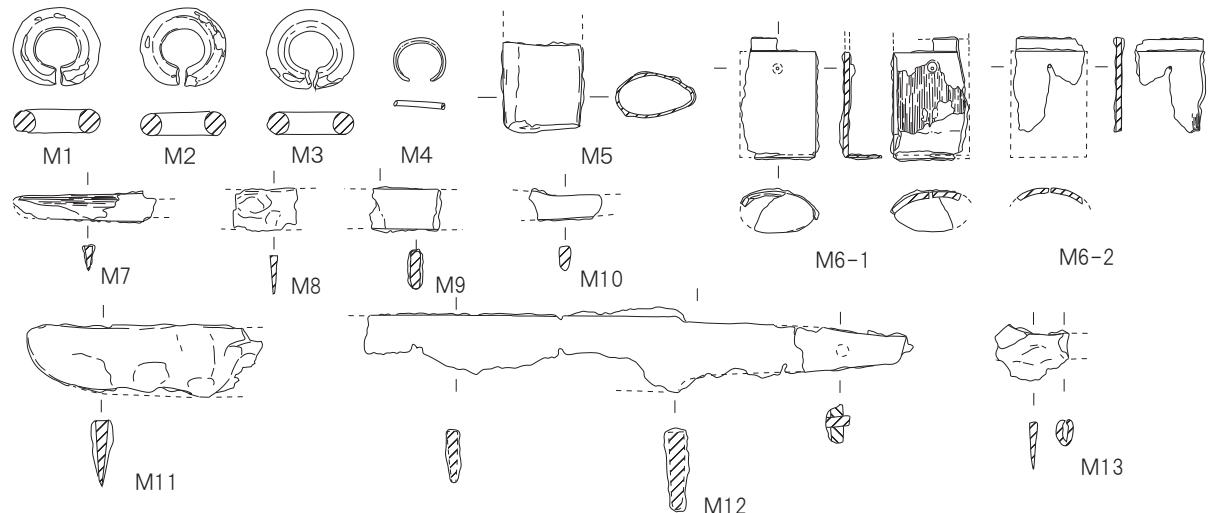
刀子M7～10や鉄刀M11～13はすべて破片で全容がわかるものは無い。鉄刀M12は、両関式で茎部に目釘が残る。鉄鎌は、尖根式の長頸柳葉鎌M14～26を主体とし、平根式には柳葉式M31、方頭式M32、三角形式M33がある。中には茎の糸巻きが観察できるものも存在する。



第20図 林原5号墳出土遺物2 (1/4)

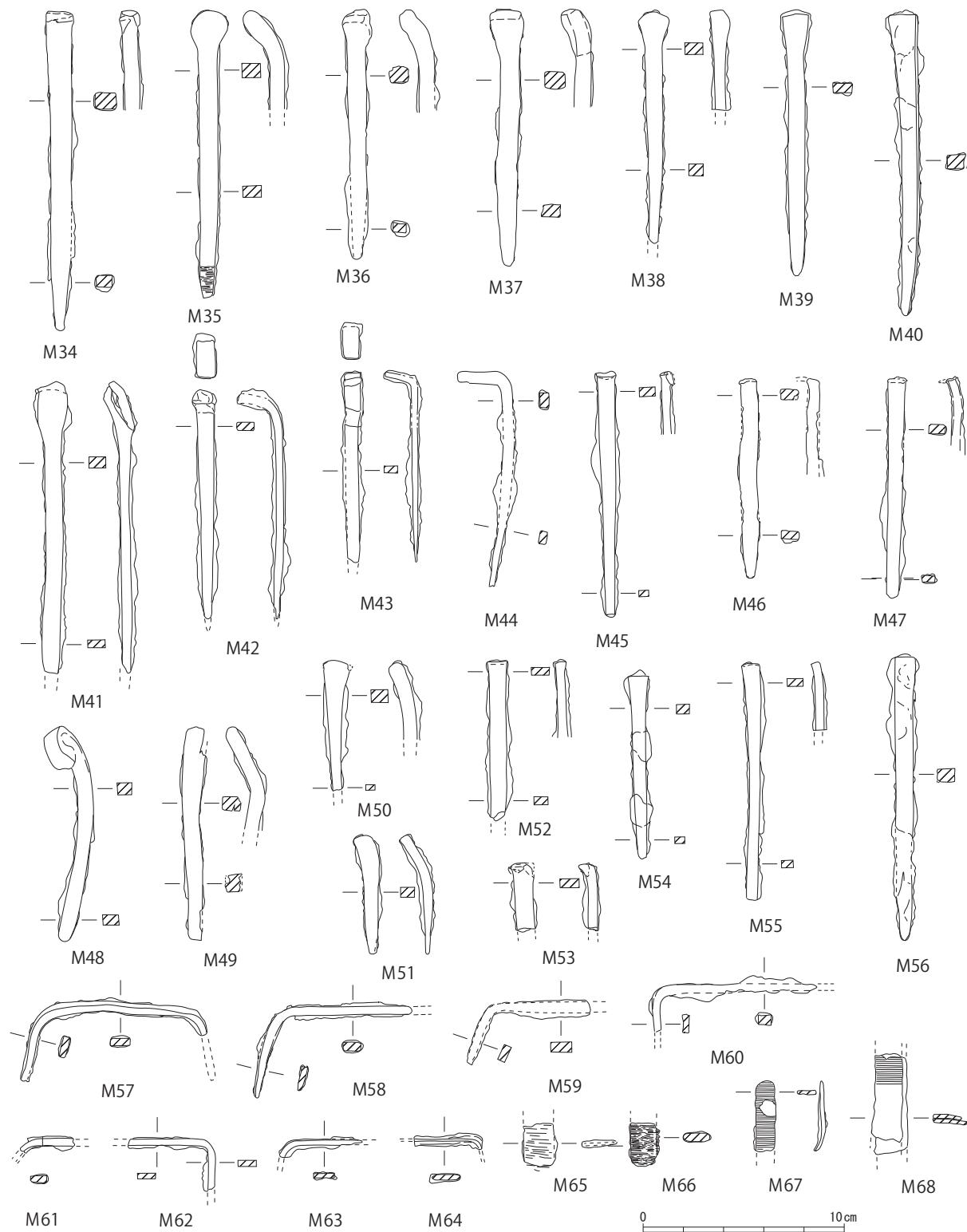


第21図 林原5号墳出土遺物3 (1/2)



第22図 林原5号墳出土遺物4 (1/3)

釘には頭部を楕円ないしは方頭状に打ち出すM35~41と頭部を直角に折り曲げるM42・47・53などがある。前者には頭部を折り曲げないものとわずかに折り曲げるものがある。後者には折り曲げ幅が長いM44などと短く折り曲げるM53などがある。また、M56などのように明瞭な頭部をつくらない例も存在する。鎧には、M57~68があり、M65~68には棺材の木目を残す。



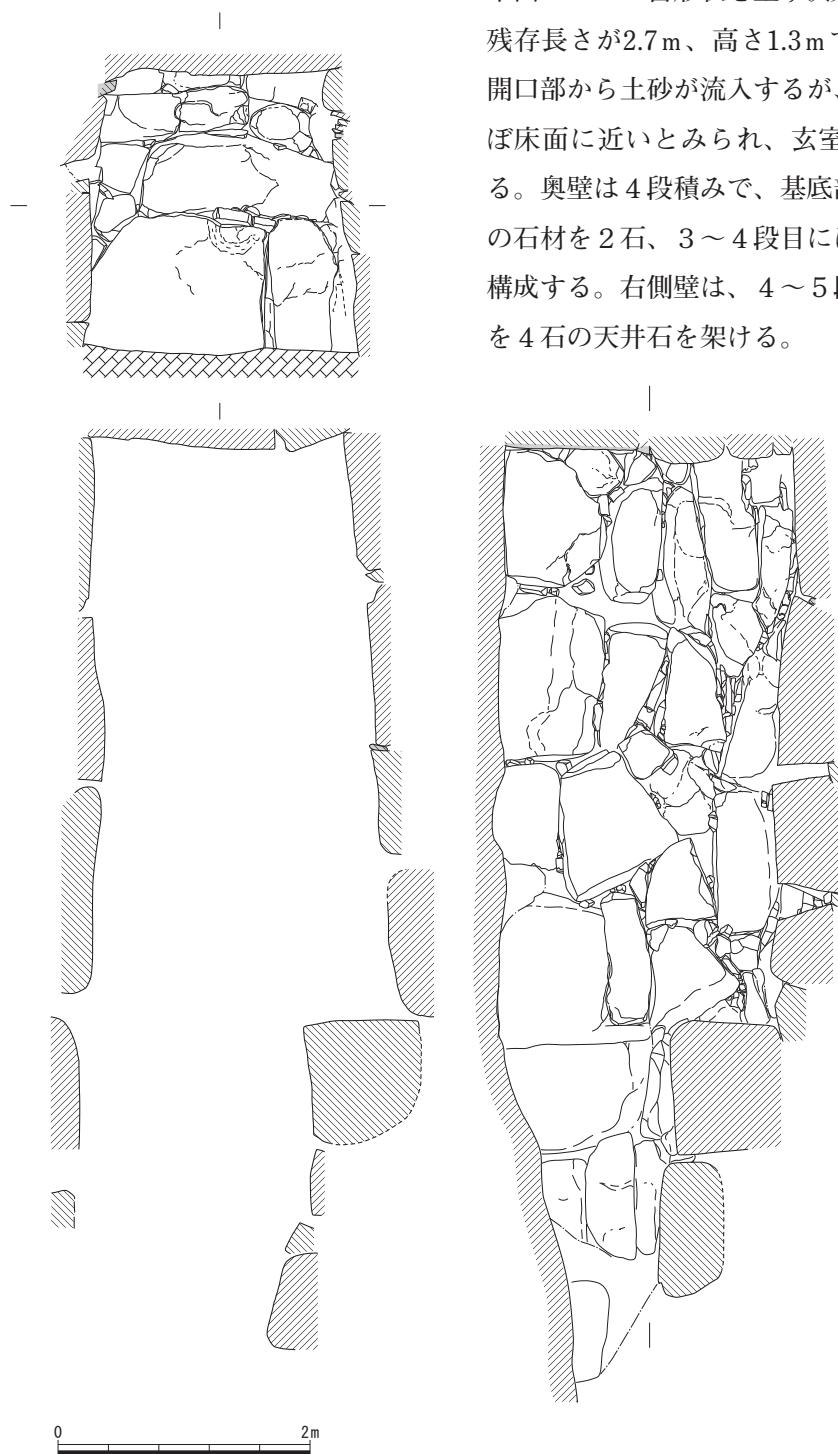
第23図 林原5号墳出土遺物5 (1/3)

第3節 林原6号墳 (第24図)

T3 (第12図)において、東側の周溝と墳端を確認した。これによって墳丘東側はかなり開墾による削平を受け、周溝はほぼ完全に埋没していることが明らかとなった。

横穴式石室は、残存長が7.3mの右片袖式石室で、玄室長4.6m、奥壁幅2.0m、袖部幅2.45mと玄室の

平面プランは台形状を呈す。羨道は幅1.55mで、残存長さが2.7m、高さ1.3mである。羨道には開口部から土砂が流入するが、奥壁付近は、ほぼ床面に近いとみられ、玄室高さは2.3mである。奥壁は4段積みで、基底部と2段目に大型の石材を2石、3~4段目には小ぶりの3石で構成する。右側壁は、4~5段に積み、その上を4石の天井石を架ける。

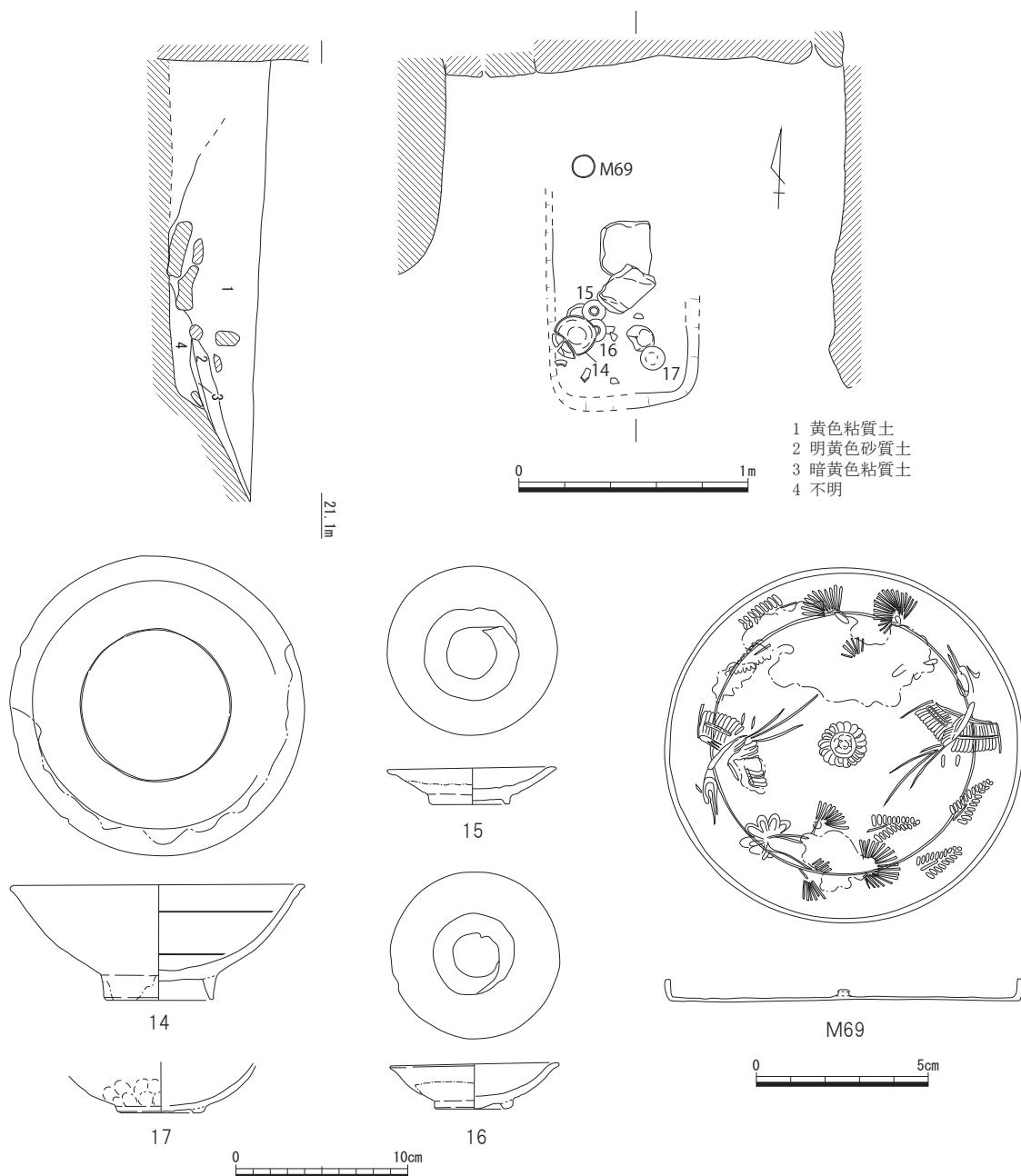


第24図 林原6号墳横穴式石室 (1/80)

第4節 古墳に伴わない遺構・遺物

中世墓 (第25図、図版5・6・8)

石室の奥壁付近かつ石室中軸線上の横穴式石室埋土を掘り込んだ中世の墓が存在した。奥壁から約40cmで和鏡M69が出土し、奥壁から100~140cmの間では、白磁の碗・皿14~16が出土している。部分的に墓坑と思われる長方形のプランを検出したものの、墓坑全体の輪郭は判然とせず、人骨や棺痕跡、釘類も出土していない。推定した墓坑では、木棺墓としては幅が狭く、和鏡と白磁の位置が離れていることもあまり例をみないことから、後世の攪乱によるものか、そもそも鏡と白磁が別の墓の副葬品であった可能性もある。同一墓坑内の出土であれば、中世前半期の集落内で見つかる墓の中で



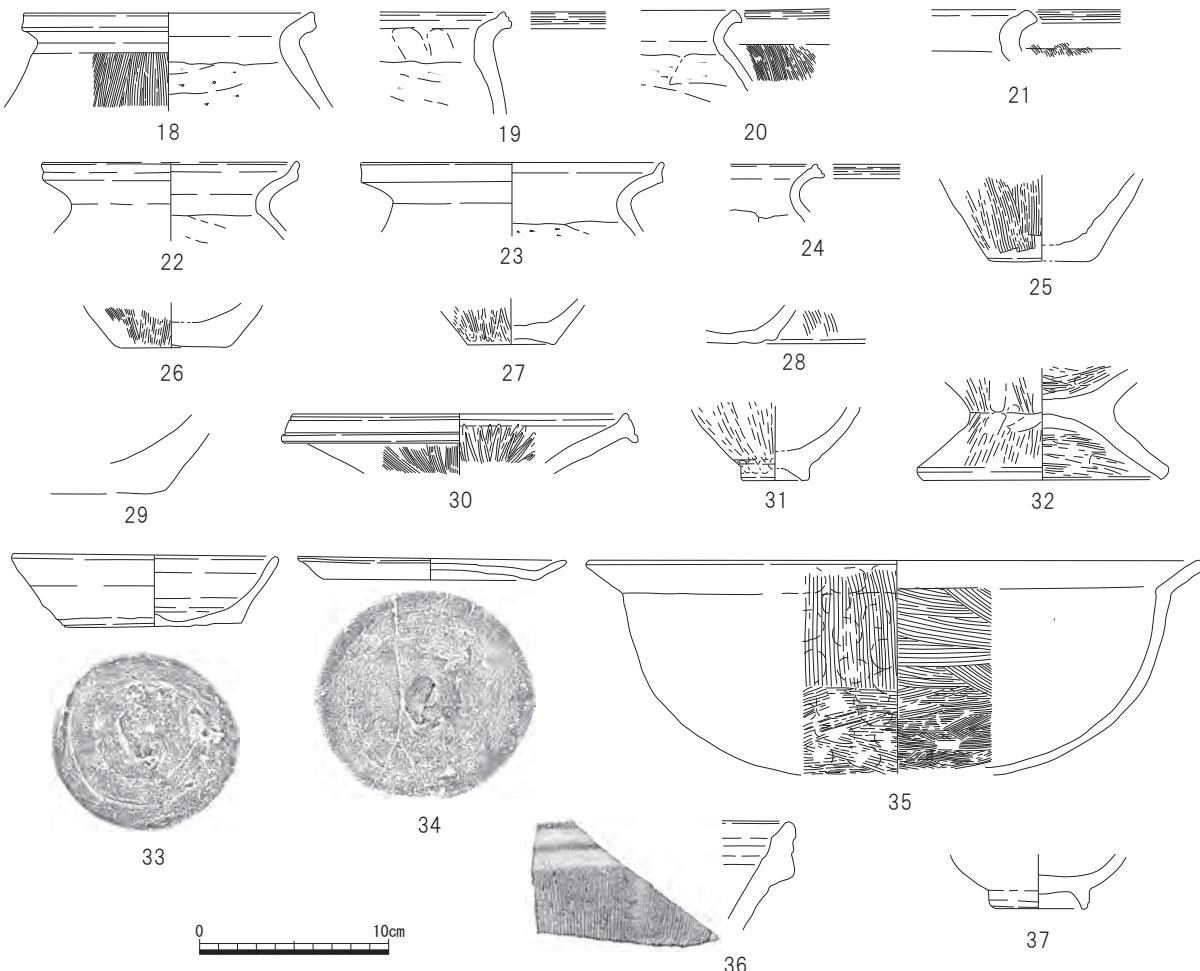
第25図 中世墓 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

は優位な階層の人物が埋葬されていたとみられる。

和鏡M69は、径が104.0mmで、厚みは5mmと薄く、平安時代末の製作と考えられる。白磁類はいずれも完形で、碗V類14と皿III類15~17がある。皿は見込み部を輪状に釉をはぎ取る。17は土師質高台付碗で、口縁部を欠くが、14世紀初め頃の年代が与えられる。この土師質土器碗の出土位置は、第25図の3層（炭化物層）の上であり、4層出土の白磁類とは層位が異なる。3・4層を土坑墓の埋土とし、和鏡と白磁類の組み合わせから、埋葬の時期を12世紀末~13世紀前半頃と考え、14世紀代にも石室の再利用が行われたと考えておきたい。

その他の遺物（第26図、図版8）

18~32は、5号墳の墳丘の周辺や墳丘盛土中から出土した弥生時代後期後半を中心とする土器片で甕、小型器台、鉢などがある。今回の調査においては弥生時代の遺構そのものは確認できていないものの、1号墳や4号墳が立地する南向きの丘陵裾部には弥生時代後期の小規模な集落が存在していたと思われる。33~35は、5号墳石室内出土の中世の遺物で、土師質土器杯33、皿34、鍋35がある。33・34は先の土抗墓の白磁類と時期に近く13世紀前半の遺物であるが、35は14世紀に下る。これらも、墓の副葬品ないしは棺の一部の可能性がある。近世以降の遺物としては、備前焼の擂鉢の口縁部片36、肥前陶器碗の底部37がある。



第26図 古墳に伴わない遺物（1/4）

第3章 粟井大塚古墳群の調査

第1節 粟井大塚14号墳

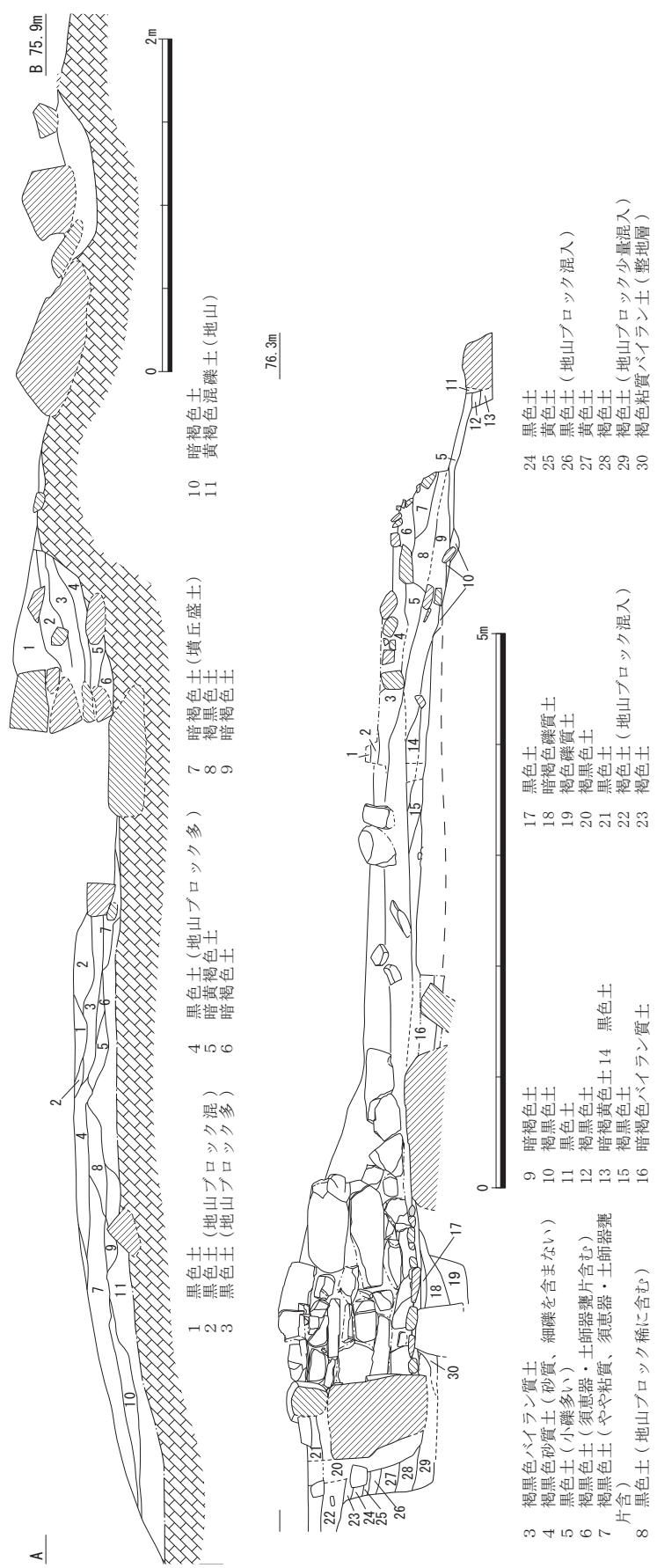
墳丘（第27～29図、図版9・10）

第一次調査開始の時点では未周知の古墳であり、トレンチ調査（T5）によって水田耕土下で確認できた。墳形は直径が11m程の円墳で、埋葬施設は横穴式石室である。墳丘周囲に周溝を巡らせるが、古墳西側では幅が約2.8m、深さは30cm程で、埋土は、黒色から褐色系の土であった。

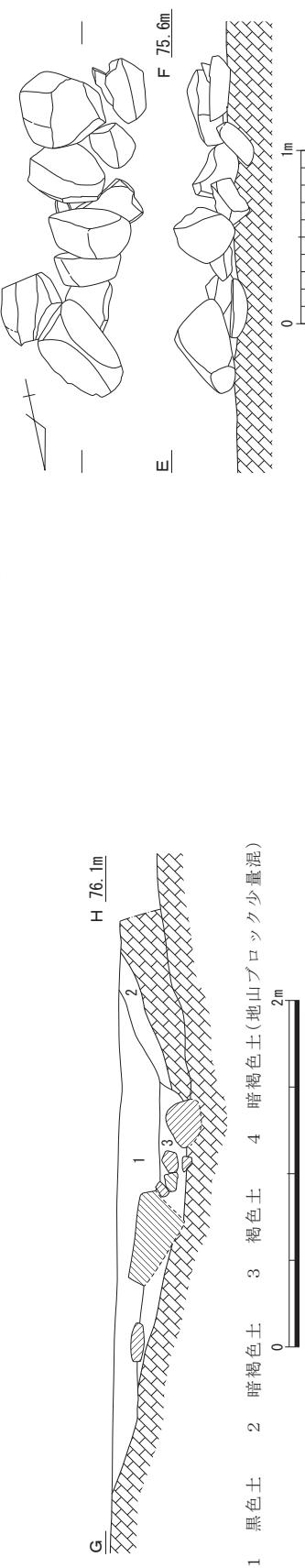
墳丘及び石室は水田の造成によってかなり削平を受けていた。古墳の立地が北に延びる尾根の東斜面側にあり、特に墳丘東半部の水田が西半部のそれと比べて一段低くなっていたため、石室東側壁は最下段の石のみが残存していた。



第27図 粟井大塚14号墳墳丘（1/100）



栗井大塚14号墳墳丘土層断面(1/60)
第28図



第29図 粟井大塚14号墳周溝土層断面 (1/40)

第30図 粟井大塚14号墳西側列石 (1/40)

石室は墓坑を穿ち構築するが、西が深く石室側壁の3段目に及ぶのに対し、東側ではほぼ盛土と併行して石を積み上げたとみられる。床面は奥壁から6.5mあたりまでは水平な面をなし、そこから前庭部にかけては北へと傾斜している。羨道部の横断面（第32図）では 地山を浅く掘りくぼめており、溝状の墓道になる。石室開口部の閉塞は、まず土盛りをし、その上に角礫を積む。

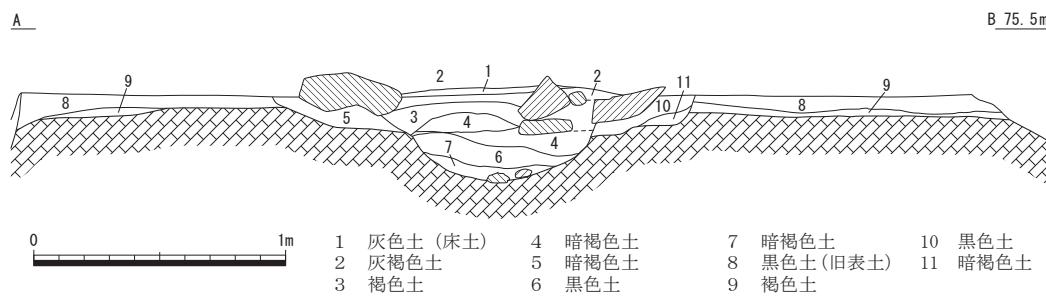
墳端列石（第30・31・33図、図版9）

墳丘北側の石室開口部両側の墳丘斜面には、人頭大の角礫が2段～3段に葺かれているが、石は長軸が40～120cm余りとまちまちであった。この列石の周囲及び下面からは須恵器の甕片が出土している。石の下面から須恵器が出土するということは、追葬時に列石を葺いたか改修されたことを示し、列石は墳丘盛土外表に露出していたと思われる。

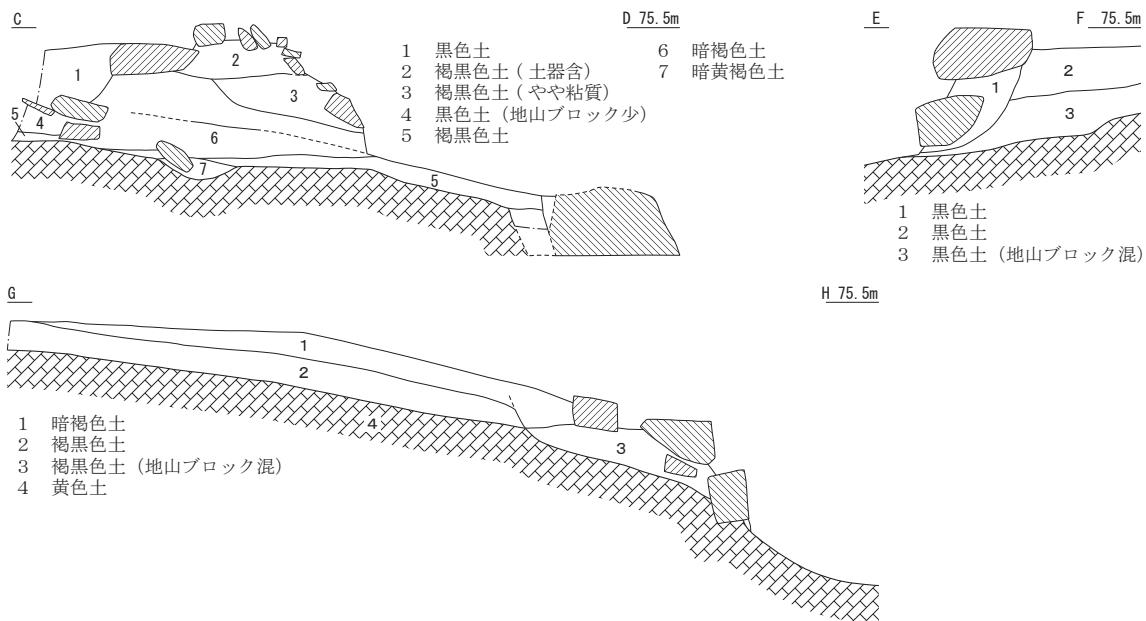
周溝西側の墳丘側裾においても長さ2mに渡って列石（第30図）を検出した。石は墳丘前面部と比



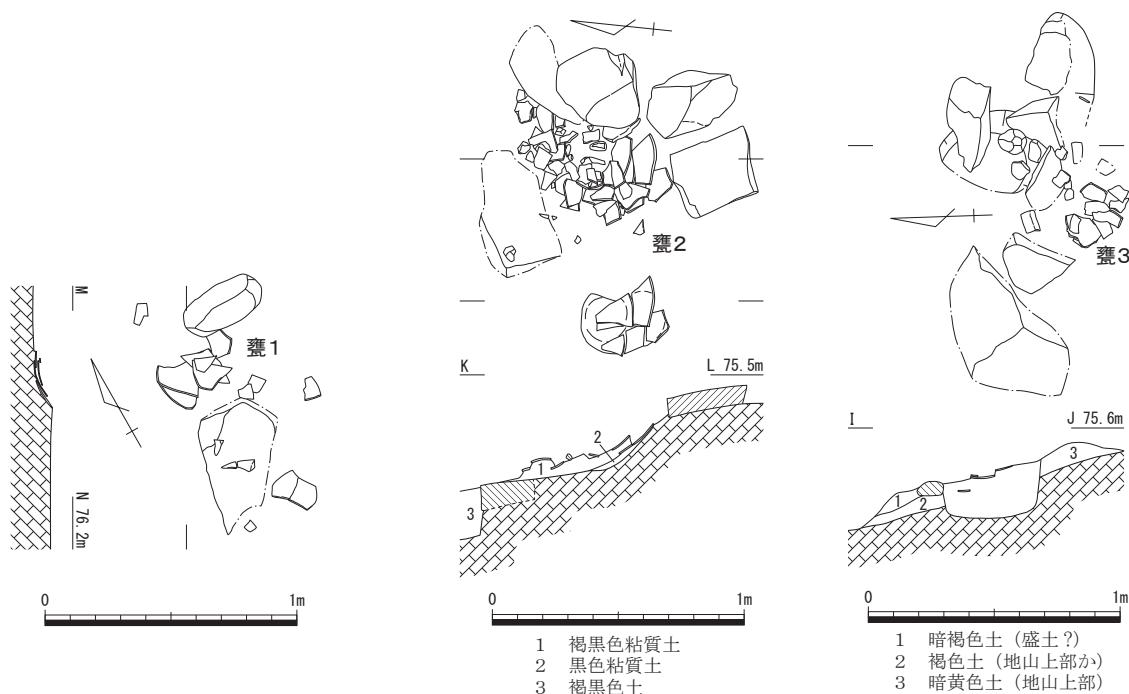
第31図 粟井大塚14号墳閉塞石・墳端列石（1/60）



第32図 粟井大塚14号墳石室羨道部断面 (1/60)



第33図 粟井大塚14号墳閉塞部・墳端部断面 (1/60)



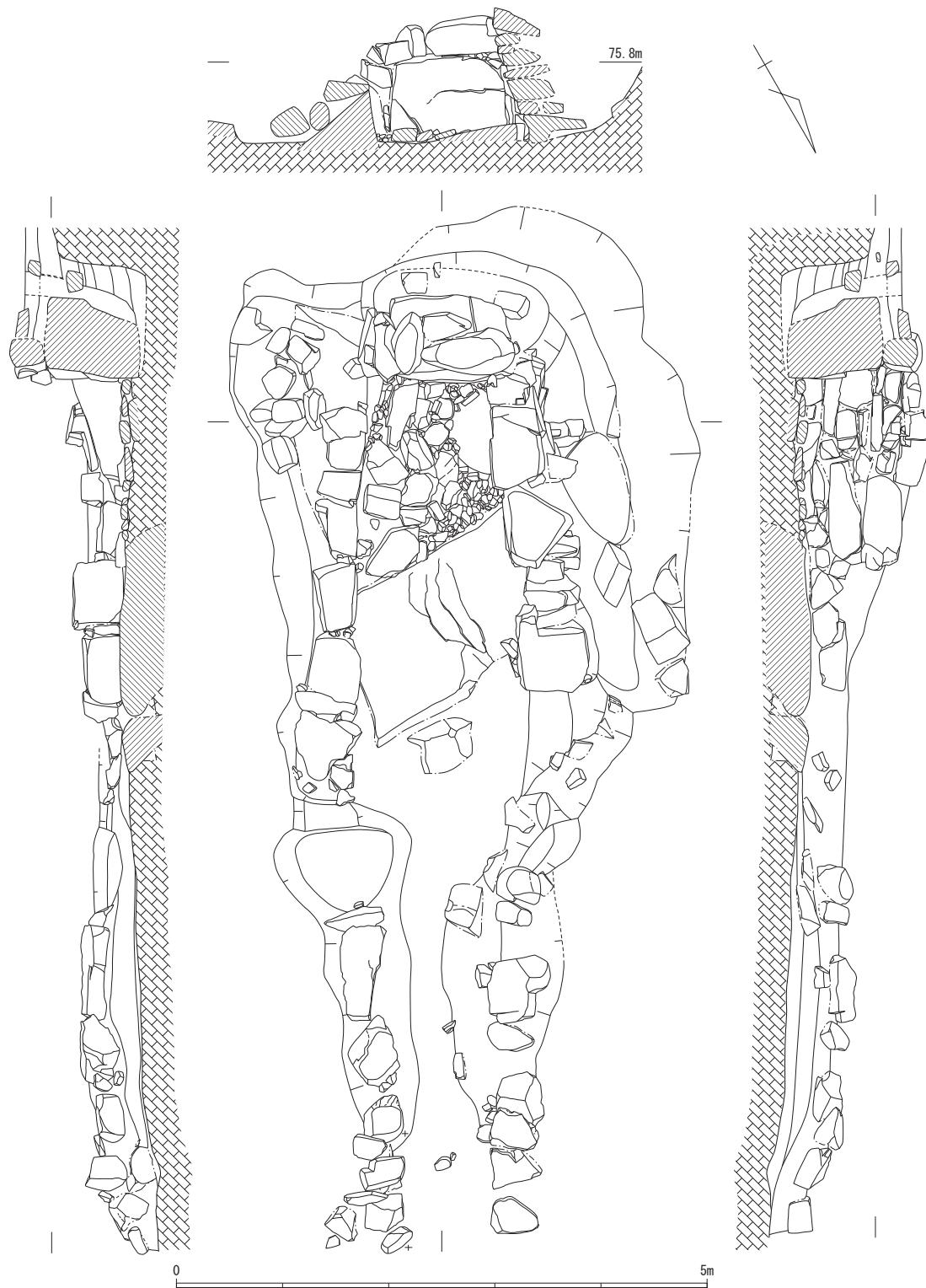
第34図 粟井大塚14号墳墳端部土器出土状況 (1/30)

べ一周り小さく、20~50cm程であるが、両者は一連のもので墳丘を巡らせていた可能性が高い。

閉塞石下から側壁下にかけて甕1を、列石中から甕2、列石下から甕3を検出した（第34図）。甕3は前部下面や閉塞部上層出土の破片と接合する。

横穴式石室（第35・36図、図版11）

石材の抜き取りが基底部にも及ぶが左片袖式石室である。規模は、全長8.1m、玄室幅1.3~1.6mで、



第35図 粟井大塚14号墳横穴式石室（1/60）

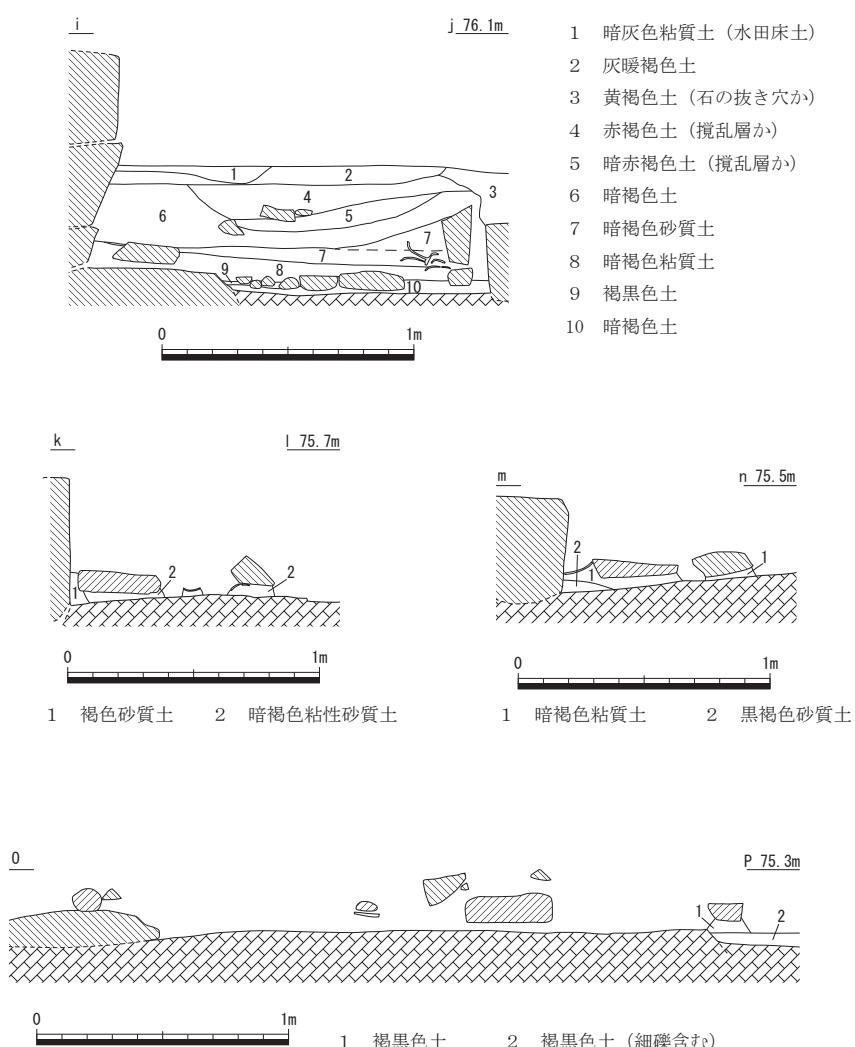
玄室長4.2m、羨道部幅1.1~0.9mである。石室主軸は、N-29°-Eで、北側に開口する。

奥壁は現存で2段分が残り、現状での高さが2.2mである。基底部には、高さ1.8m、幅2.2m程の大石を据えるが、二段目は3石で構成する。右側壁は、奥壁付近の残りが良く、残存高は2.3mである。石材の大小はばらつきが大きく、3~6段に積み上げる。左側壁は、開田時の削平により、ほぼ基底部のみが残る。両側壁とも玄室に比べ羨道部の石が小さい傾向にある。

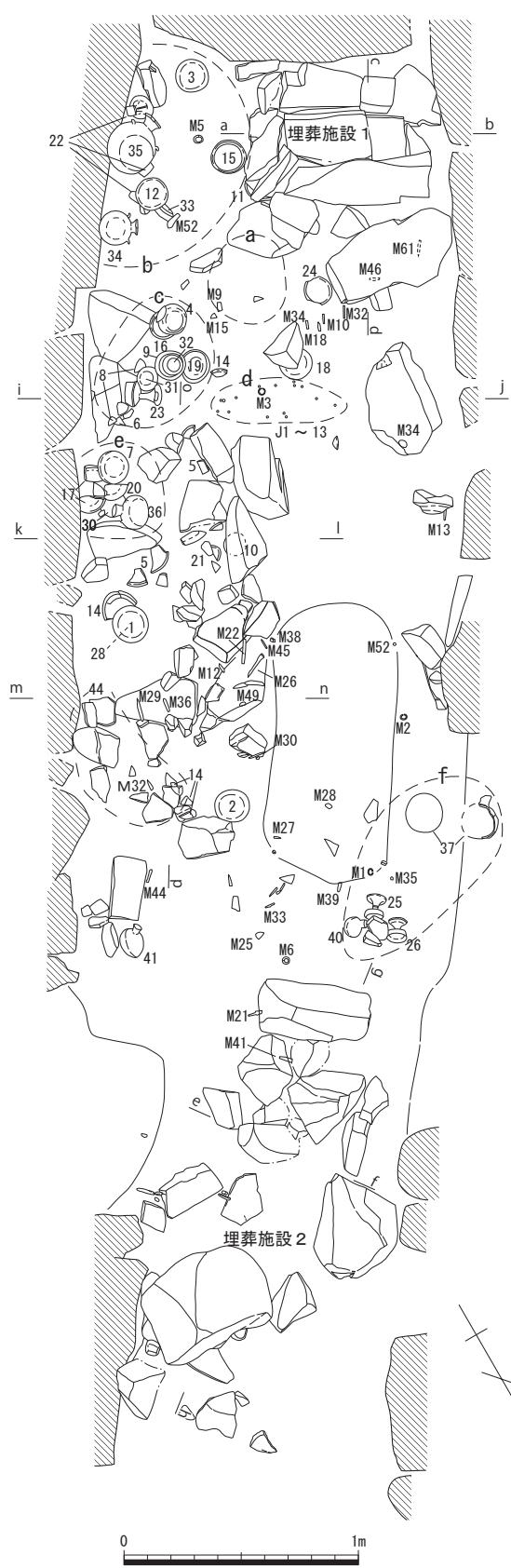
玄室中央には大型の自然露岩が存在するが、それを床石とし、それより奥壁側では角礫や円礫を敷いて床面にしている。追葬時には、その床面上を整地（第36図7・8層）し、上下2面の床面をつくる。棺台や木棺の痕跡、副葬品の配置から5体以上の埋葬が考えられる。

石室床面の状況（第37~39図、図版112）

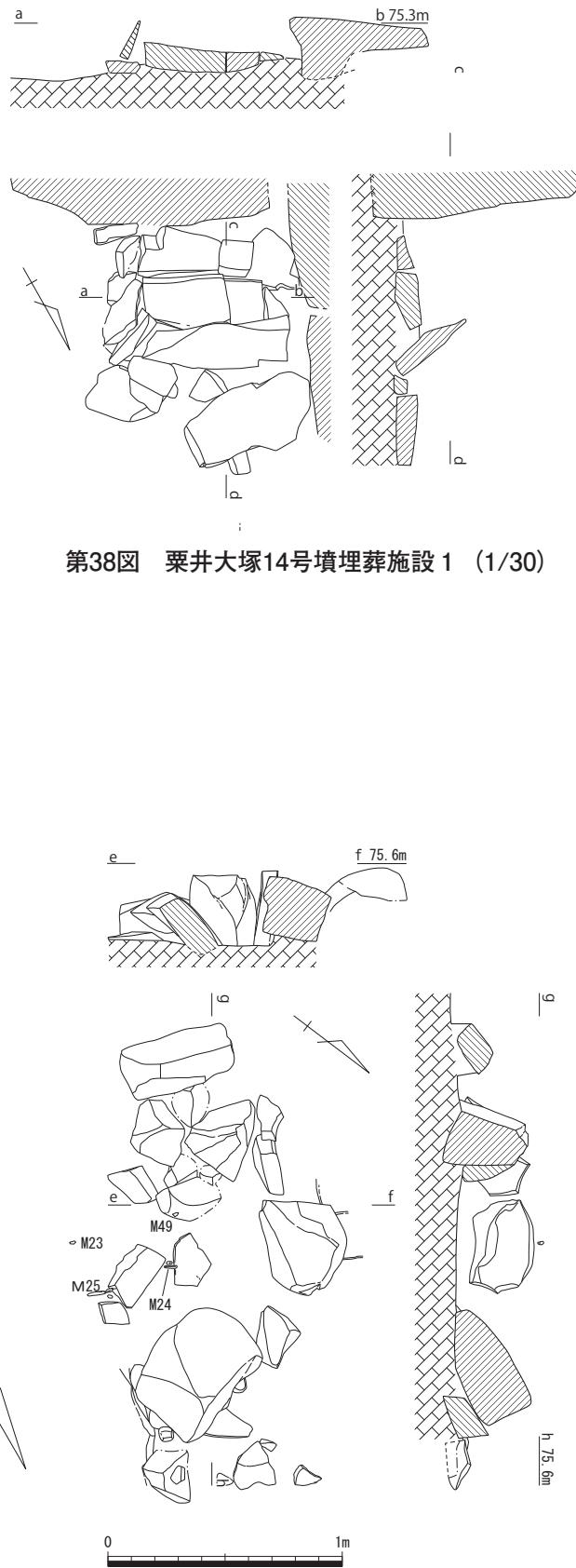
初葬時の床面は、奥壁から3mまでが敷石（自然石も含む）床、石室前半部から羨道にかけては土床（第35図）であり、敷石面では練玉が集中出土（第37図a）している。追葬時の床面では、耳環、練玉、鉄器（弓金具・鉄鏃・釘）、須恵器、土師器が出土状況からいくつかのグループをなし、埋葬最終時での原位置を保っていると考えられる。東側壁沿いの遺物群には、石室南東隅の須恵器杯類3・12、高杯22、提瓶34・35、耳環M5の一群（第37図b）が、その南側には須恵器杯類4・6・8・9



第36図 粟井大塚14号墳石室内土層断面（1/30）



第37図 粟井大塚14号墳
床面遺物出土状況 (1/30)



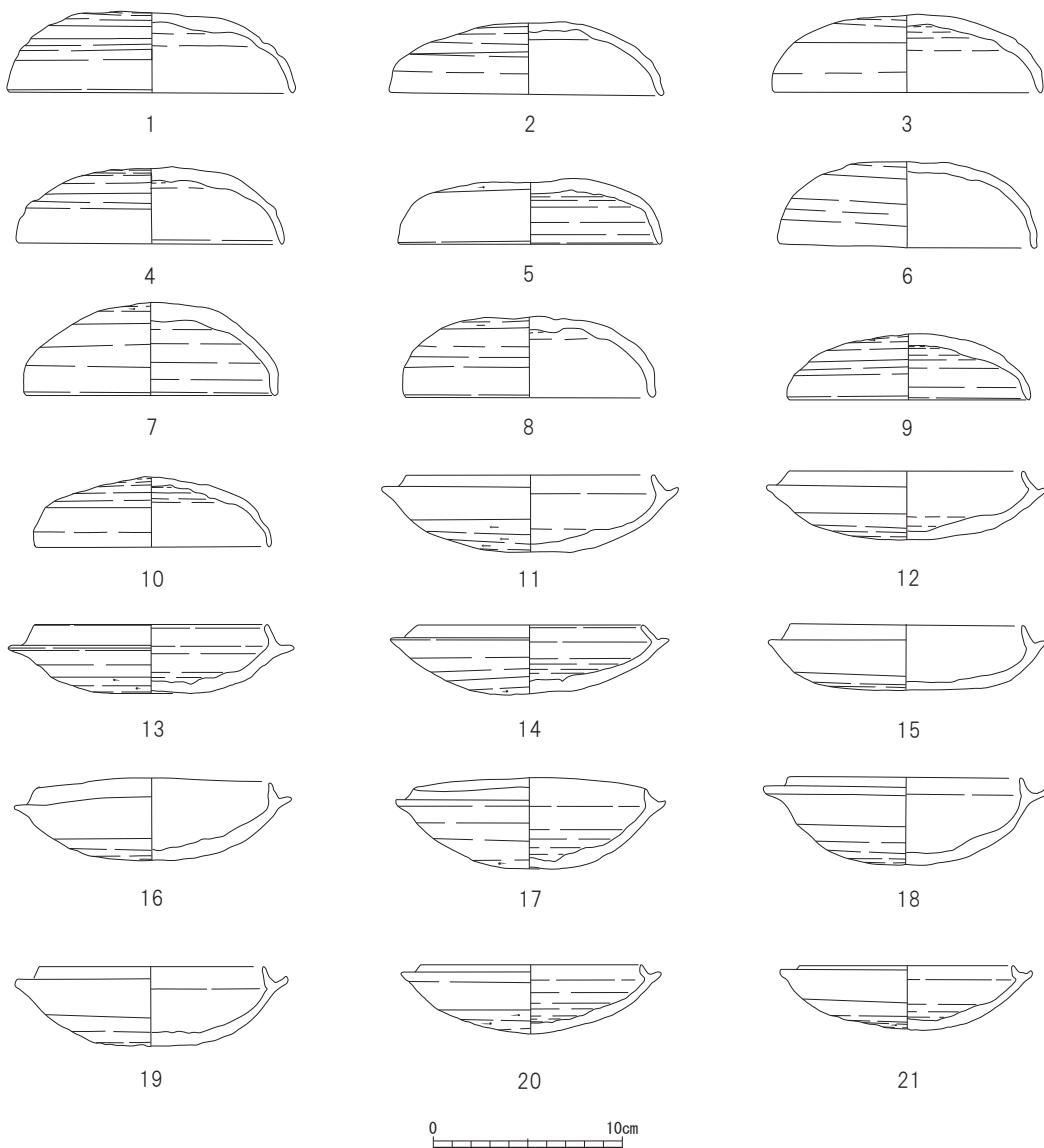
や高杯23、短頸壺32など（第37図c）がある。さらに玄室中央部付近の東壁沿いに配置された棺台の南側では、須恵器杯17・20、提瓶36が（第37図e）、北側では土師器甕45が出土している。また、奥壁から2.8m付近では、石室主軸を中心として幅1mの範囲に玉類と耳環が出土（第37図d）しており、埋葬位置を示す手がかりとなる。

埋葬施設1は、底面に板石2枚を敷き、1.2×1.2mの床面を造る。奥壁と右側壁を壁に使い、北側と東側は板石を立てて壁とする。玄門付近の中軸より西側では、棺釘が原位置を保って出土した。それから推定できる棺の規模は、長さ190cm、幅が105cmである。この棺に伴うとみる高杯25・26、平瓶40（第37図f）は、敷石床上に暗褐色土を置いたその上面で出土する。埋葬施設2は、角礫を立てて壁面とし、1.2×1.0mの空間をつくる。

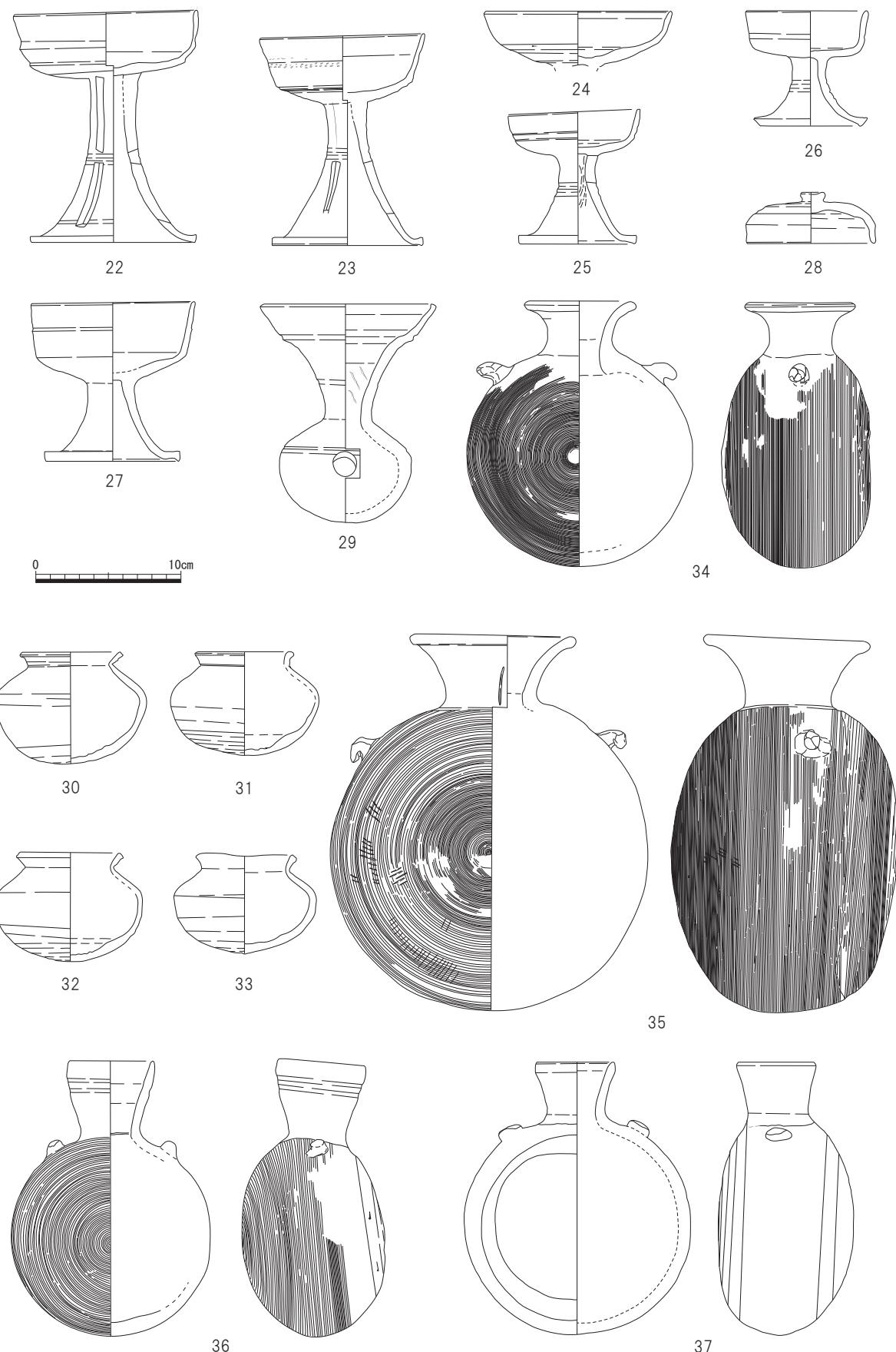
遺物の散布状況と埋葬施設から判断して、5体以上の埋葬があったと考えられる。

出土遺物（第40～45図、図版13～16）

須恵器・土師器、土製品（練玉）、金属製品（耳環・弓金具・刀子・鉄鏃・釘）がある。



第40図 粟井大塚14号墳出土遺物1 (1/4)



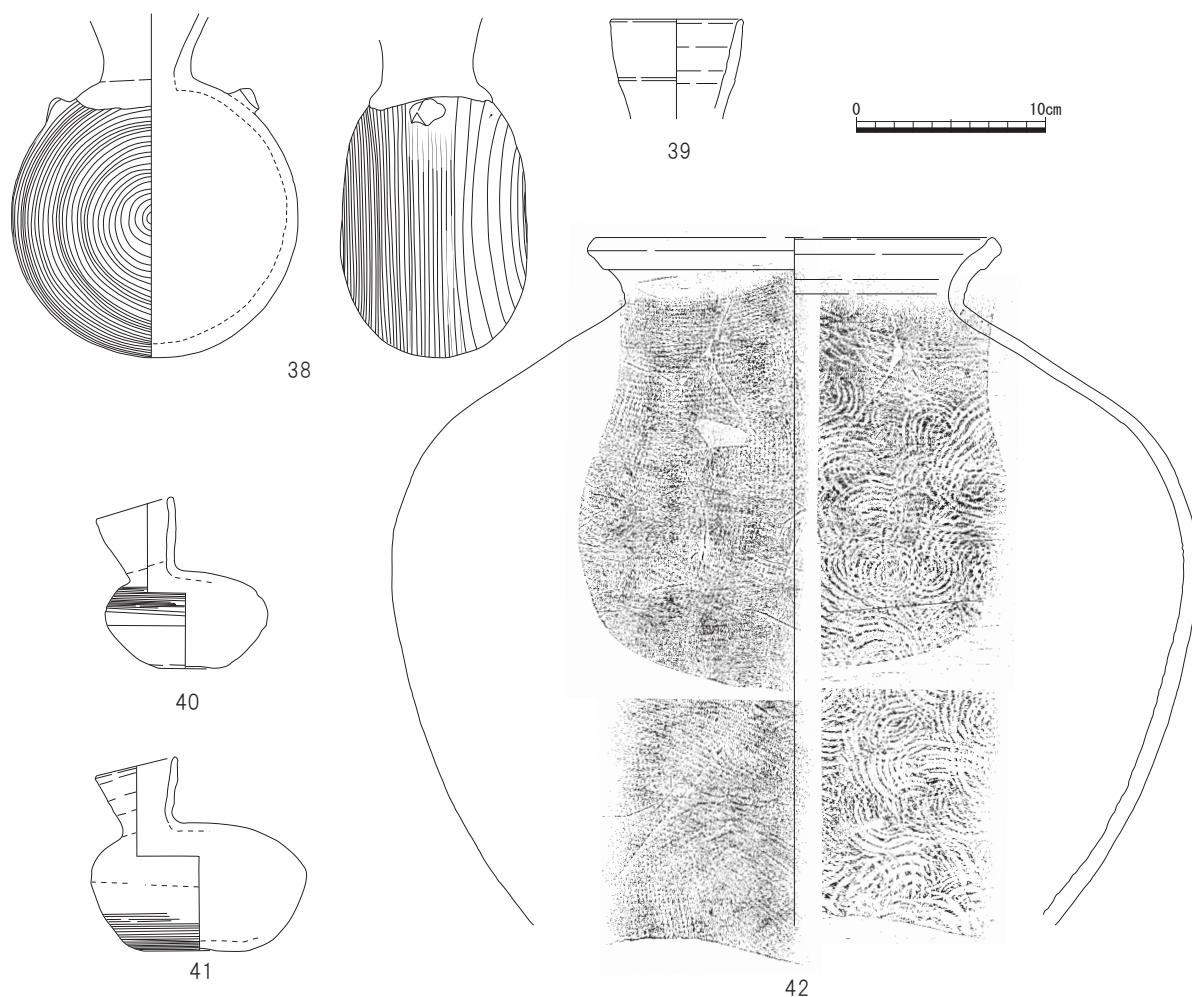
第41図 粟井大塚14号墳出土遺物2 (1/4)

須恵器 (第40~43図、図版13・14)

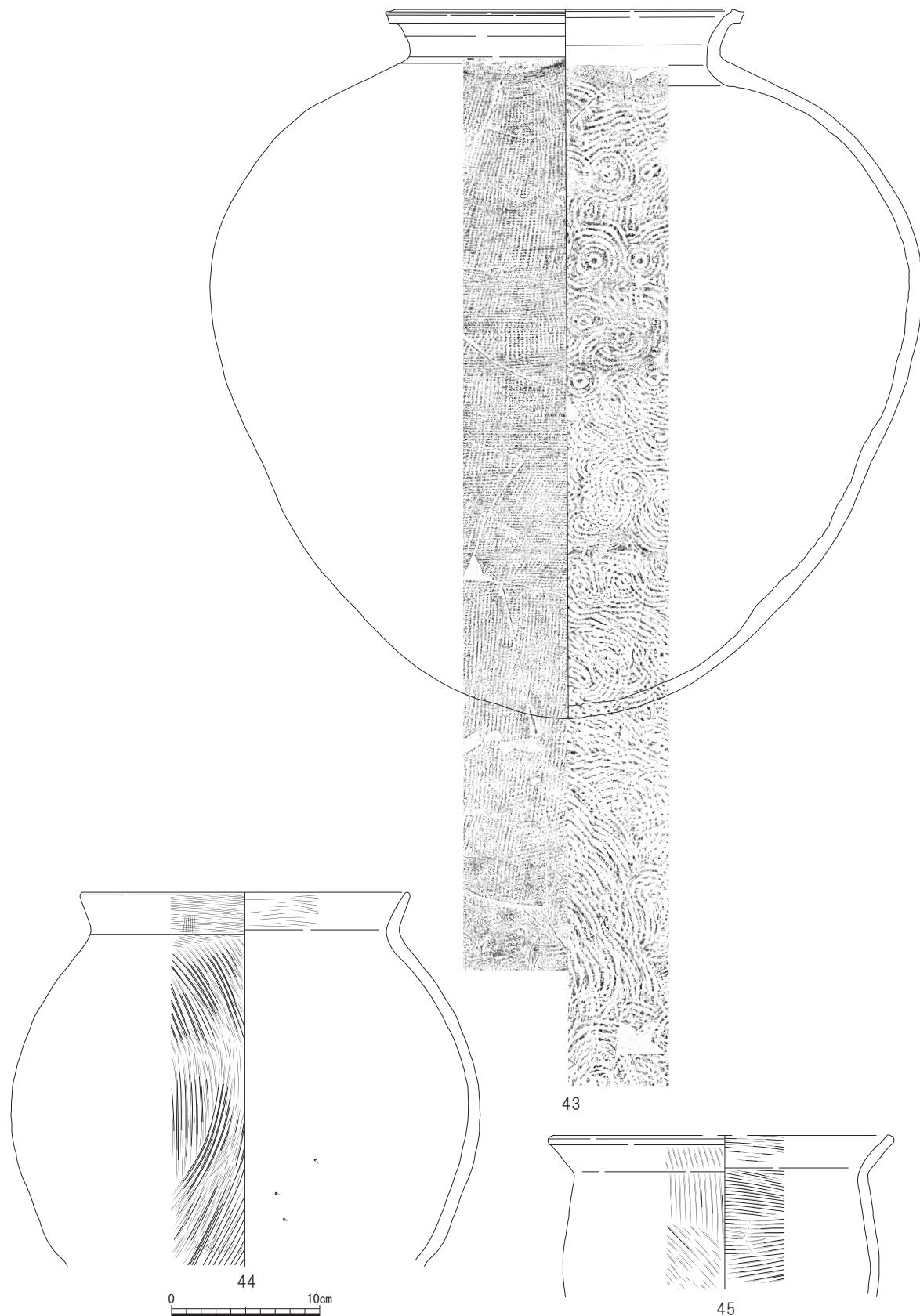
杯蓋 (1~10) を A~d 類に分ける。A 類 (1) は、口径が最も大きく 15cm を測り、器高は 4.8cm である。口縁部と天井部の境界は凹線状の窪みを巡らせる。B 類 (2~4) は、口径が 14cm 以上で、器高が 4cm 前後のグループである。C 類 (5) は、B 類に比べやや小型ではあるが、天井部と口縁部との境まで丁寧に回転ヘラケズリを施す。D 類 (6~8) は、口径は 13cm 大であるが、器高が 4~5cm と高い。A・B 類に比べ、ヘラケズリの範囲は狭い。E 類 (9・10) は、法量が最も小さく、口径が 12cm 大、器高が 3cm 大である。

杯身 (11~21) は、1~5 類に分ける。1 類 (11) は、口径が 13cm 以上かつ器高が 4cm 以上と最も大きく、口縁部の立ち上がりも高い。石棺下から出土しており、初葬時の副葬品と思われる。2 類 (12~15) は、口径が 12cm 以上で器高は 4cm 以下に収まる。口縁部の立ち上がりは 1 類の 11 に近い。3 類 (17・18) は、杯部が深く、底部外面をヘラキリ後ナデて仕上げている。4 類 (16・19) は法量・形態が 17・18 に近いが、底部外面の調整は回転ヘラケズリである。5 類 (20・21) は、法量が最も小さく、短い立ち上がりを持つ。

高杯 (22~28) のうち、長脚二段透かしの 22~25、小型の脚部中央に凹線を巡らす 26、同凹線を欠く 27 がある。22・23 は透かしを 3 分割に割り付け、2 段に穿っている。蓋 28 は、有蓋高杯が確認できていないことから壺の蓋の可能性もある。



第42図 粟井大塚14号墳出土遺物3 (1/4)



第43図 粟井大塚14号墳出土遺物4 (1/4)

提瓶（34～39）では、口縁部を外反させ、肩部にかぎ状の把手をもつ33・34と、外上方に立つ口縁部で、肩部に短い突起を持つ35～37がある。38は後者の口縁部であろう。

このほかにも、腹29、短頸壺30～33、平瓶40・41、甕42・43がある。

土師器（第43図44・45、図版15）

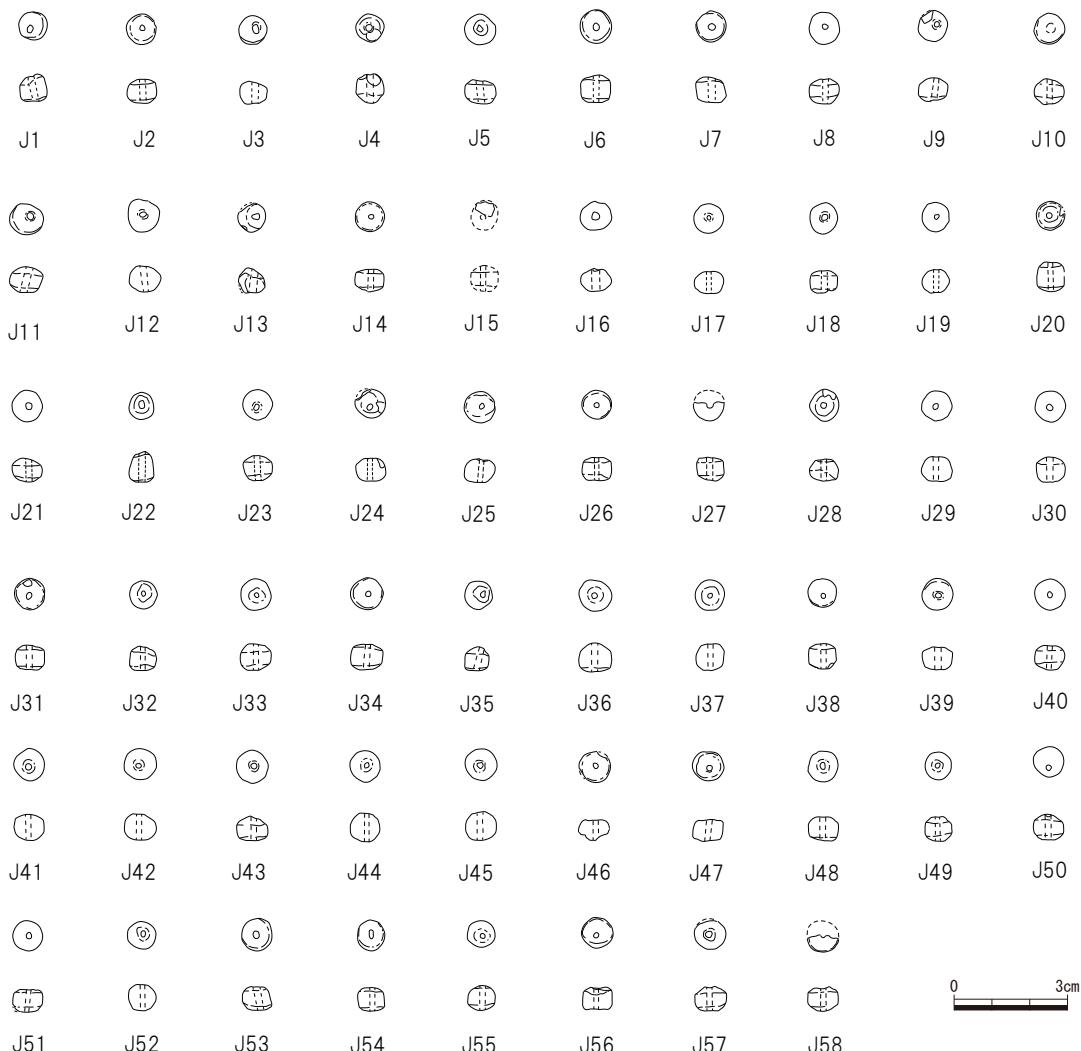
44は、石室内の玄門付近（第37図）で出土している。球形の体部をもち、外面はハケ、内面はナデ調整である。45は、閉塞石上部で出土した。体部下半を欠くが長胴タイプの甕であろう。内外面とも粗いハケメが残る。

玉類（第44図、図版16）

練玉は、玄室敷石面上とその上層の床面上からの出土で、奥壁から2.8m付近でまとまって出土したものと、土壤水洗によって検出したものをあわせて約60点がある。最大径が7.2～8.7mm、孔径は1.1～2.0mmで、重量は0.32～0.55gで、色調は主に暗灰色を呈す。

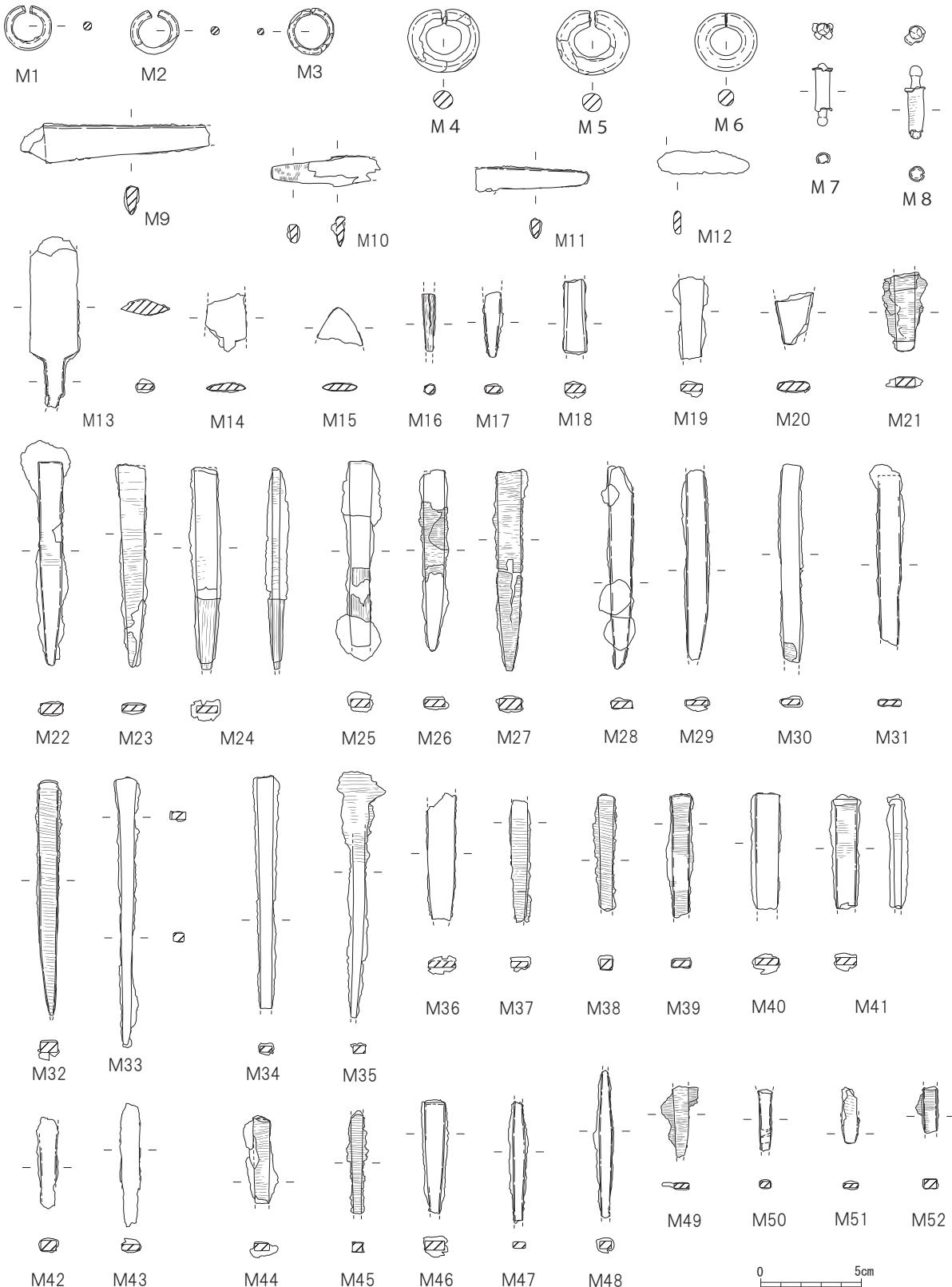
金属製品（第45図、図版16）

土器類に比べ出土量は少なく、馬具類や大刀は確認できない。耳環には、大（M4～6）、小（M1～3）がある。M7・8は、弓の飾金具である。その他には、刀子M9～12、鉄鎌M13～20、鉄釘M



第44図 粟井大塚14号墳出土遺物（1/2）

21～52がある。鉄鏃は残存状況が悪いが、いずれも広根式である。鉄釘M21～52は、木棺の釘である。M41以外はいずれも明瞭な頭部をつくりない。長さから13cm前後で幅が細身のタイプと、長さ10cm前後で幅広タイプがある。



第45図 粟井大塚14号墳出土遺物6 (1/3)

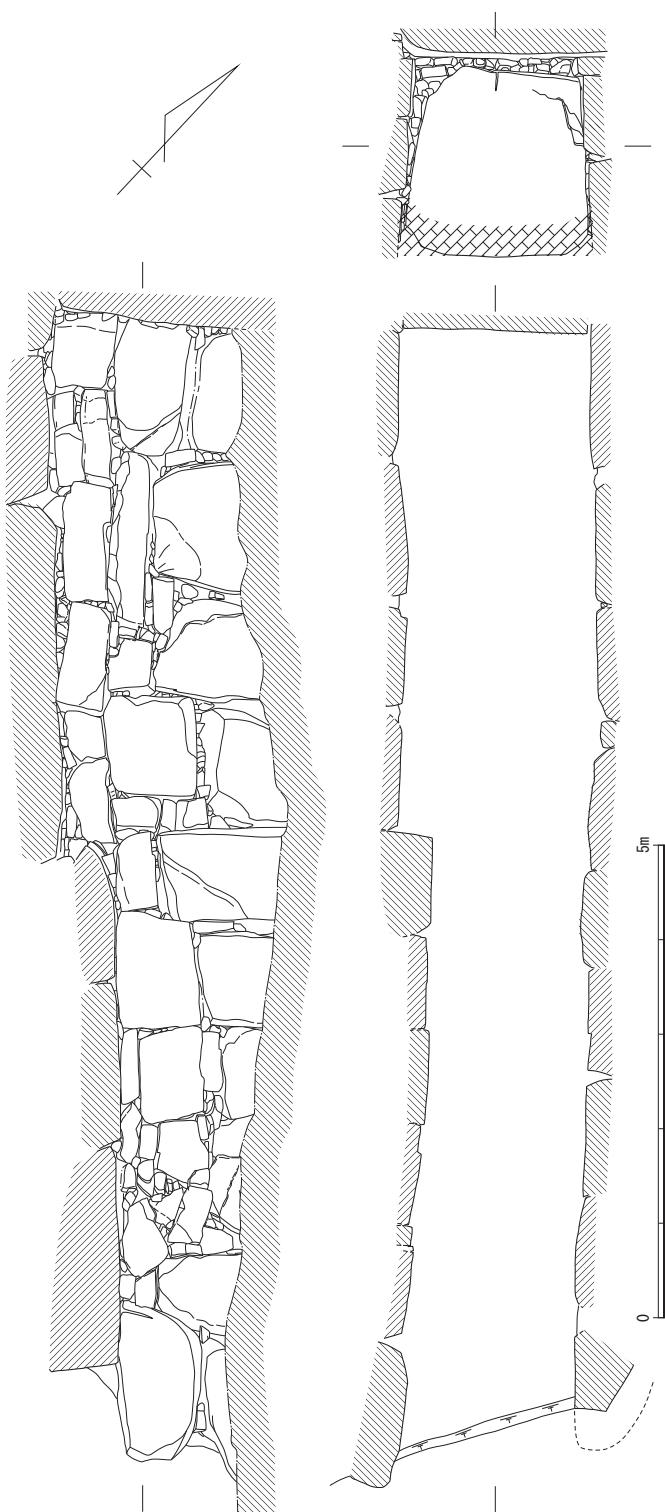
第2節 粟井大塚2号墳 (第5・46・47図、図版9)

早くから水田開墾によって削平されており、横穴式石室とそれを覆うように長軸17m、短軸10m程のわずかばかりの墳丘が残っていた（第5図）。調査範囲はその墳丘北側裾部分にあたり、調査の結果、墳丘西側において幅4～5m、深さ1.1m周溝を確認し（第47図）、それによって2号墳は直径25m程の

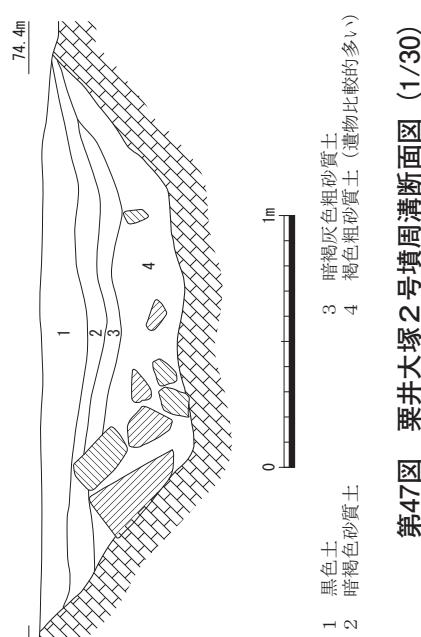
円墳に復元できたものの、葺石などの外表施設については確認できなかった。

埋葬施設は、全長が12.2mの左片袖式の横穴式石室である。玄室長が5.3m、幅は2m、奥壁部の高さが2.15mで、羨道部長が6.9m、幅は1.65～1.8m、現状での高さが1.7mである。奥壁はほぼ1枚の大石を立て、天井石との隙間を割石で埋めている。玄室の右側壁は3段積みである。1～2段目は縦方向と横方向に用いるが3段目は横方向にそろえ横目地が通る。天井石は玄室、羨道とも3枚である。

石室の内外を含めて、2号墳に係る遺物は確認していない。



第46図 粟井大塚2号墳横穴式石室 (1/80)



第47図 粟井大塚2号墳周溝断面図 (1/30)

第3節 古墳に伴わない遺構・遺物（第48～50図、図版15・16）

14号墳の周溝東側と溝1との間において、土坑3基と炉3基を、14号墳の西側において炉1基を検出した（第48図）。

土坑1～3（第49図）

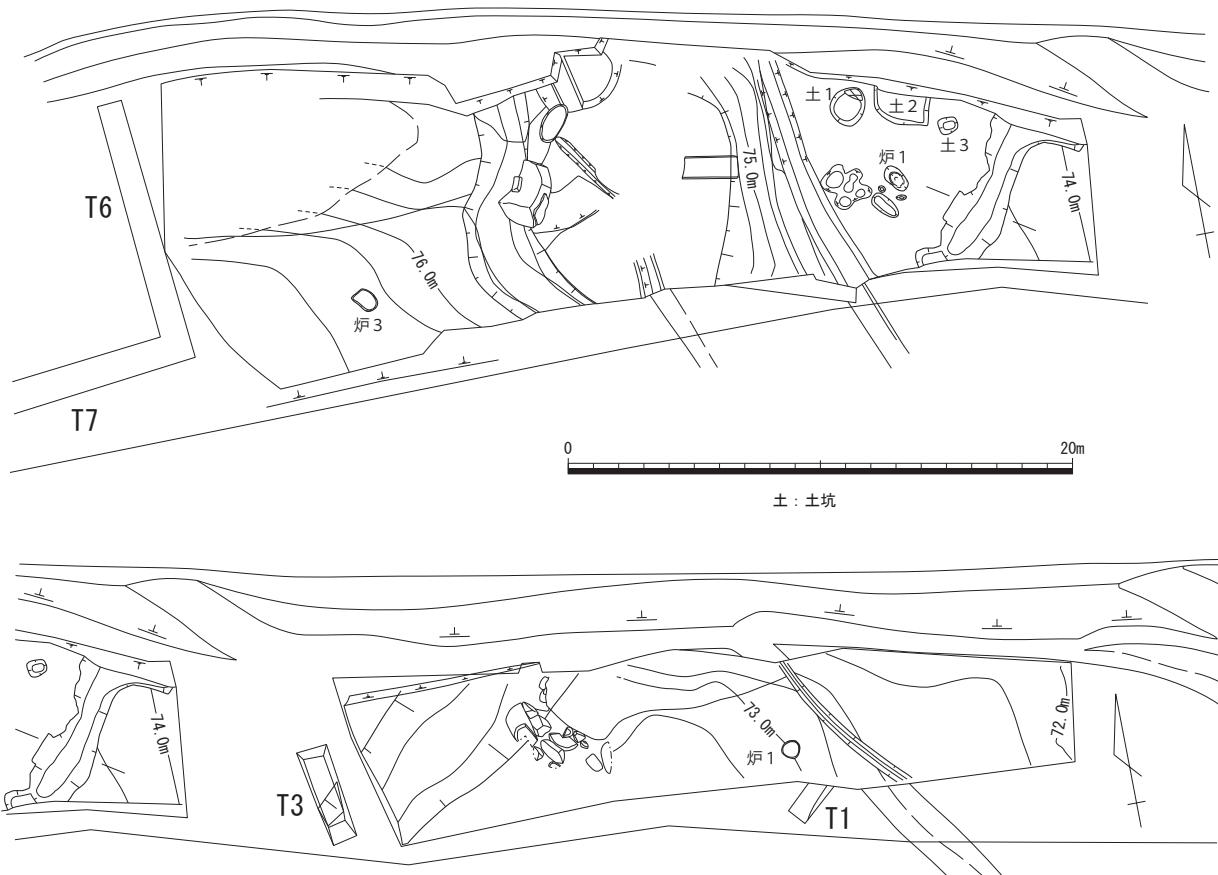
土坑1は、長軸が164cm、短軸は132cm、深さが30cmで、平面形がやや丸みを帯びた方形を呈す。土坑2は、残存部長が235cm、幅は140cmで、深さが53cmである。土坑3は、平面形が隅丸方形で、長さが70cm、幅は60cm、深さが40cmである。

炉1～3（第49図）

炉1は、長さ115cm、幅67cm、深さ15cmの長円形を呈する。炉2は、長さ48cm、幅35cm、深さ5cmの隅丸長方形の炉である。炉3は、直径36cm、深さ7cmでやや歪な円形を呈する。各炉とも掘り方の周縁が熱影響を受けて赤変し、炉の内部には炭層が認められた。いずれの土坑、炉も、遺物は出土しておらず、時期は特定できない。

溝1（第49図）は、T4で検出した溝で、幅が1.2～2.3mで、深さは0.6m程である。底は南が浅く北が深い。埋土中に弥生時代後期の土器片を含むが、古墳時代以降の可能性もある。

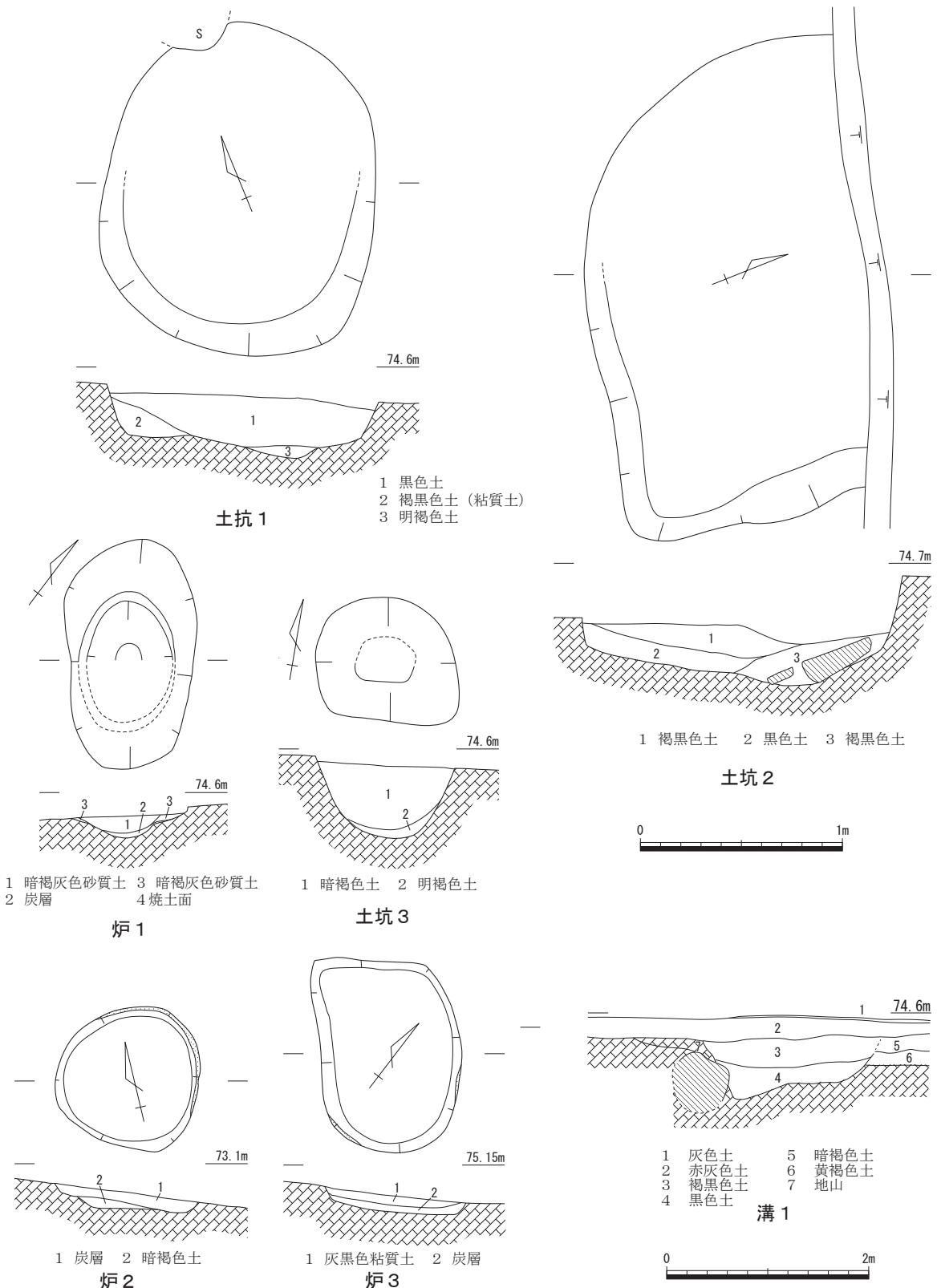
表土及び流土中からは、縄文土器46・47、弥生土器48～50、土師器51、亀山焼52及び縄文～弥生時代のサヌカイト製石鎌S1～3、同剝片、粘板岩製の打製石包丁S4など（第50図）が出土してお



第48図 古墳に伴わない遺構配置（1/300）

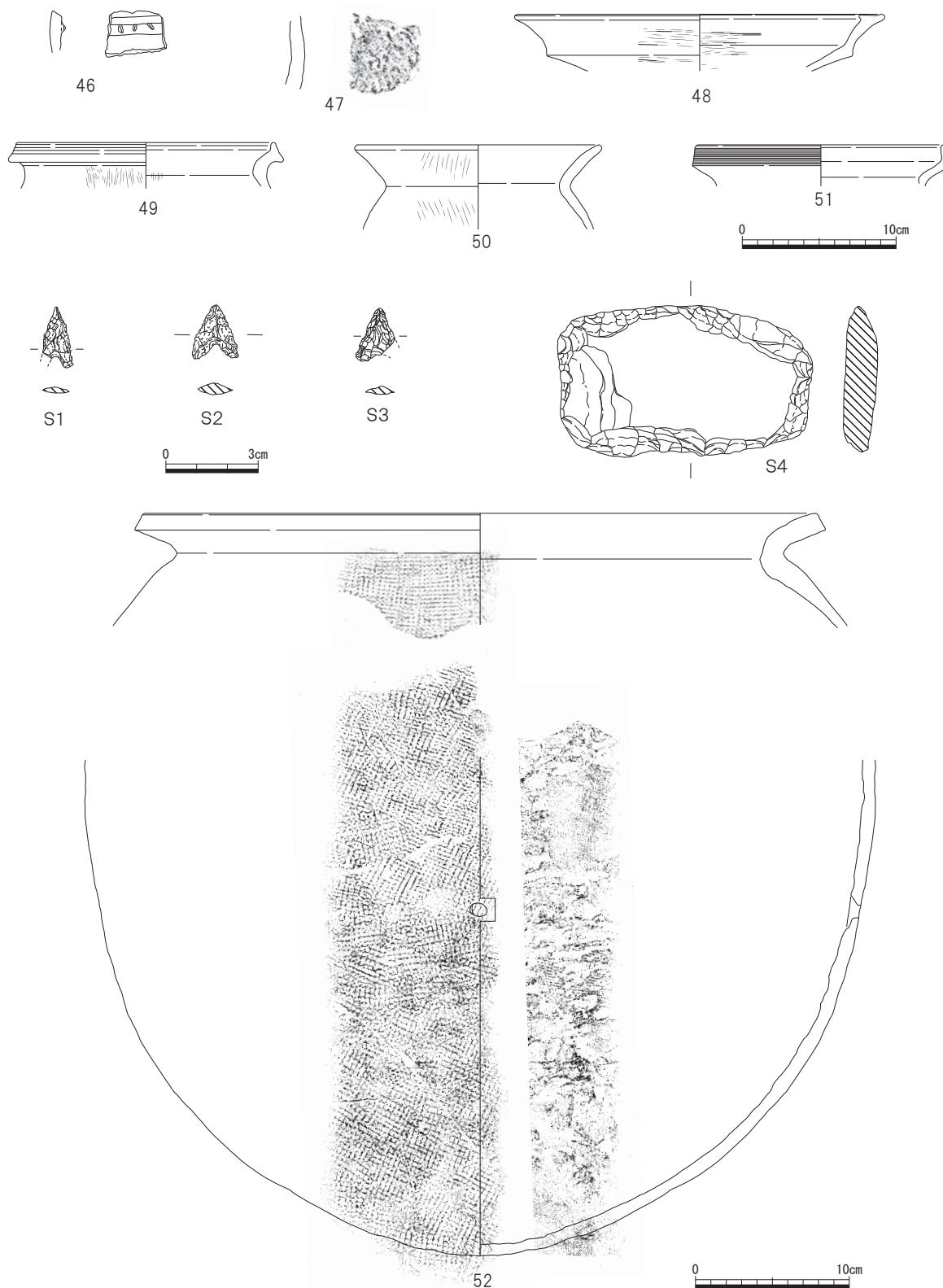
り、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が近在すると思われる。このほかに鉄滓も出土しているが、時期は不明である。

52は、14号墳の周溝埋土（黒色土）中からまとまって出土した亀山焼の大甕1個体分で、時期は13



第49図 土坑・炉 (1/30)、溝 (1/60)

世紀後半～14世紀前半であろう。体部中央よりやや下方に焼成後の穿孔がみられ、人骨や副葬品は無いものの埋葬に用いられた埋甕と考えられる。水田開田以前に、古墳の墳丘裾に中世の墳墓が存在していた可能性がある。



第50図 古墳に伴わない遺物 (1/4・1/3)

第4章 考察

粟井大塚古墳群の中でも石室規模大きい1・2・10号墳は、奥・側壁や袖部の石積み、石室の平面形態の比較から、10号墳が最も古く、次いで1号墳から2号墳の順に築造されたと考えられる。10号墳は、石室の平面形態や石積みの様相から6世紀中葉（須恵器陶邑編年TK10型式・MT85型式併行期）までは遡らず、7世紀には下らないとみており、本報告の14号墳（TK43型式併行：6世紀後半）とほぼ同時期に築造されたと考える。2号墳は、同じ備中南部域に所在する総社市金子石塔塚古墳（石室全長11.65m、玄室長5.5m、同幅1.9m、羨道部幅1.45m）と比較すると、両墳とも奥壁は1段、側壁は3段の石積みであり（袖石は金子石塔塚が1段、粟井大塚2号墳が2段）、墳丘規模も石室規模もほぼ等しい。金子石塔塚古墳出土の須恵器はTK209型式併行と考えており、粟井大塚2号墳の築造時期も同時期（6世紀末～7世紀初頭）と考えたい。つまり、粟井古墳群は、6世紀後半～7世紀初頭にかけて、10・14号墳→1・3号墳→2・11号墳の順に築造されたと考えられる。

粟井大塚古墳群は、小河川の流域に立地するとはいえ可耕地に乏しい吉備高原の中にあって刮目すべき規模・内容といいえ、その背景に農業生産以外を考えることは必然であろう。この粟井の地は、律令期には賀夜郡大井郷粟井里であった。天平11年の備中国大税負死亡人帳（『正倉院文書／大日古編年2』）によれば備中国賀夜郡大井郷の「粟井里戸東漢人部刀良手」なる人物が天平11年7月8日に死亡したとある。また、隣接する宗部里にも西漢人部麻呂の名がみえる。東漢人部と粟井古墳群との関係を示す資料は無いが渡来系氏族と関わりがある人物の存在は注目される。なお、粟井古墳群から5kmほど南に位置する現在の総社市阿曾地区は賀夜郡阿蘇郷にあたり、製鉄遺跡とともに数多くの後期古墳が立地する。奥坂遺跡群の発掘調査では、6世紀後半～8世紀にかけて2～4基の製鉄炉が、2～6基の製炭窯を伴い転々と移動しながら操業を繰り返したとされる。それと併行するように、千引古墳群では6世紀第4四半期～7世紀代にかけての横穴式石室墳が10基、千引遺跡では8世紀前半の火葬墓が5基確認されている。平城宮出土の荷札木簡のうち「大井鍬十口・○九月一日」は、賀夜郡大井郷から鍬10口が進上されたことを示しており、隣接する賀夜郡阿蘇郷と同様、粟井古墳群の造営主体が製鉄や鍛冶を生業としていた可能性があろう。

調査を行った14号墳の横穴式石室は、床面の保存状態は良く奥壁付近には敷石が存在した。石室床面の構造は、最も一般的な土床の他、横穴式石室導入期に多い礫床（緑山6号墳）や敷石床があるが、総社平野、とりわけ新本川流域（八絃古墳群など）などでは礫床から敷石床への変化が見て取れる。



写真1 粟井大塚10号墳石室



写真2 粟井大塚2号墳石室



写真3 粟井大塚11号墳石室

先に触れた千引古墳群では、6世紀代の2基が敷石床で、7世紀代には土床に棺台と多数の棺釘、土床に棺台と釘を伴わない棺へと変化したとみられる。このうち千引2号墳は、右片袖式の横穴式石室で、全長7.2m、玄室長4.6m、同最大幅1.9m、羨道幅1.3mと粟井大塚10号墳の石室と比べて一時期後出するものの、石室規模は遜色なく、玄室奥と袖部にベッド状の敷石を設ける。敷石床は基本的に棺釘を伴わないことから木棺を用い亡骸を敷石上に安置したと考えられ、追葬時に設置された例も知られている。粟井大塚14号墳は、総社市域北東部の奥坂・阿曾・久米といった古墳集中地域に隣接し、それら古墳群との関連が想起され、かつ敷石床の成立期に位置づけられる可能性もある。

出土遺物については、馬具類を欠くものの特異な遺物として弓飾金具が出土している。弓飾り金具の県下での出土例は、粟井大塚14号墳を含めわずか17例である。時期は6世紀中葉から7世紀前半に及び、墳形も前方後円墳から円墳、方墳が存在し、埋葬施設では、横穴式石室以外に、竪穴式石室、木棺直葬があった。副葬品をみると、概ね馬具を副葬しているが、粟井14号墳のように馬具を持たない古墳も存在する。吉備の首長墓から、小地域での首長系譜を引くと見られる古墳から群集墳中の有力家長世帯墓にいたるまで多様な出土状況を示しており、今後の検討課題としたい。

林原古墳群では、9基中6基で横穴式石室のおおよその形態・規模が判明している。発掘調査を実施した5号墳の石室は無袖式で、奥壁を1石、側壁は4石で構成し、須恵器からみた築造時期は7世紀前半で、6基中では最も新しいと考えられる。奥壁の石積をみると4号墳（2段）、3号墳（4段）、2号墳（4段）の順に古相を示すと考えられ、石室の図化を行った6号墳は石室石積みの様相から2～5号墳よりは古相を示す。奥壁は3～4段、側壁は4～5段に積み、明瞭な袖部をもつものの、6世紀中葉までは遡らないとみられる。周辺域の調査事例から同規模の玄室を持つ古墳をあげると、岩田8号墳、西山2号墳、段塚古墳第1主体などがある。これら各墳の初葬段階の須恵器はTK43型式に併行することから、林原6号墳の時期もTK43型式に併行期と考えておく。

林原5号墳は、中世以降に墓として再利用されており、古墳副葬品に原位置を保つと思われるものが少ない。墓坑は一部を除き明確では無いが、和鏡と白磁3点が出土していることから墓と判断した。和鏡と白磁は、やや離れて出土したことから、複数の墓坑が存在した可能性もある。その他にも土師器鍋、杯、皿が出土しており、土師器鍋は幼小児埋葬の例（高塚遺跡土坑墓19）が知られることから、墓地として数回の利用があったと考えられる。

和鏡出土の墓を県内の例でみると、時期は、平安時代末～鎌倉時代の中に収まる。供伴遺物として、青白磁、白磁、青磁を伴う場合が多く、刀子を供伴する例も3例ある。一方で陶磁器は伴わず、刀子と針、あるいは土師器皿のみという例も存在している。県下の中世集落内における土坑墓は、墓坑の規模・形態から、①楕円形土坑に屈葬（直葬）、木棺を用いた②屈葬（墓坑が矩形ないし幅広の長方形）と③伸展葬（膝を折る）の3類が存在する。和鏡出土墓は木棺が想定され、屈葬ないしは伸展葬である。百間川原尾島遺跡、津寺遺跡、高塚遺跡を例に取ると、和鏡出土墓は集落の縁辺に形成された集団墓地の中にあり、先の①の場合は、無遺物か土師質土器を副葬、②では、無遺物の場合もあるがア：土師質土器を副葬し、イ：アに刀物が加わる例、イの白磁が加わる例が知られる。和鏡出土の中世墓5は、③で青白磁・刀物・土師質土器を副葬している。百間川原尾島遺跡では、②に和鏡と青磁の組み合わせや腰刀のみを副葬する例があり、③には、白磁のみを副葬する例が2基存在した。この②と③の差異は、②から③への時期的な変化を示している可能性であろう。県内の和鏡出土墓例には、刀子と針（久田原遺跡土坑墓7）、土師質土器（夏栗遺跡土坑墓6）のみの例も存在し、和鏡出土

墓が集落墓地内において必ずしも優位性示しているとは限らないのではなかろうか。

中世段階の林原地区に集落が形成されたか否かは現段階では不明であり、古墳群の被葬者の性格で指摘されたことと同様ように、舟運や川港に係わりそれらを統括する人物の墓と想定しておきたい。

表4 弓飾り金具出土古墳

	名称	墳径	規模 (m)	主体部	石室規模 長さ×幅 (m)	副葬品	時期
1	二万大塚	前方後円墳	38	両袖式石室	玄室4.67×2.48。 羨道4.42×0.898	銅鏡、耳環、玉類、鉄刀、鉄鎌、刀子、鉄、馬具類	6世紀中葉
2	西山3号墳	円墳	9.5	右片袖式石室	玄室2.8×1.6。 羨道2.0×0.8	大刀、刀子、鉄鎌、馬具、鉄斧、耳環、玉類	6世紀中葉
3	持坂20号墳	円墳	26	両袖式石室	玄室4.3×2.38。 羨道2.9×1.1	大刀、鉄鎌、刀子、ころく、馬具、U字型 鋤先、耳環、玉類	6世紀中葉～後半
4	齋富2号墳第4主 体	円墳？	15	右片袖式石室	玄室5.0×1.8。 羨道2.8×1.15	大刀、刀子、鉄鎌、馬具、鉄斧、耳環、 玉類	6世紀中葉～後半
5	粟井大塚14号墳	円墳	11	左片袖式石室	玄室4.2×1.6。 羨道3.9×1.1	鉄鎌、刀子、玉類	6世紀後半
6	西山2号墳	円墳	15.5	左片袖式石室	玄室4.4×2.15。 羨道4.9×1.6	鐔、刀、鉄鎌、刀子、バグリ、耳環、玉 類	6世紀後半
7	塚段古墳第1石室	前方後円墳	33	横穴式石室	玄室4.8×2.2。 羨道3.6×1.45	銅鏡、馬具、鉄鎌、刀子、窯、玉類	6世紀後半
8	小中6号墳	円墳	12	木棺直葬	—	大刀、鉄鎌	6世紀後半
9	コウモリ塚古墳	前方後円墳	100	両袖式石室	玄室7.7×3.6。 羨道11.7×2.26	単鳳環頭大刀、鉄鎌、馬具類、刀子、鎌、鑿、 鉢、玉類、耳環	6世紀後半
10	桑山南1号墳	円墳	14	左片袖式石室	玄室2.7×1.7。 羨道3.8×1.2	象眼大刀、鉄鎌、刀子、工具？、耳環、玉 類	6世紀後半
11	桑山南2号墳	円墳		豎穴式石室	—	鉄鎌、刀子、玉類	6世紀末～7世紀初頭
12	門前中屋古墳	円墳	10	左片袖式石室	玄室3.2×1.42。 羨道2.1×1.12	馬具類、大刀、刀子、鉄鎌、玉類、耳環	6世紀末～7世紀初頭
13	鳩ヶ岩山古墳	円墳	12.5	無袖式石室	全長7.6×幅1.8	刀、刀子、鉄鎌、耳環、玉類、滑石製紡 錐車	6世紀末～7世紀初頭
14	琴海1号墳	円墳	12	無袖式石室	全長7.4×2.1	主頭大刀柄頭、大刀、刀装具類、鉢、鉄鎌、 刀子、ガラス玉、耳環	7世紀前半
15	湾戸7号墳	円墳	13	横穴式石室	4.7以上×1.9～2.0	大刀、大刀鐔、鉄鎌、のみ、ヤス、鎌、 玉類、耳環	7世紀前半
16	定東塚古墳	方墳	25×18	左片袖式石室	玄室5.5×2.6。 羨道6.35×1.9～ 1.85	大刀、鉢、鉄鎌、馬具類、鋤先、刀子、 金製環、金糸、耳環、玉類	7世紀前半
17	定西塚	方墳	南北16m	左片袖式石室	玄室5.0×2.2。 羨道5.7×2.2～2.1	方頭大刀、青銅製刀装具、馬具類、鉄属、 耳環、玉類	7世紀前半

参考文献

- 『総社市史 考古資料編』総社市 1987
- 吉田 晶「第4章 民衆生活と律令制」『岡山県史 古代II』岡山県 1989
- 「醫王谷古墳 醫王田遺跡」岡山市教育委員会 2008
- 『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 1999
- 「門前中屋古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査11』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21 岡山県教育委員会 1977
- 「岩田8号墳」「岩田古墳群」山陽町教育委員会 1976
- 「西山3号墳」「西山古墳群 田益新田遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告109 岡山県教育委員会 1996
- 「段塚古墳」「段塚古墳 坂口古墳」岡山市教育委員会 2016
- 「高塚遺跡」「高塚遺跡 三手遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 岡山県教育委員会 2000
- 『八紘古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告233 岡山県教育委員会 2011
- 「八紘古墳群」「樽見1号墳 法正寺1号墳八紘古墳群」総社市埋蔵文化財発掘調査報告29 総社市教育委員会 2019
- 『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105 岡山県教育委員会 1996
- 「津寺遺跡」「山陽自動車道建設に伴う発掘調査9」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90 岡山県教育委員会 1994
- 「久田原遺跡」「久田原遺跡 久田原古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会 2004
- 『夏栗遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194 岡山県教育委員会 2005

遺物一覧表

- ・「計測値」の、「()」は残存値を示し、「-」は計測不能を示す。
- ・「色調」は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修及び『色の手帳』水田泰弘監修 小学館を使用した。
- ・石製品の「石材」については、岡山大学特命教授鈴木茂之氏のご教示による。

林原古墳群

土器

掲載番号	種別	器種	計測値cm			色調		焼成	残存状況	備考
			口径	底径	器高	内面	外面			
1	須恵器	杯身	11.4	6.4	4.65	暗青灰 (5BG4/1)	暗青灰 (5BG4/1)	良好	完形	
2	須恵器	杯身	13.4	7.3	4.4	浅黄 (2.5Y7/3)	灰黄 (2.5Y7/2)	良好	ほぼ完形	
3	須恵器	短頸壺	8.5	-	(7.4)	灰 (10YR6/1)	灰 (10YR6/1)	良好	口縁1/6	
4	須恵器	堤瓶	5.2	-	17.4	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	良好	ほぼ完形	
5	須恵器	平瓶	5.75	-	15.1	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	完形	
6	須恵器	平瓶	5.4	-	13.2	灰オリーブ (7.5Y6/2)	灰 (N6/)	良好	完形	
7	須恵器	杯	15.8	-	(4.0)	灰白 (7.5YR8/1)	灰白 (7.5YR8/1)	良好	1/3	
8	須恵器	壺	-	-	(4.95)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	良好	胴部破片	
9	須恵器	甕	13.0	-	(4.2)	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	良好	口縁部1/8	
10	須恵器	甕	21.8	-	(5.5)	褐灰 (10YR4/1)	鈍黄褐 (10YR5/3)	良好	口縁～肩部1/5	
11	須恵器	甕	-	-	(7.55)	黄灰 (2.5Y5/1)	黒褐 (2.5Y3/1)	良好	胴部破片	
12	須恵器	甕	-	-	(10.8)	灰黄褐 (10YR5/2)	褐灰 (5YR4/1)	良好	胴部破片	
13	須恵器	甕	-	-	(9.3)	黄灰 (2.5Y5/1)	鈍黄 (2.5Y6/3)	良好	胴部破片	
14	白磁	碗	16.8	6.0	6.7	素地:灰白 (7.5Y8/1)	釉葉灰白 (5Y7/2)	堅緻	完形	
15	白磁	皿	9.7	4.7	2.2	素地:鈍黄 (10YR7/3)	釉葉灰白 (7.5Y7/1)	堅緻	完形	
16	白磁	皿	9.8	4.5	2.7	素地:鈍黄 (10YR7/3)	釉葉灰白 (7.5Y7/1)	堅緻	完形	
17	土師器	碗	-	-	5.0	灰白 (10YR8/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	良好	高台部1/2	
18	弥生土器	甕	15.2	-	(5.2)	鈍褐 (7.5YR5/4)	鈍褐 (7.5YR5/4)	良好	口縁～肩部1/4	
19	弥生土器	甕	-	-	(5.4)	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	良好	口縁部破片	
20	弥生土器	甕	-	-	(4.3)	鈍黄 (10YR6/4)	鈍橙 (7.5YR6/4)	良好	口縁部破片	
21	弥生土器	甕	-	-	(2.7)	橙 (7.5YR6/6)	鈍褐 (7.5YR5/4)	良好	口縁部破片	
22	弥生土器	甕	13.4	-	(4.1)	鈍黄 (10YR6/3)	鈍黄 (10YR6/3)	良好	口縁部1/8	
23	弥生土器	甕	15.8	-	(3.9)	鈍褐 (7.5YR5/4)	鈍褐 (7.5YR5/4)	良好	口縁部1/6	
24	弥生土器	甕	-	-	(3.0)	鈍黄 (10YR6/3)	鈍黄 (10YR6/3)	良好	口縁部破片	
25	弥生土器	甕	-	-	5.0	(4.7) 橙 (7.5YR6/4)	鈍橙 (7.5YR6/4)	良好	底部1/4	
26	弥生土器	甕	-	-	5.8	(2.2) 鈍黄 (10YR5/3)	鈍黄 (10YR5/3)	良好	底部2/3	
27	弥生土器	甕	-	-	(3.0)	鈍褐 (7.5YR5/4)	鈍褐 (7.5YR5/4)	良好	底部3/4	
28	弥生土器	甕	-	-	(2.0)	鈍橙 (7.5YR6/4)	鈍黄褐 (10YR5/3)	良好	底部～胴部片	
29	弥生土器	底部	-	-	(4.2)	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	底部片	
30	弥生土器	器台	17.6	-	(3.2)	鈍橙 (7.5YR6/4)	鈍橙 (7.5YR6/4)	良好	口縁部1/6	
31	弥生土器	鉢	-	-	3.4	(3.9) 鈍橙 (7.5YR6/4)	鈍褐 (7.5YR5/3)	良好	底部1/3	
32	弥生土器	脚部	-	12.8	(5.85)	鈍黄 (10YR6/4)	灰黄褐 (10YR6/2)	良好	脚部1/3強	
33	土師器	杯	13.8	9.3	3.9	鈍橙 (7.5YR6/4)	鈍橙 (7.5YR6/4)	良好	口縁1/4	
34	土師器	皿	14.0	11.1	1.2	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	ほぼ完形	
35	土師器	鍋	31.6	-	(11.3)	明黄褐 (10YR7/6)	鈍黄 (10YR6/4)	良好	1/3	
36	備前焼	擂鉢	-	-	(5.7)	赤褐 (10R4/3)	赤褐 (10R4/3)	良好	口縁部片	
37	肥前	碗	-	-	5.1	(2.9) 素地:灰黄 (2.5Y6/2)、釉葉灰白 (2.5Y8/2)	素地灰黄 (2.5Y6/2)、釉葉灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	高台残	

玉類

掲載番号	出土層位	材質	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	色調	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径				
J 1	玄室	水晶	丸玉	14.0	14.0	10.0	3.5	3.04	透明	完形	
J 2	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	5.0	2.0	0.45	コバルトブルー	完形	
J 3	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	5.0	2.0	0.41	コバルトブルー	完形	
J 4	玄室	ガラス	小玉	7.0	7.0	5.5	2.0	0.38	コバルトブルー	完形	
J 5	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	5.5	2.0	0.41	コバルトブルー	完形	
J 6	玄室	ガラス	小玉	7.0	7.0	6.0	2.0	0.40	コバルトブルー	完形	
J 7	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	6.0	1.0	0.52	コバルトブルー	完形	
J 8	玄室	ガラス	小玉	7.5	7.5	6.0	1.5	0.47	コバルトブルー	完形	
J 9	玄室	ガラス	小玉	7.5	7.5	6.0	1.5	0.41	コバルトブルー	完形	
J 10	玄室集中部	ガラス	小玉	8.0	8.0	5.0	1.5	0.47	コバルトブルー	完形	
J 11	玄室集中部	ガラス	小玉	8.0	8.0	6.0	2.0	0.43	コバルトブルー	完形	
J 12	玄室奥右	ガラス	小玉	7.0	7.0	4.5	1.5	0.33	コバルトブルー	完形	
J 13	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	4.0	1.5	0.32	コバルトブルー	完形	
J 14	玄室	ガラス	小玉	7.5	7.5	4.5	2.0	0.32	コバルトブルー	完形	
J 15	玄室前中	ガラス	小玉	8.0	8.0	4.0	2.0	0.28	コバルトブルー	完形	
J 16	玄室1号棺?	ガラス	小玉	8.0	8.0	4.0	2.0	0.33	コバルトブルー	一部欠損	
J 17	玄室	ガラス	小玉	7.5	7.5	6.0	2.0	0.48	コバルトブルー	完形	
J 18	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	6.5	2.0	0.55	コバルトブルー	完形	
J 19	玄室	ガラス	小玉	7.0	7.0	5.5	1.0	0.39	コバルトブルー	完形	
J 20	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	4.5	2.0	0.42	コバルトブルー	完形	
J 21	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	5.0	2.0	0.43	コバルトブルー	完形	
J 22	玄室	ガラス	小玉	7.0	7.0	6.0	1.0	0.40	コバルトブルー	完形	

掲載番号	出土層位	材質	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
J 23	玄室	ガラス	小玉	7.0	7.0	5.0	2.0	0.35	コバルトブルー	半分
J 24	玄室	ガラス	小玉	8.0	8.0	3.0	3.0	0.29	コバルトブルー	完形
J 25	玄室	ガラス	小玉	7.0	7.0	3.5	1.5	0.27	コバルトブルー	完形
J 26	羨道第1群	ガラス	小玉	8.0	8.0	3.0	2.0	0.26	コバルトブルー	完形
J 27	羨道第1群	ガラス	小玉	7.0	7.0	4.0	2.0	0.26	コバルトブルー	完形
J 28	玄室	ガラス	小玉	6.5	6.5	3.5	1.5	0.20	コバルトブルー	完形
J 29	羨道第1群	ガラス	小玉	5.0	5.0	3.0	1.0	0.07	セルリアンブルー	完形
J 30	玄室奥右	ガラス	小玉	5.0	5.0	3.5	1.5	0.10	淡いグリーン	完形
J 31	羨道第1群	ガラス	小玉	4.0	4.0	2.0	1.0	0.04	コバルトブルー	完形
J 32	玄室集中部	ガラス	小玉	4.0	4.0	2.0	1.0	0.04	コバルトブルー	完形
J 33	羨道第1群	ガラス	小玉	4.0	4.0	2.0	1.0	0.03	コバルトブルー	完形

金属製品

掲載番号	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	耳環	鉄地金銅貼	34.5	31.0	9.0	32.71	ほぼ完形	玄室
M2	耳環	鉄地金銅貼	33.5	31.0	9.3	29.08	ほぼ完形	羨道第1群
M3	耳環	鉄地金銅貼	34.5	31.5	9.0	28.05	ほぼ完形	玄室
M4	耳環	銀	20.5	17.3	3.0	0.36	ほぼ完形	玄室
M5	鞘尻	鉄	34.0	31.0	1.5	12.73		玄室
M6-1	鞘尻	鉄	42.0	(15.0)	17.0 (2.0~5.0)			玄室
M6-2	鞘尻	鉄	5.0		3.0			
M7	刀子	鉄	56.5	11.0	3.5	5.62		玄室
M8	刀子	鉄	25.0	16.0	3.0	3.20		羨道第1群③
M9	刀(柄)	鉄				7.53		玄室
M10	刀子	鉄	29.0	12.0	5.0	3.56		玄室
M11	刀子	鉄	93.0	29.0	5.0	51.65		羨道第1群③
M12	刀	鉄	217.5	30.0	6.0	77.13		玄室
M13	刀子	鉄	29.0	20.0	3.0	6.63		羨道第1群③
M14	鎌	鉄		7.0	3.0	12.45		玄室
M15	鎌	鉄	156.0	7.0	4.0	8.71		玄室
M16	鎌	鉄	151.0	10.3	3.5	6.65	ほぼ完形	玄室
M17	鎌	鉄	159.5	11.0	5.0	6.91	ほぼ完形	玄室
M18	鎌	鉄	150.0	6.6	6.0	9.44	ほぼ完形	玄室
M19	鎌	鉄	124.0	9.0	2.0	3.56	ほぼ完形	玄室
M20	鎌	鉄	113.0	9.0	3.0	3.44	ほぼ完形	玄室
M21	鎌	鉄	108.0	10.0	3.0	4.05	ほぼ完形	玄室
M22	鎌	鉄	109.0	8.0	2.0	3.34		玄室
M23	鎌	鉄	141.0	4.0	3.0	5.85		玄室
M24	鎌	鉄	32.0	8.0		0.90		玄室
M25	鎌	鉄	57.0	8.0	4.0	3.90		玄室
M26	鎌	鉄	19.6	9.0	2.4	0.85		玄室
M27	鎌	鉄	37.0	7.0	3.0	1.85		玄室
M28	鎌	鉄	53.0	2.0	2.0	2.03		玄室
M29	鎌	鉄	41.0	4.0	2.0	1.44		玄室
M30	鎌	鉄	16.0、17.0	3.0	2.0	0.85		玄室
M31	鎌	鉄	112.5	24.0	4.0	14.91	ほぼ完形	玄室
M32	鎌	鉄	111.0	20.0	3.5	14.51	ほぼ完形	玄室
M33	鎌	鉄	50.0	38.5	2.5	5.49		玄室
M34	釘	鉄	159.0	13.0	8.0	42.36	ほぼ完形	玄室
M35	釘	鉄	143.0	9.0	7.0	37.58	ほぼ完形	玄室
M36	釘	鉄	124.5	9.7	6.3		ほぼ完形	玄室
M37	釘	鉄	127.5	9.5	8.5	27.47	ほぼ完形	玄室
M38	釘	鉄	116.0	9.0	6.0	22.80	ほぼ完形	玄室
M39	釘	鉄	130.2	16.5	9.0	27.22	ほぼ完形	玄室
M40	釘	鉄	151.0	12.0	7.0	44.63	ほぼ完形	羨道第1群①
M41	釘	鉄	145.0	8.0	6.0	29.68	ほぼ完形	玄室
M42	釘	鉄	(102.7)	8.8	5.7	17.67	ほぼ完形	玄室
M43	釘	鉄	88.0	9.8	7.2	8.88	ほぼ完形	玄室
M44	釘	鉄	108.0	8.3	5.0	18.22	ほぼ完形	玄室
M45	釘	鉄	122.0	9.0	5.0	16.68	ほぼ完形	玄室
M46	釘	鉄	99.0	8.2	5.0	14.14	ほぼ完形	玄室
M47	釘	鉄	100.3	9.0	5.0	13.95	ほぼ完形	玄室
M48	釘	鉄	107.0	8.0	6.0	23.38	ほぼ完形	玄室
M49	釘	鉄	106.0	11.0	7.0	21.10	ほぼ完形	玄室
M50	釘	鉄	65.0	10.0	7.0	14.95		玄室
M51	釘	鉄	59.0	10.0	5.0	9.39		玄室
M52	釘	鉄	80.0	9.0	4.0	14.85		玄室
M53	釘	鉄	34.0	10.0	4.5	5.58		玄室
M54	釘	鉄	91.0	10.0	5.0	14.58		玄室
M55	釘?	鉄	118.0	8.0	4.0	14.44		玄室
M56	釘	鉄	143.0	10.0	7.0	41.32	ほぼ完形	羨道第1群
M57	鍵	鉄		10.0	4.0	17.40		玄室
M58	鍵	鉄		9.5	4.3	16.53		玄室
M59	鍵	鉄		11.0	5.0	12.60		玄室
M60	鍵	鉄		9.0	5.0	10.15		玄室
M61	鍵	鉄						玄室
M62	鍵	鉄		9.0	3.0	7.32		玄室
M63	鍵	鉄		9.5	2.6	3.39		玄室
M64	鍵	鉄		12.0	3.4	7.25		玄室
M65	釘か鍵	鉄				3.06		玄室

掲載番号	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径			
M66	鏡	鉄	22.0	13.0	5.0		3.71		玄室
M67	不明	鉄	(35.7)	10.8	3.9		2.44		玄室
M68	不明	鉄	(50.0)	16.0	11.8		11.54		玄室
M69	和鏡	青銅	104.0	104.0	0.5~1.0		50.73		石室内中世墓

粟井大塚古墳群

土器

掲載番号	種別	器種	計測値cm			色調		焼成	残存状況	備考
			口径	底径	器高	内面	外面			
1	須恵器	環蓋	15.00	-	4.80	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	完形	
2	須恵器	環蓋	14.40	-	3.80	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	完形	
3	須恵器	環蓋	14.05	-	4.15	暗青灰 (5BG4/1)	暗青灰 (5BG4/1)	堅緻	完形	
4	須恵器	環蓋	14.00	-	4.00	灰黃褐 (10YR5/2)	灰黃褐 (10YR5/2)	良好	完形	
5	須恵器	環蓋	13.70	-	3.50	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	完形	
6	須恵器	環蓋	13.50	-	4.60	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y7/2)	良好	完形	
7	須恵器	環蓋	13.10	-	5.00	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	良好	完形	
8	須恵器	環蓋	13.10	-	4.25	灰 (N6/1)	灰 (N6/1)	堅緻	完形	
9	須恵器	環蓋	12.60	-	3.50	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	完形	
10	須恵器	環蓋	12.30	-	3.70	暗青灰 (5BG4/1)	暗青灰 (5BG4/1)	良好	完形	
11	須恵器	环身	13.20	-	4.10	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	緻密	ほぼ完形	
12	須恵器	环身	12.30	11.75	3.65	灰白色 (N7/)	灰白色 (N7/)	堅緻	完形	
13	須恵器	环身	12.20	-	3.70	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	底部1/3	前庭部出土
14	須恵器	环身	11.90	-	3.70	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	完形	
15	須恵器	环身	12.25	11.55	3.50	明青灰色 (5B7/1)	明青灰色 (5B7/1)	堅緻	ほぼ完形	
16	須恵器	环身	12.40~11.10	-	4.40	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	良好	完形	
17	須恵器	环身	12.30	-	4.90	灰 (N6/)	灰黄 (2.5Y7/2)	良好	完形	
18	須恵器	环身	12.50	-	4.60	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	緻密	完形	
19	須恵器	环身	11.90	6.00	4.20	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	完形	
20	須恵器	环身	11.60	-	3.70	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	完形	
21	須恵器	环身	11.30	-	3.50	灰 (N4/)	灰 (N4/)	良好	完形	
22	須恵器	高杯	12.50	-	16.00	暗灰 (N3/)	暗灰 (N3/)	良好	ほぼ完形	
23	須恵器	高杯	11.20	10.30	14.60	灰 (N4/)	灰 (N6/)	良好	完形	
24	須恵器	高杯	12.70	-	(3.80)	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	坏部のみ	
25	須恵器	高杯	8.80	7.90	9.25~8.90	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	完形	
26	須恵器	高杯	8.25	6.90	7.90~7.95	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	堅緻	完形	
27	須恵器	高杯	11.20	9.10	11.00	灰 (N4/)	灰 (N5/)	良好	杯部1/2	前庭・閉塞部出土
28	須恵器	环蓋	8.80	-	3.50	灰 (5N/)	灰 (5N/)	緻密	ほぼ完形	
29	須恵器	題	11.60	-	15.10	灰 (N4/)	灰黄 (2.5Y7/2)	良好	口縁部2/3	閉塞
30	須恵器	短頸壺	7.10	-	7.70	灰白 (N5/)	灰白 (N5/)	良好	完形	
31	須恵器	短頸壺	6.15	-	7.15	明青灰色 (5B7/1)	明青灰色 (5B7/1)	堅緻	完形	
32	須恵器	短頸壺	6.75	-	7.55	灰 (N6~N5)	灰 (N6~N5)	堅緻	完形	
33	須恵器	短頸壺	6.30	-	6.70	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	完形	
34	須恵器	堤瓶	7.00	-	18.25	暗青灰 (5B4/1)	暗青灰 (5B4/1)	堅緻	ほぼ完形	
35	須恵器	堤瓶	10.45	-	25.60	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	完形	
36	須恵器	堤瓶	5.75	-	18.95	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	緻密	ほぼ完形	
37	須恵器	堤瓶	5.30	-	18.70	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	口縁部1/2	
38	須恵器	堤瓶	-	-	(18.20)	灰 (N5/)	灰 (N5/)	良好	口縁部欠	T5
39	須恵器	平瓶	6.90	-	(5.30)	灰 (N4/)	灰 (N4/)	良好	口縁部1/2	石室付近水田
40	須恵器	平瓶	4.30	4.20	9.10	褐灰 (10YR6/1)	褐灰 (10YR6/1)	緻密	完形	
41	須恵器	平瓶	4.30	5.50	10.30	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	良好	完形	
42	須恵器	甕	21.00	-	(36.40)	灰 (N5/)	黄灰 (2.5Y5/1)	良好	口縁部1/7	前庭～狭道
43	須恵器	甕	22.70	-	48.10	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	口縁部1/4	前庭～狭道
44	土師器	甕	22.00	-	(25.30)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	橙 (5YR6/6)	良好	肩部1/9弱	
45	土師器	甕	23.30	-	(10.40)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	口縁部1/7	閉塞
46	繩文土器	鉢	-	-	(2.70)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	口縁部破片	排土
47	繩文土器	鉢	-	-	(4.80)	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (10YR7/4)	良好	破片	集石
48	弥生土器	高杯	23.60	-	(3.70)	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	口縁部1/6	満1
49	弥生土器	甕	16.60	-	(3.00)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (10YR7/4)	良好	口縁部1/9	満1
50	土師器	甕	15.60	-	(5.50)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	口縁部1/6	満1
51	土師器	甕	15.90	-	(2.70)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	口縁部1/4	
52	亀山焼	甕	43.80	-	-	灰 (5Y5/1)	灰黄 (2.5Y7/2)	良好	口縁部1/4	

玉類

掲載番号	材質	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	色調	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
J 1	土製	練玉	7.3	7.6	7.3	1.5	0.39	黒 (N2/)	完形	玄室内玉 1
J 2	土製	練玉	7.9	8.0	6.3	1.4	0.42	暗灰 (N3/)	ほぼ完形	玄室内玉 2
J 3	土製	練玉	7.7	7.7	5.8	1.8	0.34	暗灰 (N3/)	完形	玄室内玉 3
J 4	土製	練玉	7.3	7.8	8.0	1.3	0.43	暗灰 (N3/)	完形	玄室内玉 4
J 5	土製	練玉	8.0	8.4	6.1	1.6	0.41	暗灰 (N3/)	完形	玄室内玉 5
J 6	土製	練玉	8.7	8.1	7.2	1.8	0.55	暗灰 (N3/)	完形	玄室内玉 6
J 7	土製	練玉	8.0	8.0	6.8	1.9	0.44	暗灰 (N3/)	-一部欠損	玄室内玉 7
J 8	土製	練玉	8.4	8.1	6.7	1.4	0.46	黒 (N2/)	完形	玄室内玉 8
J 9	土製	練玉	8.1	8.0	6.0	1.3	0.38	暗灰 (N3/)	-一部欠損	玄室内玉 9
J 10	土製	練玉	8.2	8.0	6.7	1.2	0.43	黒 (N2/)	完形	玄室内玉 10
J 11	土製	練玉	8.2	8.9	6.7	1.9	0.48	暗灰 (N3/)	完形	玄室内玉 11
J 12	土製	練玉	8.7	8.5	6.9	1.8	0.46	暗灰 (N3/)	ごく一部欠損	玄室内玉 12

掲載番号	材質	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	色調	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
J 13	土製	練玉	7.6	7.3	6.6	2.0	0.32	黒 (N2/)	一部欠損	玄室内玉13
J 14	土製	練玉	7.8	7.7	6.0	1.3	0.41	黒 (N2/)	一部欠損	玄室内
J 15	土製	練玉	7.2	7.3	6.8	1.2	0.40	暗灰 (N3/)	一部欠損	玄室底水洗
J 16	土製	練玉	7.6	8.2	5.9	2.0	0.34	黒 (N2/)	完形	玄室底水洗
J 17	土製	練玉	7.9	7.9	5.9	1.3	0.36	暗灰 (N3/)	完形	玄室底水洗
J 18	土製	練玉	8.1	7.6	6.0	1.6	0.40	暗灰 (N3/)	ごく一部欠損	玄室底水洗
J 19	土製	練玉	7.8	7.4	6.2	1.2	0.37	暗灰 (N3/)	完形	玄室底水洗
J 20	土製	練玉	7.7	7.5	7.8	1.3	0.49	暗灰 (N3/)	一部欠損	玄室底水洗
J 21	土製	練玉	8.4	7.9	6.1	1.3	0.41	黒 (N2/)	完形	玄室底水洗
J 22	土製	練玉	7.2	6.5	7.9	1.9	0.36	暗灰 (N3/)	完形	玄室底水洗
J 23	土製	練玉	7.9	7.9	6.5	1.3	0.39	暗灰 (N3/)	完形	玄室底水洗
J 24	土製	練玉	7.6	8.1	6.3	1.2	0.39	黒 (N2/)	一部欠損	玄室内水洗
J 25	土製	練玉	8.2	8.0	6.2	1.4	0.42	暗灰 (N3/)	完形	玄室内水洗
J 26	土製	練玉	7.7	8.0	6.0	1.3	0.42	暗灰 (N3/)	ほぼ完形	玄室内水洗
J 27	土製	練玉	(5.1)	7.7	6.1	1.6	0.24	黒 (N2/)	1/2残存	玄室内水洗
J 28	土製	練玉	8.4	7.8	5.7	1.6	0.37	暗灰 (N3/)	ごく一部欠損	玄室内水洗
J 29	土製	練玉	8.0	8.0	6.5	1.6	0.42	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 30	土製	練玉	8.2	8.0	6.7	1.8	0.42	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 31	土製	練玉	8.0	8.1	6.3	1.5	0.46	暗灰 (N3/)	ほぼ完形	玄室内
J 32	土製	練玉	7.5	7.4	6.5	1.1	0.39	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 33	土製	練玉	8.4	8.0	7.1	1.2	0.48	暗灰 (N3/)	ごく一部欠損	玄室内
J 34	土製	練玉	8.4	8.5	6.7	1.3	0.47	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 35	土製	練玉	7.4	7.3	6.3	1.2	0.32	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 36	土製	練玉	8.1	8.7	7.8	1.5	0.55	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 37	土製	練玉	8.0	7.8	7.0	1.2	0.47	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 38	土製	練玉	7.7	7.6	6.6	1.2	0.42	暗灰 (N3/)	一部欠損	玄室内
J 39	土製	練玉	8.1	8.3	6.0	1.7	0.37	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 40	土製	練玉	8.1	8.0	6.3	1.3	0.35	暗灰 (N3/)	1/4欠損	玄室内
J 41	土製	練玉	8.3	8.0	6.8	1.5	0.46	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 42	土製	練玉	8.1	8.5	6.9	1.2	0.48	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 43	土製	練玉	8.7	8.4	6.3	1.4	0.44	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 44	土製	練玉	8.2	7.9	7.7	1.2	0.49	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 45	土製	練玉	8.3	8.3	7.4	1.4	0.50	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 46	土製	練玉	8.0	8.1	(5.2)	1.3	0.22	暗灰 (N3/)	1/3残存	玄室内
J 47	土製	練玉	7.5	8.3	5.6	1.3	0.38	暗灰 (N3/)	ごく一部欠損	玄室内
J 48	土製	練玉	8.0	8.1	(6.5)	1.6	0.36	暗灰 (N3/)	1/2残存	玄室内
J 49	土製	練玉	7.2	7.8	6.4	1.2	0.36	黒 (N2/)	ごく一部欠損	玄室内
J 50	土製	練玉	8.0	8.0	6.9	1.5	0.39	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 51	土製	練玉	8.0	8.1	6.0	1.3	0.38	暗灰 (N3/)	1/4欠損	玄室内
J 52	土製	練玉	7.6	7.6	6.7	1.1	0.39	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 53	土製	練玉	8.4	7.9	6.2	1.8	0.42	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 54	土製	練玉	7.9	7.3	6.2	1.3	0.43	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 55	土製	練玉	7.2	7.5	6.7	1.1	0.36	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 56	土製	練玉	7.8	8.2	5.9	1.2	0.41	暗灰 (N3/)	完形	玄室内
J 57	土製	練玉	7.6	8.4	7.6	1.5	0.37	暗灰 (N3/)	1/5欠損	玄室内
J 58	土製	練玉	(4.6)	8.4	6.3	1.4	0.24	暗灰 (N3/)	1/2残存	玄室内

金属製品

掲載番号	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	耳環	銅	22.0	23.3	4.4	5.67	完形 (金箔? 部分ほぼ残存)	
M2	耳環	銅	21.6	23.9	4.0	4.88	完形 (金箔? 部分1/2残存)	
M3	耳環	銅	23.0	23.4	3.5	2.39	完形 (金の部分ごく僅かに残存)	
M4	耳環	銅	31.1	35.6	9.5	34.67	完形 (金の部分不明瞭)	
M5	耳環	銅	32.0	36.0	9.3	33.90	完形 (金の部分不明瞭)	
M6	耳環	銅	28.8	30.9	7.9	26.60	完形 (金の部分不明瞭、一部光沢あり)	
M7	両頭金具	鉄	31.0	10.0	6.0	2.50	ほぼ完形	
M8	両頭金具	鉄	36.0	10.0	8.0	3.71	ほぼ完形	
M9	刀子	鉄	(94.0)	18.0	8.0	23.01	刃部の一部残存 (僅かに閔付近あり)	52と接合
M10	刀子	鉄	(54.0)	14.0	4.0	7.30	刃部欠損	
M11	刀子	鉄	(56.0)	10.0	4.0	6.74	茎部残存・閔付近一部残存	
M12	不明	鉄	(46.0)	(11.0)	(4.0)	4.10	全周欠損?	
M13	鎌	鉄	(85.0)	14.0	7.0	26.54	鎌身部の一部・頸部・茎部のごく僅か残存	
M14	鎌	鉄	(29.0)	20.0	4.0	3.92	鎌身部の一部残存?	
M15	鎌	鉄	(19.0)	22.0	3.0	2.15	下端部欠損	
M16	釘	鉄	(28.0)	5.0	4.0	1.56	上・下端部欠損	
M17	釘	鉄	(32.0)	8.0	3.0	2.53	上端部欠損	
M18	釘	鉄	(37.0)	12.0	5.0	8.13	頸部付近残存	
M19	釘	鉄	(41.0)	12.0	4.0	8.01	上・下端部欠損	
M20	釘	鉄	(26.0)	18.0	5.0	4.83	鎌身部の一部残存	
M21	釘	鉄	(39.0)	10.0	5.0	6.88	上端部欠損	
M22	釘	鉄	101.0	12.0	5.0	24.85	完形?	
M23	釘	鉄	100.0	14.0	4.0	18.75	ほぼ完形 (上端部一部欠損)	
M24	釘	鉄	(100.0)	11.0	4.0	24.98	下端部欠損	3と接合
M25	釘	鉄	(92.0)	11.0	4.0	21.89	下端部欠損	27と接合
M26	釘	鉄	(90.0)	10.0	4.0	14.24	ごく一部欠損	
M27	釘	鉄	99.0	12.0	5.0	20.93	完形	44と接合
M28	釘	鉄	(101.0)	12.0	3.0	17.88	上端部欠損	
M29	釘	鉄	(94.0)	10.0	3.0	17.85	上・下端部欠損	
M30	釘	鉄	(99.0)	9.0	3.0	15.72	上・下端部欠損	46と接合
M31	釘	鉄	(85.0)	11.0	2.0	12.23	下端部欠損	

掲載番号	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M32	釘	鉄	(116.0)	10.0	5.0	25.93	ほぼ完形（下端部一部欠損）	39と接合
M33	釘	鉄	133.0	10.0	4.0	15.02	完形	36と接合
M34	釘	鉄	(115.0)	8.0	4.0	19.95	下端部欠損	25・32と接合
M35	釘	鉄	?	?	4.0	15.33	ほぼ完形（下端部僅かに欠損？）	1・48と接合
M36	釘	鉄	(63.0)	13.0	3.0	13.34	上・下端部欠損	
M37	釘	鉄	(60.0)	8.0	4.0	8.62	上・下端部欠損	
M38	釘	鉄	(58.0)	8.0	5.0	9.59	下端部欠損	
M39	釘	鉄	(61.0)	10.0	4.0	8.38	下端部欠損	
M40	釘	鉄	(58.0)	12.0	4.0	19.02	下端部欠損	
M41	釘	鉄	(54.0)	11.0	4.0	14.80	下端部欠損	
M42	釘	鉄	(45.0)	8.0	5.0	5.65	上・下端部欠損	
M43	釘	鉄	(61.0)	10.0	3.0	8.16	ほぼ欠損？	
M44	釘	鉄	(42.0)	8.0	5.0	7.12	下端部欠損	
M45	釘	鉄	(51.0)	6.0	5.0	5.10	上・下端部欠損	
M46	釘	鉄	(55.0)	10.0	4.0	13.49	下端部欠損	
M47	釘	鉄	(60.0)	6.0	3.0	6.84	上・下端部欠損	
M48	釘	鉄	(73.0)	7.0	4.0	8.11	上・下端部欠損	
M49	釘	鉄	(35.0)	8.0	3.0	2.92	上・下端部欠損	
M50	釘	鉄	(31.0)	7.0	7.0	2.50	鎌の茎部分？	
M51	釘	鉄	(28.0)	8.0	2.0	1.82	上端部欠損	
M52	釘	鉄	(23.0)	7.0	5.0	2.24	上・下端部欠損	

石製品

掲載番号	出土層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 1	羨道西旧表土	石鎌	19.5	10.0	2.0	0.3	サヌカイト	一部欠損	羨道西旧表土
S 2	埴丘西黒色土	石鎌	17.5	15.0	3.7	0.68	サヌカイト	完形	埴丘西黒色土
S 3	羨道西旧表土	石鎌	17.0	13.0	2.5	0.4	サヌカイト	一部欠損	羨道西旧表土
S 4	古墳前庭部西盛土内	石包丁	83.0	49.0	12.5	67.4	粘板岩	完形	古墳前庭部西盛土内

林原古墳群

図版 1



調査前風景（南西から）



林原5号墳
前庭部土層断面（南から）



林原5号墳
墳丘断面（北から）

図版 2

林原古墳群



林原 5 号墳
石室裏込め断面（南から）



林原 5 号墳
外護列石（南から）



林原 5 号墳
天井石（北から）



林原 5 号墳
横穴式石室（北から）



林原 5 号墳
閉塞石（南から）



林原 5 号墳
遺物出土状況（北から）

図版 4

林原古墳群



林原5・6号墳
周溝断面（南から）



林原5号墳
石室奥壁（南から）

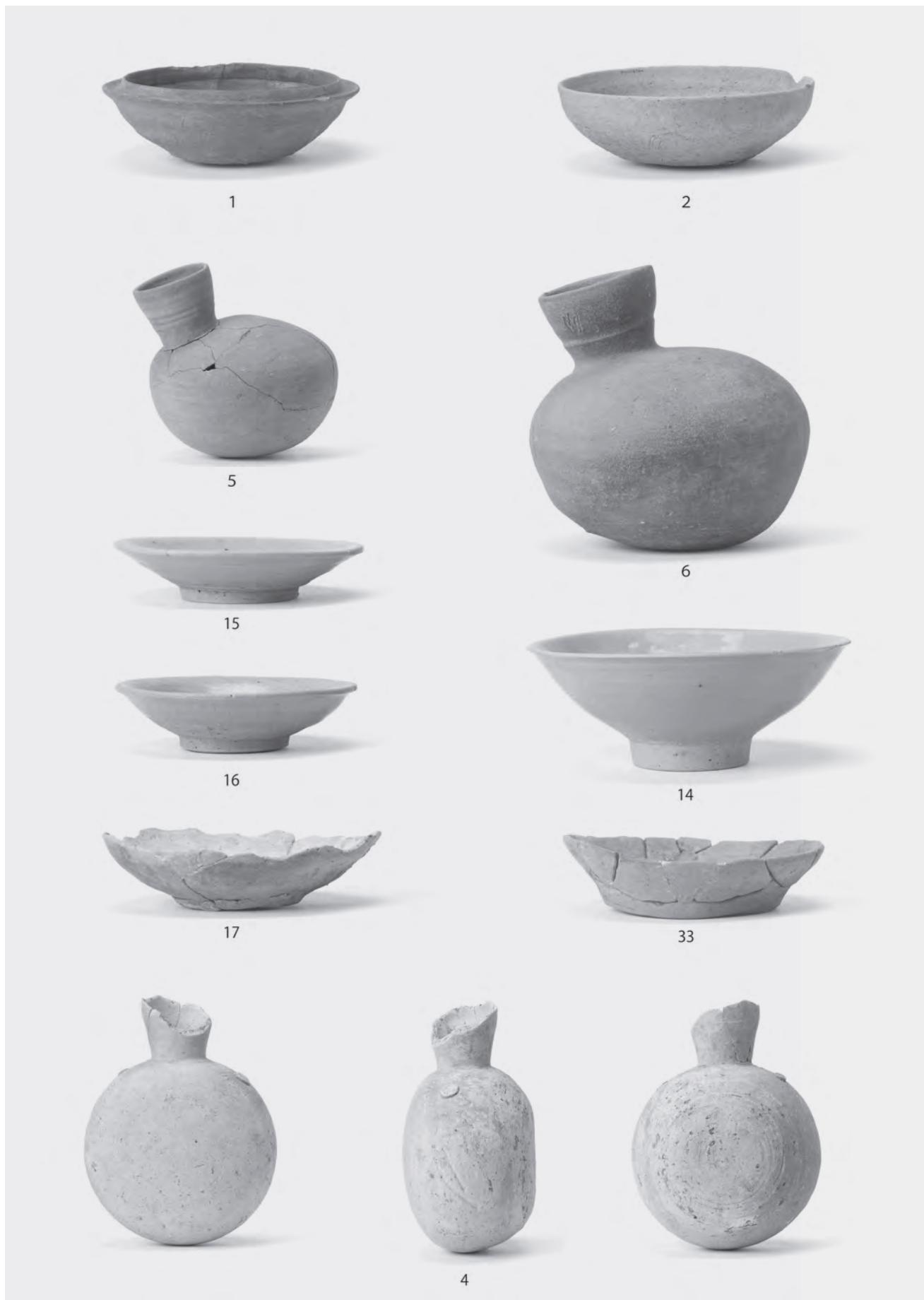


林原5号墳
石室左側壁（南東から）

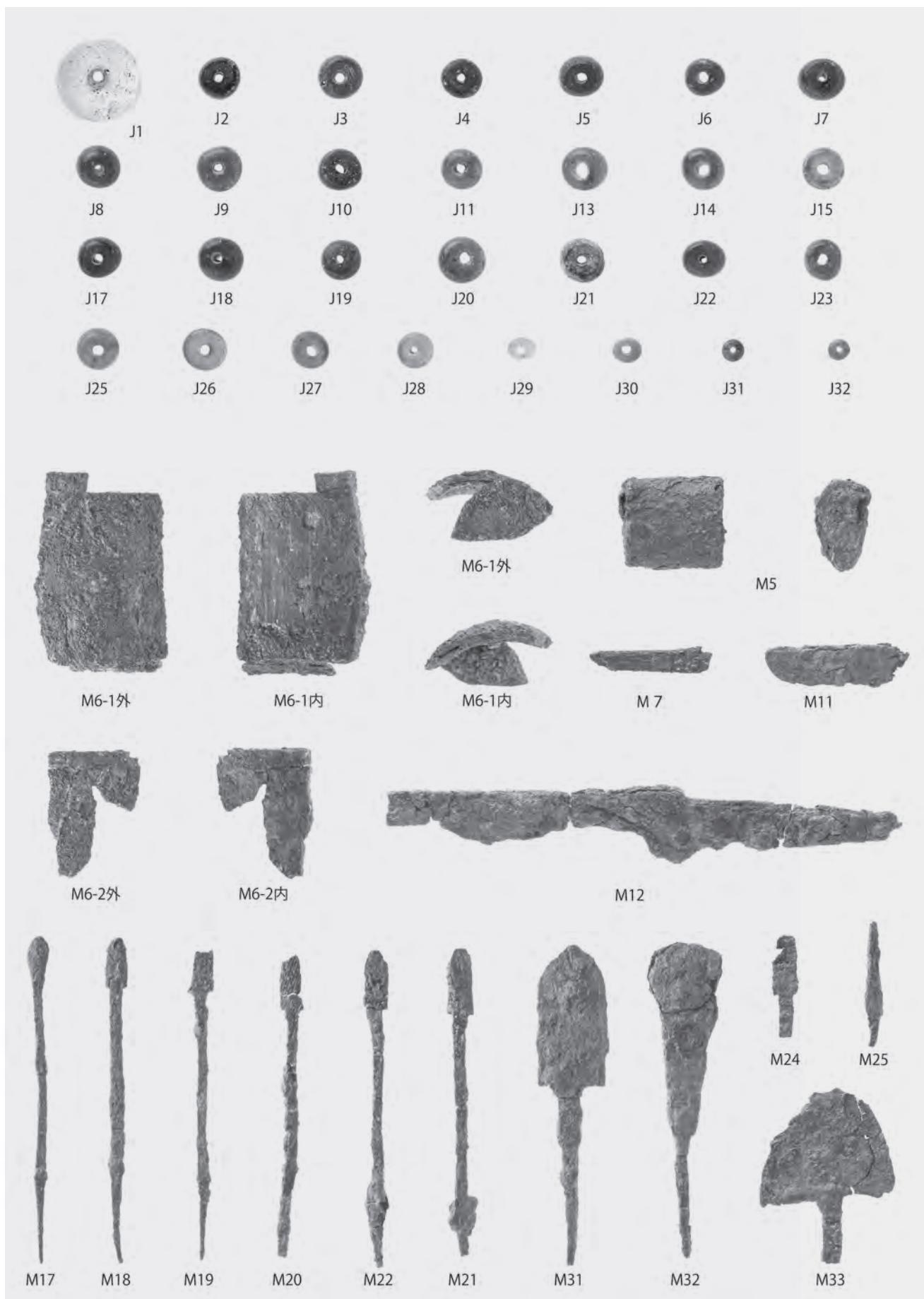


図版 6

林原古墳群



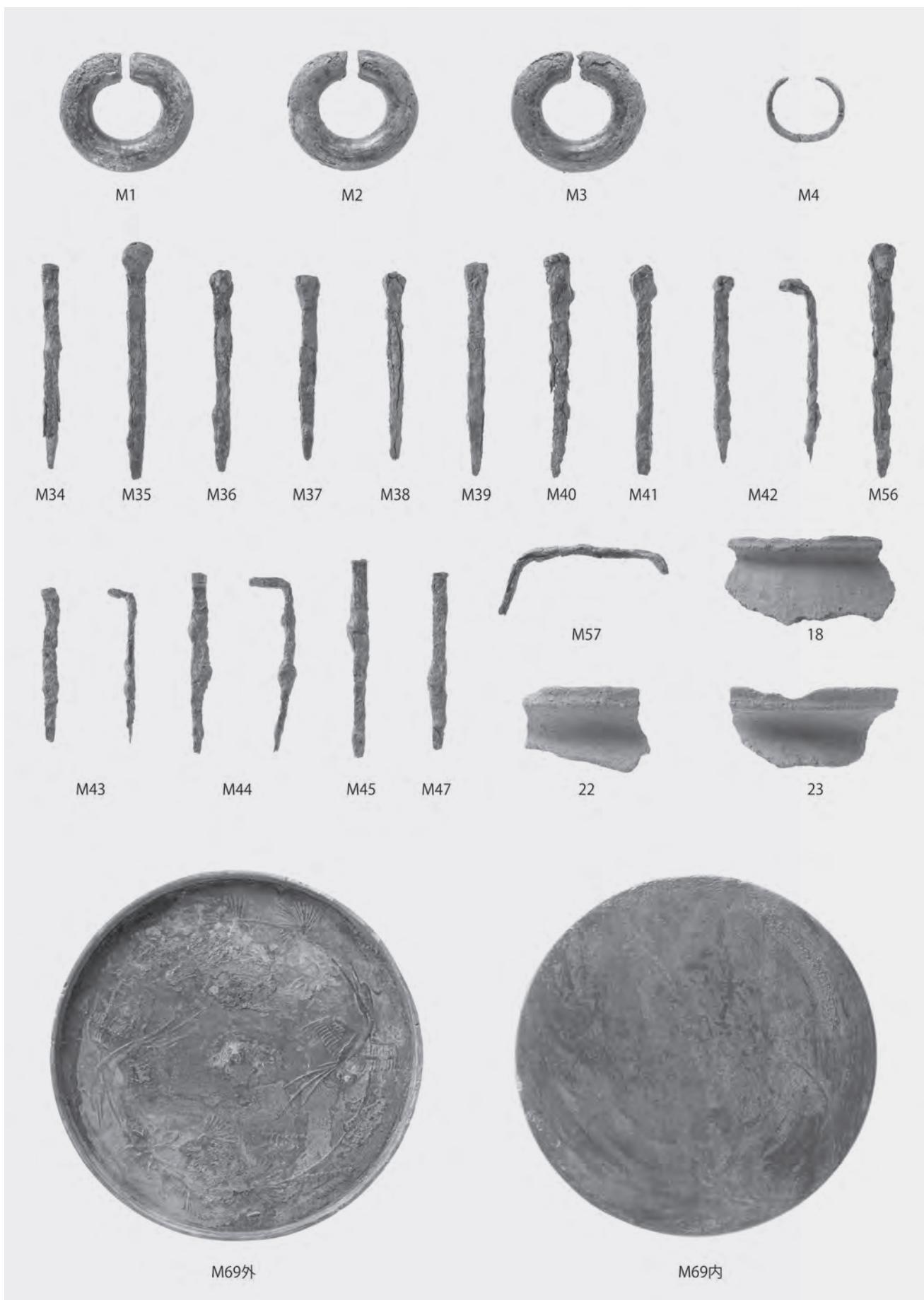
須恵器・土師器・白磁



玉類・金属製品 1

図版 8

林原古墳群



金属製品 2・弥生土器

栗井大塚古墳群

図版 9



トレンチ5（西から）



トレンチ2・3（南西から）



栗井大塚14号墳
全景（北東から）

図版 10

粟井大塚古墳群



粟井大塚 14号墳
周溝（北から）



粟井大塚 14号墳
掘り方土層断面（北東から）



粟井大塚 14号墳
西側墳端部（北西から）



栗井大塚 14 号墳
石室奥壁（北東から）



栗井大塚 14 号墳
石室左側壁（南東から）



栗井大塚 14 号墳
石室掘り方（南西から）

図版 12

粟井大塚古墳群



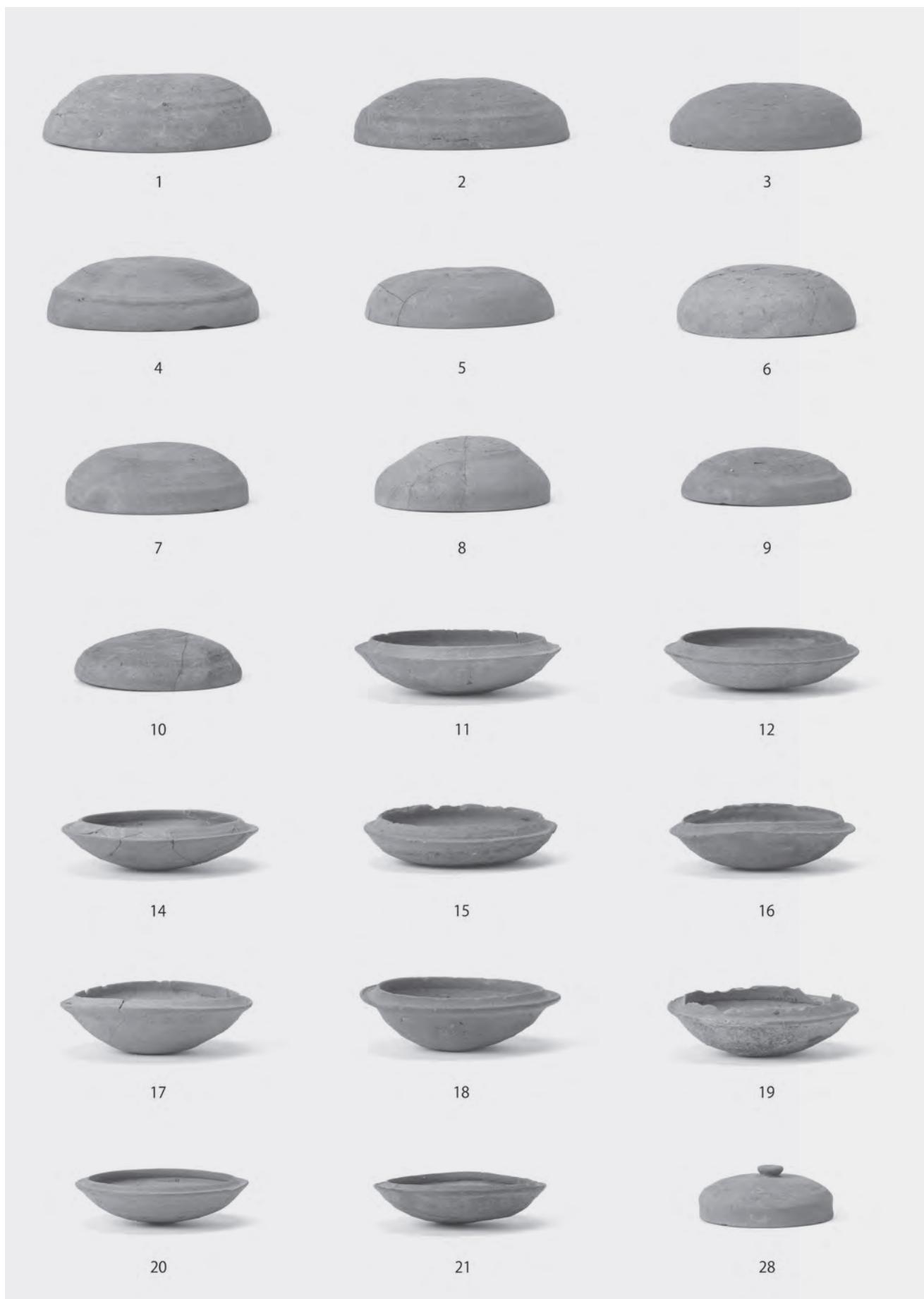
粟井大塚 14 号墳
遺物出土状況（北から）



粟井大塚 14 号墳
遺物出土状況（南東から）



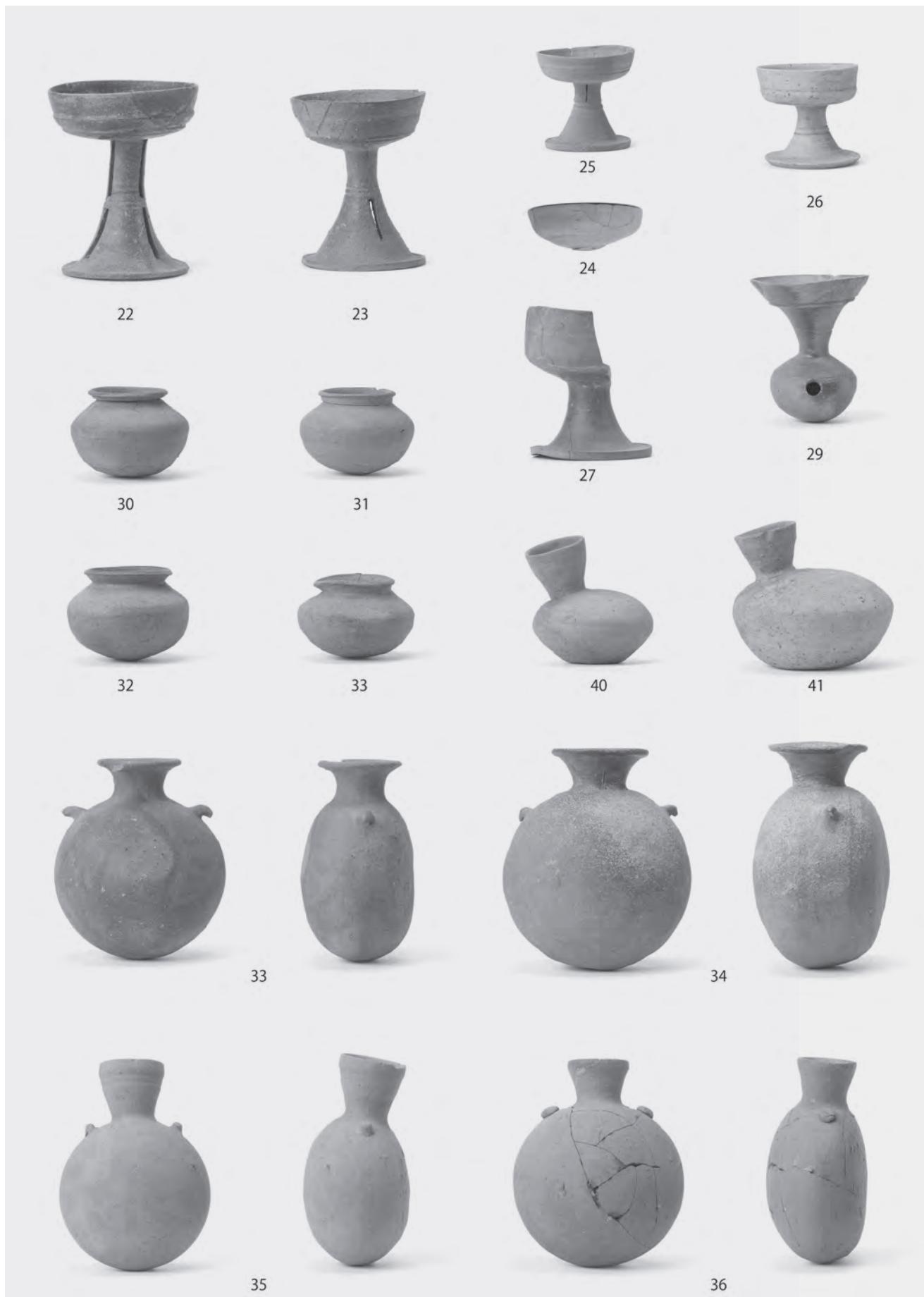
粟井大塚 14 号墳
埋葬施設 1（南東から）



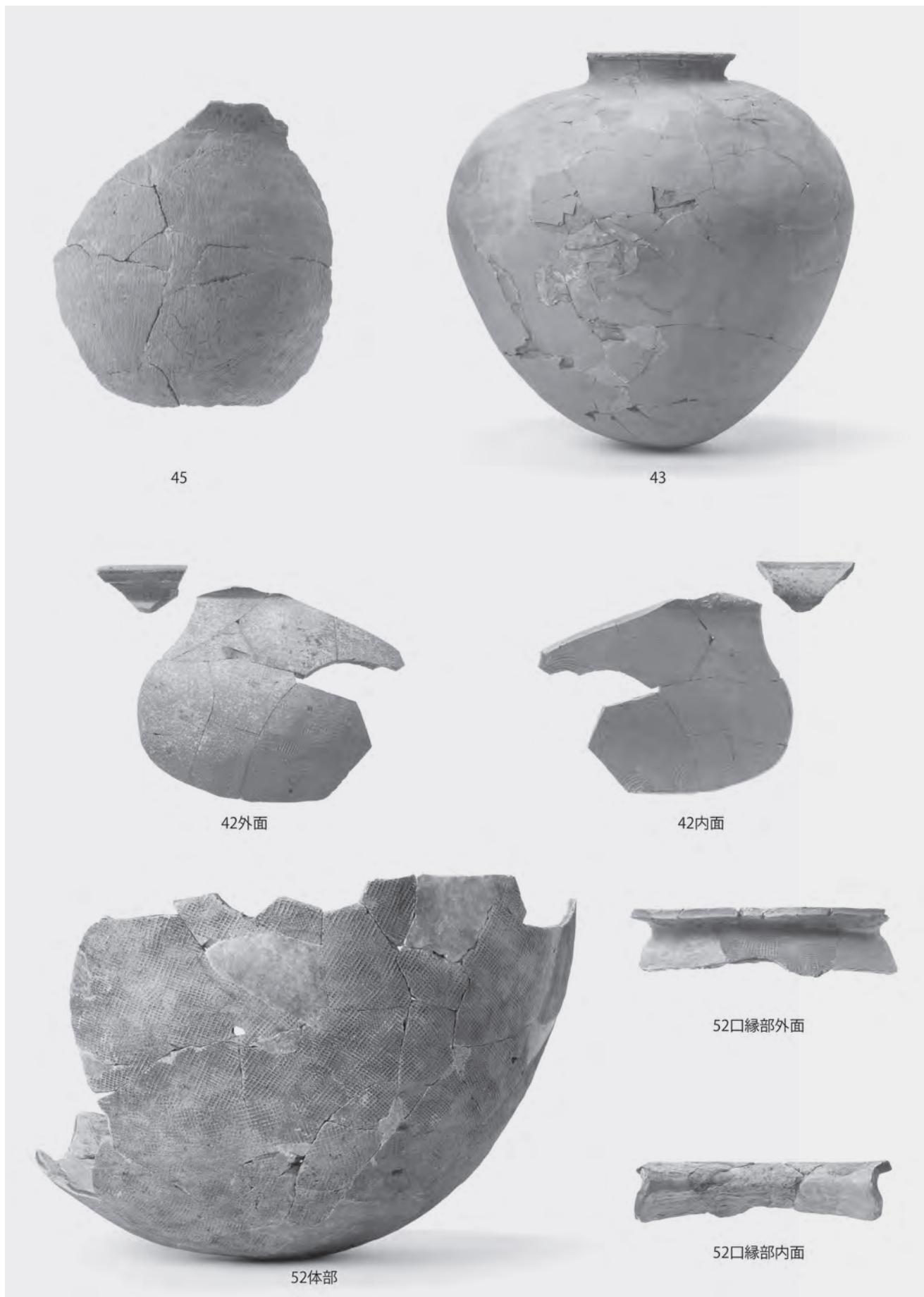
須恵器 1

図版 14

粟井大塚古墳群



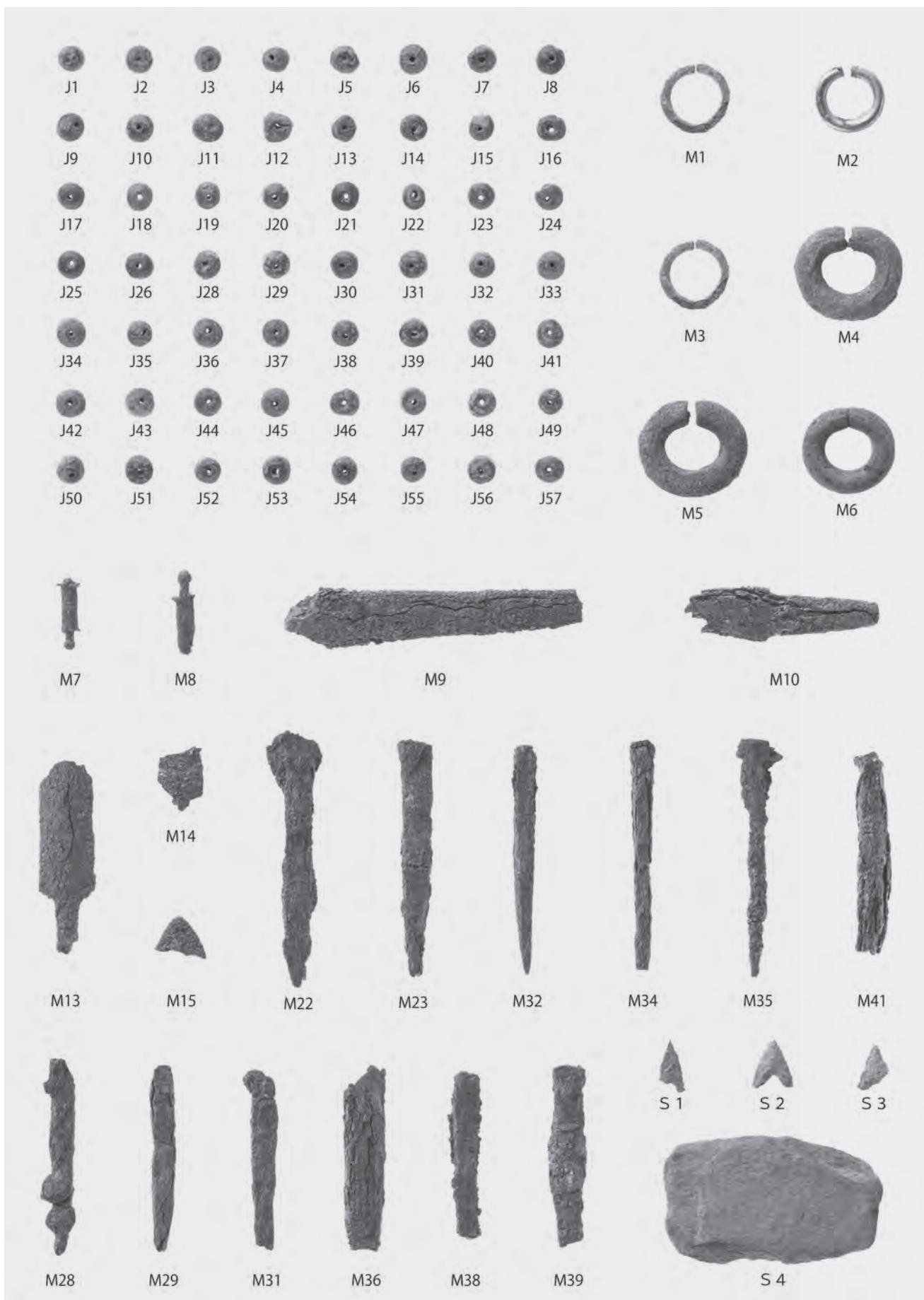
須恵器 2



須恵器 3・土師器・龜山焼

図版 16

栗井大塚古墳群



玉類・金属器・石製品

報告書抄録

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 259

林原古墳群
栗井大塚古墳群

令和4年3月18日 印刷

令和4年3月18日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5